ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIV-5

1987

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＩＶ-5

―― 蒲生郡蒲生町麻生遺跡 ――

1987

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会
教育長 飯田志農夫

例　　言

1．本書は昭和60年度県営ほ場整備事業に伴う蒲生郡蒲生町麻生遺跡の発掘調査報告書で、昭和60年度に発掘調査し、整理したものである。

2．本調査は、県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、（財）滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．発掘調査にあたっては、蒲生町教育委員会の協力を得た。

4．本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては、東京湾の平均海面を基準としている。

5．本事業の事務局は次の通りである。

昭和60年度		昭和61年度	
滋賀県教育委員会		滋賀県教育委員会	
文化財保護課長	市原　浩	文化財保護課長	服部　正
課長補佐	中正輝彦	課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通	埋蔵文化財係長	林　博通
〃　技師	葛野泰樹	〃　主任技師	葛野泰樹
管理係主事	山本徳樹	管理係主任主事	山本徳樹
（財）滋賀県文化財保護協会		（財）滋賀県文化財保護協会	
理事長	南　光雄	理事長	南　光雄
事務局長	江波弥太郎	事務局長	中島良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋	埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	大橋信弥	調査三係長	兼康保明
〃　技師	岡本武憲	〃　技師	岡本武憲
総務課長	山下　弘	総務課長	山下　弘
〃　主事	松本暢弘	〃　主任主事	立入裕子
〃　〃	泉　喜子	〃　主事	西田博之

6．本書の執事・編集は、調査担当者岡本武憲がおこなった。

7．出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序　　文

例　　言

1．はじめに …… 1

2．位置と環境 …… 1

3．調査の経過 …… 5

4．調査の結果 …… 8
(1) 遺　　構 …… 8
1号排水路地区 …… 8
2号排水路地区 …… 13
3号排水路地区 …… 15
4号排水路地区 …… 18
切土A地区 …… 18
切土B・C地区 …… 25
切土D地区 …… 35
切土E地区 …… 40
切土F地区 …… 43
切土F地区下層 …… 49
(2) 遺　　物 …… 53
縄文時代晩期 …… 53
弥生時代 …… 54
古墳時代 …… 54
奈良時代～平安時代前期 …… 59
中世前期 …… 60
中世後期 …… 72

5．まとめ …… 74

麻生遺跡の変遷 …… 74

図 版 目 次

図版 一　　蒲生町　航空写真
図版 二（上）1号排水　掘立柱建物群（東から）
（下）1号排水　掘立柱建物群（西から）
図版 三（上）1号排水　土壙2
（下）1号排水　土壙2（部分）
図版 四（上）1号排水　（西から）
（下）1号排水　竪穴住居群（東から）
図版 五（上）1号排水　竪穴住居2（南から）
（下）1号排水　竪穴住居1（東から）
図版 六（上）2号排水　全景（北から）
（下）2号排水　竪穴住居群（北から）
図版 七（上）2号排水　竪穴住居3（東から）
（下）2号排水　竪穴住居3貯蔵穴
図版 八（上）2号排水　竪穴住居4（南から）
（下）2号排水　溝19（南から）
図版 九（上）3号排水　柱穴群（南から）
（下）3号排水　柱穴群（部分）
図版 十（上）4号排水　竪穴住居10（北から）
（下）4号排水　溝23・24・25（南から）
図版十一　　切土A・B　全景
図版十二（上）切土A　掘立柱建物7（南から）
（下）切土A　掘立柱建物8（北から）
図版十三（上）切土B　溝29堰土（北から）
（下）切土A　しがらみ状遺構（西から）
図版十四　　切土B　掘立柱建物群全景
図版十五（上）切土B　掘立柱建物群（南から）
（下）切土C　掘立柱建物群（東から）
図版十六（上）切土B　柱穴15遺物出土状況
（下）切土C　柱穴167遺物出土状況
図版十七（上）切土B　土壙3・4（東から）
（下）切土B　土壙7（東から）
図版十八（上）切土B　土壙5（木棺墓・南から）
（下）切土B　井戸1
図版十九　　切土D　全景
図版二十（上）切土D　南半部（西から）
（下）切土D　北半部（南から）
図版二一（上）切土D　溜枡状遺構（東から）
（下）切土D　溜枡状遺構南壁
図版二二（上）切土D　土壙25
（下）切土D　土壙10
図版二三（上）切土D　土壙14
（下）切土D　土壙13
図版二四（上）切土D　土壙23・24
（下）切土D　土壙25
図版二五（上）切土E　西半部（西から）
（下）切土E　東半部（南から）
図版二六（上）切土E　掘立柱建物群（南から）
（下）切土E　自然流路断面
図版二七　　切土F　全景
図版二八（上）切土F　方形周溝墓群（北から）
（下）切土F　方形周溝墓群（北から）
図版二九（上）切土F　竪穴住居11（西から）
（下）切土F　竪穴住居12（南から）
図版三十（上）切土F　掘立柱建物群24・25（南から）
（下）切土F　土壙38（土壙墓・西から）
図版三一（上）切土F　掘立柱建物26（西から）
（下）切土F　掘立柱建物28（南から）
図版三二　　切土F下層　全景（縄文時代晩期）
図版三三（上）切土F下層　北半部（西から）
（下）切土F下層　北半部（部分）
図版三四（上）切土F下層　南半部（北から）
（下）切土F下層　南半部（西から）
図版三五（上）切土F下層　竪穴住居13（南から）
（下）切土F下層　竪穴住居13遺物出土状況
図版三六　　麻生遺跡出土遺物（1）
図版三七　　麻生遺跡出土遺物（2）
図版三八　　麻生遺跡出土遺物（3）
図版三九　　麻生遺跡出土遺物（4）

図版四十　麻生遺跡出土遺物（5）
図版四一　麻生遺跡出土遺物（6）
図版四二　麻生遺跡出土遺物（7）
図版四三　麻生遺跡出土遺物（8）
図版四四　麻生遺跡出土遺物（9）
図版四五　麻生遺跡出土遺物（10）
図版四六　麻生遺跡出土遺物（11）
図版四七　麻生遺跡出土遺物（12）
図版四八　麻生遺跡出土遺物（13）

挿図目次

第1図　麻生遺跡位置図
第2図　周辺遺跡分布図
第3図　調査区設定図
第4図　1号排水路地区　遺構平面図
第5図　1号排水　掘立柱建物1
第6図　1号排水　掘立柱建物2・3・4・5・6
第7図　1号排水　土壙2
第8図　1号排水　竪穴住居1・2
第9図　2号排水路地区　遺構平面図
第10図　2号排水　竪穴住居3・4・5・6
第11図　2号排水　竪穴住居3
第12図　2号排水　溝19遺物出土状況図
第13図　3号排水路地区　遺構平面図
第14図　4号排水路地区　遺構平面図
第15図　4号排水　竪穴住居10
第16図　切土A・B地区　遺構平面図
第17図　切土A・B地区　素掘り溝
第18図　切土A　掘立柱建物7・8・9
第19図　切土A・B　溝28・29・30・しがらみ状遺構断面図
第20図　切土B・C地区　遺構平面図
第21図　切土B　掘立柱建物10
第22図　切土B　掘立柱建物11
第23図　切土B　掘立柱建物12
第24図　切土B　掘立柱建物13
第25図　切土B　掘立柱建物14・15
第26図　切土B　掘立柱建物16・17・18・19・20
第27図　切土B　土壙3・4
第28図　切土B　土壙5・7・8
第29図　切土D地区　遺構平面図
第30図　切土D　溜枡状遺構
第31図　切土D　土壙8・9・10・12・14・15・23・24
第32図　切土D　土壙16・25・26・28・溝33・落ち込み3
第33図　切土E地区　遺構平面図
第34図　切土E　掘立柱建物21
第35図　切土E　掘立柱建物22・23
第36図　切土F地区　遺構平面図
第37図　切七F　素掘り溝
第38図　切土F　掘立柱建物24・25
第39図　切土F　掘立柱建物26・27・土壙38
第40図　切土F　掘立柱建物28
第41図　切土F　竪穴住居11
第42図　切土F　竪穴住居12
第43図　切土F下層　遺構平面図
第44図　切土F下層　サヌカイトチップ分布図
第45図　2号排水　溝19　出土遺物(1)
第46図　2号排水　溝19　出土遺物(2)
第47図　2号排水　溝19　出土遺物(3)
第48図　2号排水　出土遺物
第49図　1号排水　土壙2　出土遺物
第50図　切七B　土壙3・4　出土遺物
第51図　切土B　土壙5・6・7・溝31・切土C　出土遺物
第52図　切土B　柱穴　出土遺物
第53図　切土B・1号排水　出土遺物
第54図　切土D　出土遺物
第55図　切土E・F　出土遺物
第56図　切七D　出土遺物（石製品）
第57図　切土F下層　出土遺物
第58図　麻生遺跡周辺条里図
第59図　麻生遺跡掘立柱建物集成図
第60図　麻生遺跡出土土器編年図

1．は　じ　め　に

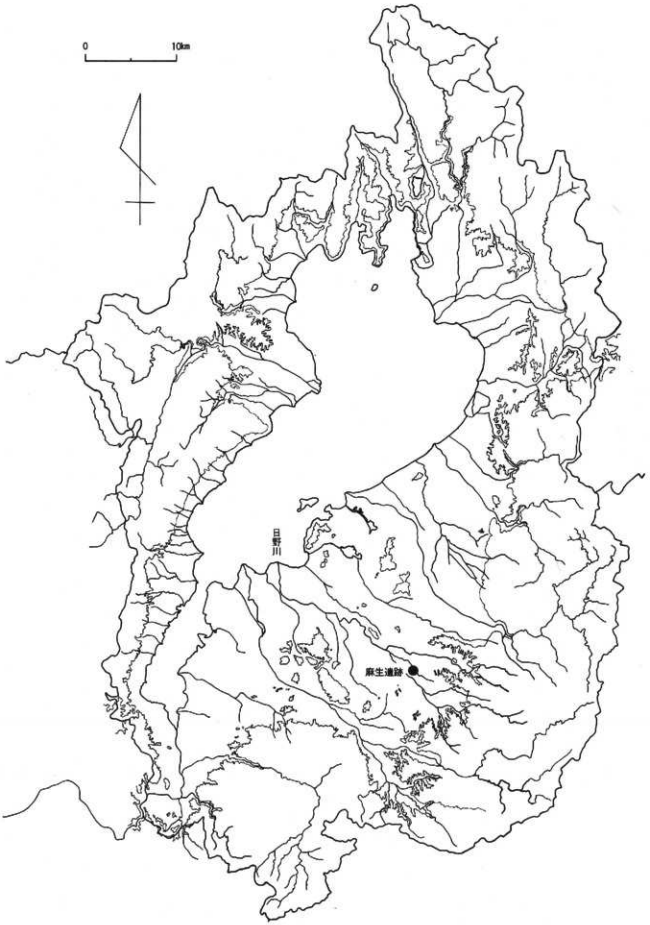
本報告は、昭和60年度県営ほ場整備事業（蒲生南部地区上麻生第１工区・岡本第４工区）に伴う蒲生郡蒲生町麻生遺跡の発掘調査の成果である。

麻生遺跡は、中世麻生荘の故地として知られている。その荘域は現在の蒲生町大字岡本・上麻生・下麻生・大森・田井にかかるとされており、下麻生所在の山部神社にはその歴史の一端を伝える山部神社文書[①]が残されている。この地にも時代の要請として農業の近代化を促すほ場整備が実施されることになった。それに先立つ昭和57年から昭和59年度にかけて、町内の遺跡分布調査がなされて麻生遺跡の存在が知られるようになった。その後、昭和59年度後半における麻生第１工区・岡本第４工区の試掘調査（県教育委員会実施）の結果、工区全域にわたり、遺構の存在することが判明した。本調査は、試掘調査の成果によって県教育委員会と県農林部が協議したうえで、切土や排水路敷において遺構の保存策が講じ得ない部分についてのみ調査することとなった。しかし、その後の工事設計の変更や、調査の進展に伴う遺構の拡がりの有無によって当初の調査範囲を大きく変更することとなった。このことは「３．調査の経過」において述べる。最終的に調査総面積は約12000㎡となった。現地調査期間は昭和60年９月から昭和61年４月にかけてである。調査の成果は後述するが、縄文時代晩期から現代まで連綿と生活の痕跡をたどれる県内でも稀有の遺跡であることが判明した。

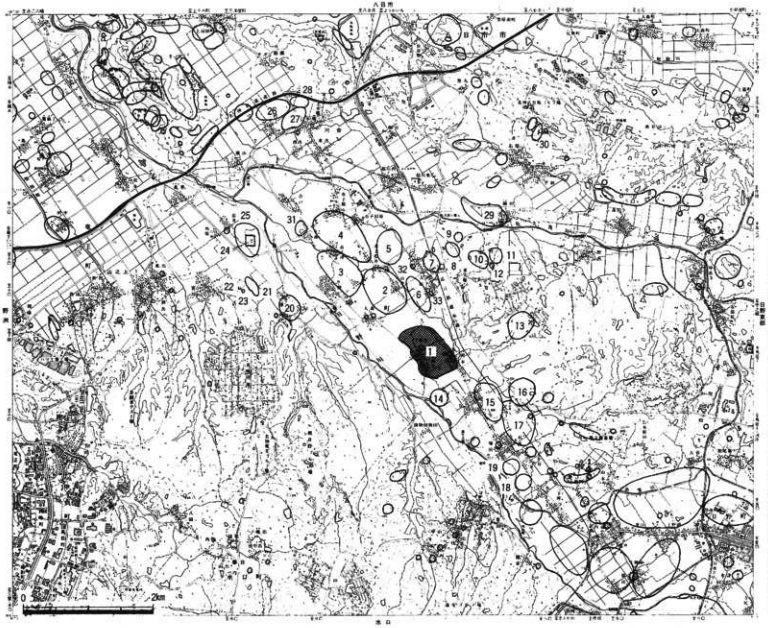
2．位 置 と 環 境

蒲生郡蒲生町は、湖東平野南部を貫流して琵琶湖へ流入する日野川を約15km遡った中流域に位置する。町の平野部は日野川と、その支流である佐久良川とによって形成された沖積低地である。この平野部を囲うように、佐久良川と日野川の間の日野丘陵、佐久良川以北の八日市丘陵（布引丘陵）、日野川以南の水口丘陵が延びる。いずれも標高200ｍ～400ｍほどの低丘陵であり、古琵琶湖層と呼ばれる粘土・礫・砂を主とした淡水成の地層によって構成されている。[②]日野川は水口丘陵と日野丘陵を侵しながら流れ、蒲生町内においては右岸に著しい河岸段丘を形成している。麻生遺跡はこの日野川右岸第２段丘上に立地しており、第１段丘との比高差は約1.5～2ｍを計る。同時期の集落遺跡は１～２km間隔で同様に日野川右岸第２段丘上に立地する。なお、麻生遺跡の標高は約129～134ｍである。

次に、麻生遺跡周辺の歴史的環境をみてみる。まず、旧石器時代には、町内にその生活の痕跡を認めない。しかし、近接する八日市市土器町庚申溜遺跡[③]や芝原町玉緒遺跡[④]、日野町西大路薬王寺溜[⑤]で尖頭器の出土が知られている。つづく縄文時代においては、大塚城跡より草創期の石鎗、堂田遺跡から石匙・石鏃が出土している。[⑥]本報告の麻生遺跡でも遺構に伴うものではないが大型の石匙が出土している。縄文時代晩期も後半になると、ようやく集落の実態が判明する。本報告の麻生遺跡切土Ｆ地区下層において上下２面の縄文時代晩期の集落が検出された。この集落の経済基盤が狩猟・採集だけであったかは、その立地からも興味深い課題である。弥生時代になると遺跡数も急増する。前述の日野川右岸第２段丘上には日野川より分流した小河川が縦横無尽に走り、内陸部ながら、早くから水稲耕作に必要な条件を備えていた。とくに中期以降には、町内だけに限っても外広遺跡[⑦]、麻生遺跡、堂田遺跡[⑧]、市子遺跡[⑨]、野瀬遺跡[⑩]、田井遺跡[⑪]から方形周溝墓群を中心とした遺構・遺物が検出されている。なかでも、市子遺跡では方形周溝墓20基が検出され、調査区外にも墓域が拡がっている。これら、日野川右岸を中心とした弥生時代中期～後期の遺跡の分布状況は、同時期に日野川中流域の開発の画期を示しているといえよう。



第１図　麻生遺跡位置図



1 麻生遺跡
2 田井遺跡
3 堂田遺跡
4 市子遺跡
5 平塚遺跡
6 杉ノ木遺跡
7 大塚城跡
8 切剥遺跡
9 飯道塚古墳群
10 山端遺跡
11 七ツ塚古墳群
12 東大塚古墳
13 岡本古窯跡
14 塔の堂遺跡
15 神開遺跡
16 外広遺跡
17 宮ノ前遺跡
18 下森遺跡
19 田寺遺跡
20 蒲生堂遺跡
21 アリヲヲジ遺跡
22 辻岡山A古窯跡
23 辻岡山B古窯跡
24 宮井廃寺
25 野瀬遺跡
26 木村古墳群
27 本郷遺跡
28 川合古墳群
29 綺田廃寺
30 石塔寺古寺
31 上南城跡
32 大塚古墳
33 瓜塚古墳
0
2km

第2図　周辺遺跡分布図

つづく古墳時代前期の状況は不明である。現在のところ前期古墳は発見されておらず、集落遺跡も確認されていない。あたかも弥生時代のムラが消滅したかのような印象を受ける。ところが、古墳時代も中期以降になると爆発的な勢いで遺跡が増加するのである。まず、古墳群として、日野川と佐久良川の合流地北方に立地する木村古墳群[12]がある。現在は破壊されてしまったが、径約80mの巨大な円墳のけんさい塚古墳を筆頭に、径52mの円墳である久保田山古墳、一辺約65mの方墳である雨乞山古墳など、7基からなる巨大古墳群である。現在は久保田山古墳と雨乞山古墳の2基しか残っておらず、詳細は不明であるが、5世紀中頃を中心とした首長墓群として位置づけられる。集落遺跡としては、本報告の麻生遺跡をはじめ、堂田遺跡、市子遺跡[13][14]などで竪穴住居群とともに膨大な遺物を含む河川跡が検出されている。これら河川跡はいずれも完品の土師器を含む多量の遺物を含み、遅くとも7世紀中葉までにそのほとんどが埋没して、河川としての使命を終えている。なかでも、堂田遺跡から出土した5世紀中頃から6世紀後半にかけての4点の馬鍬は、5世紀中頃を画期として、日野川中流域の治水、水田化が成功した証と考えられる。

つづく古墳時代後期になると開発はさらに進む。例えば、外広遺跡[15]では日野丘陵裾部の高燥地にまで居住区を設けている他、V字の幅1.5m、深さ1.2mの溝を掘削し、可耕地を増大している。先述の麻生遺跡・堂田遺跡でも古墳時代中期以降、継続して竪穴住居が検出されており、限られた調査範囲の中でみてもその数は増加している。このことは後期群集墳のあり方からも、うかがえる。後期群集墳は、その分布状況と埋葬法から2グループに大別できる。まず、雪野山系の総数100基以上の横穴式石室を内部主体としたグループ、そして、日野丘陵先端部の石室をもたないグループがある。とくに、後者は飯道塚古墳群[16]の例によると、複数の木棺直葬を主体とした円墳から構成されている。また、同じ日野丘陵の南部に位置する日野町小御門古墳群[17]では、横穴式木芯粘土室墳と称するいわゆる「カマド塚」が存在しており、横穴式石室を主体とするグループとは墓制を異にする集団が日野川中流域に居住していた。この集団の居住地が墓域と近接していると考えるならば、市子遺跡、堂田遺跡や本報告の麻生遺跡が、飯道塚古墳群をはじめとする木棺直葬墳を築造したグループの居住地であった可能性は高い。さらに、近年の調査で、木村古墳群の北方、本郷遺跡（川合古墳群）の調査において7世紀前葉の土壙墓7基が検出された。うち4基は火化墓、もしくは火の使用が認められ、日野町小御門古墳群との関連が注目されている。一方、生産遺跡として、6世紀後半代に位置付けられる辻岡山A古窯跡[18]がある。これに続く須恵器窯は約100年後の岡本古窯跡[19]があげられる。

このころより、日野川中流域は仏教文化が盛行する。まず、近年の調査で、塔・金堂などが判明した宮井廃寺[21]、瓦・礎石の散布がみられる綺田廃寺、蒲生堂廃寺、そして、日本最古の石塔とされている三重石塔の石塔寺古寺の4ケ寺が挙げられる。日野川中流域の古代寺院として雪野寺[22]を加えるならば、半径3km内に5ケ寺が林立することとなり、旧蒲生郡内においても卓越した経済力と政治力を有した地域であることがうかがえる。同時期の遺跡として、宮井廃寺の周辺に拡がる野瀬遺跡、綺田廃寺との関連が想定される山端遺跡・切割遺跡の他、蒲生堂廃寺、外広遺跡で2間×5間以上の掘立柱建物群が検出されている。その他、奈良時代の遺構・遺物が出土している遺跡として、麻生遺跡、堂田遺跡、大塚城遺跡、川合古墳群（本郷遺跡）、宮川アリヲヲジ遺跡[23][24][25][26][27]の調査例がある。とりわけ、川合古墳群のＳＥ２から出土した3点の「林」と記した奈良時代前半期の墨書土器は、百済系の渡来氏族「林」氏と考えられており、『日本書紀』天智天皇八年（669年）「以二佐平余自信、佐平鬼室集斯等男女七百余人一遷二居近江国蒲生郡一。」の記述と関連して重要である。これらの遺跡群は平安時代前期まで存続する例が多い。注目されることは、平安前期の建物は、麻生遺跡や本郷遺跡の例によると、蒲生郡条里Ｎ－33°－Wに近い方位をとるものが多いことである。先述の山端遺跡ＳＢ１（3間×5間の身舎に北面・西面廂）、野

瀬遺跡の寺院創建に関係する第4期の建物群と宮川アリヲヲジ遺跡の溝・建物群、外広遺跡の掘立柱建物1（3間×5間）、本郷遺跡のSB101（2間×3間）など、奈良時代前期から平安時代初頭にかけての建物群は、宮井廃寺の伽藍配置同様に、正方位を意識して建てられている例が圧倒的に多い。蒲生郡条里の施行時期については、今後の調査検討に待つべき点が多いが、宅地としての土地利用が条里地割に規制されているならば、N－33°－Wの条里施行時期との関係で注目される事実である。つづく平安時代中期の遺跡として、野瀬遺跡の第5期遺構群が知られている。しかし、平安時代前期までの遺跡数に較べて、その数は減少している。その中で、水口丘陵において、いわゆる近江産緑釉陶器が生産されていることは重要である。[8]

日野川中流域で、遺跡数が増加するのが平安時代後期以降である。まず、麻生遺跡をはじめとして、市子遺跡、堂田遺跡、野瀬遺跡、田井遺跡などで、3間×4間の総柱建物を標準とした掘立柱建物群が検出されている。いずれも現地調査が終了して間もなく、正式な報告は今後のこととなるが、建物群の配置は現蒲生郡条里に規制されており、1町四方内に数棟ずつ建ち並ぶ、いわゆる散村的景観を呈していたと考えられる。とくに、本報告で扱う麻生遺跡には、先述した山部神社文書が残されており、史料と考古資料の対比ができる貴重な例である。今回の調査で検出した平安時代末～鎌倉時代前期の掘立柱建物群は、史料で知られる麻生荘関係の遺構と考えられる。麻生荘が史料に初出するのは、保安三年（1122年）の麻生荘公文職平宗保が嫡子平宗継に残した譲状である。[9]以後、正和3年（1314年）にかけて、6名の公文職の名がみえる。また、山部神社に残された63点の中世文書には、他荘との水争い、田地寄進状、田地売券などが含まれ、中世村落を考えるうえで重要な史料となる。麻生荘は、成立当初は藤原家領であったが、後に分家（花山院家・菊亭家）や祇園社、日吉社、太子堂などの所領となった。建武5年（1338年）には、足利尊氏が、花山院領を没収し、祇園社の造営料所に寄進して、花山院と祇園社との争論を起している。文和2年（1353年）には、足利義詮が麻生荘を四分して、南北朝の争乱に功のあった山本坊定還・西教坊御房教慶・佐々木千手らに与えた。このように、麻生荘は、中央の政治動向と密接な連りをもって消長したといえよう。なお、麻生荘内の高木神社・垣野神社・山部神社にはケンケトまつり（帯掛祭）という祇園社の山鉾祭りと縁故のある祭礼が行なわれている。[10]

3．調査の経過

今回の調査対象となった麻生遺跡は、先述したように、前年度の試掘調査においほ場整備対象地区全域から各時代の遺物・遺構が出土している。ほ場整備対象地区（蒲生南部地区上麻生第1工区・岡本第4工区）は、東を県道近江八幡蒲生線に、南を主要地方道近江八幡土山線、西を上麻生・下麻生集落に、北をほ場整備第5号支線道路に囲まれた、東西約550m、南北約830mの範囲である。現地調査は、昭和60年9月中旬より1号排水路地区から開始した。以下、日誌抄。

9月17日　掘削用重機搬入。1号排水東端より掘削開始。

9月24日　現地事務所設置。本日より作業員投入。

9月27日　1号排水上を縦断している高圧線と地面との間が5mに満たないため、関西電力の立会のもと重機使用。

10月5～9日　本調査対象地区以北の11*ha*（上麻生第2工区）について試掘調査を行なう。当初の予定にはなかったが、すでに工事入札済であり、緊急に行なう。

10月29日　協議の結果、切土部分の調査地区に変更が生じ、一部試掘を開始する。

11月9日　重機による切土A地区表土除去開始。

11月21日　水田104整地工事中に遺構発見。工事中止して検出作業開始。のち切土C地区と命名。

12月3日　切土Bの遺構検出開始。切土Cとつづく掘立柱建物群であることが判明。その遺構密度の高さから麻生荘の中心的施設であると予感。

12月17日　大雪（積雪20cm）のため作業中止。

12月27日　切土A・B地区航空測量実施。

1月6日　3号排水調査開始。

1月16日　再び飛び込みで、蒲生町南部地区田井第1工区・大森第4工区の試掘を行なう。

1月21日　切土D地区航空測量実施。切土E地区遺構検出作業開始。

1月28日　切土F地区遺構検出作業開始。

1月31日　切土E地区（1500㎡）終了。

2月16日　切土F地区遺構掘込みの際、下層に縄文時代晩期の遺構があると判明。

2月23日　切土F地区上層の空撮実施。

2月25日　切土F地区下層の取扱いについて農林部と協議。次年度作付けに間に合うように調査を終了することが決定。

3月5日　切土F地区下層遺構検出のため重機投入。

3月17日　切土F地区下層遺構はさらに第3遺構面が存在することが判明。

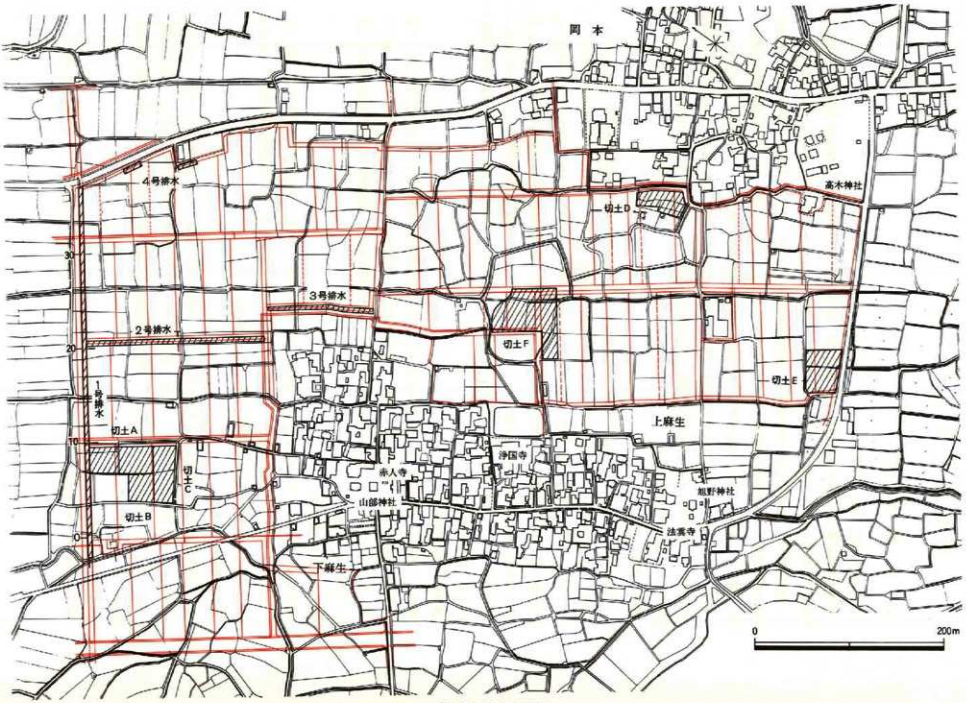
3月29日　第3遺構面は設計変更によって保存することが決定。ただし、水田92の300㎡については調査する。

4月9日　切土F地区下層についてプラントオパールのサンプリング実施。

4月17日　切土F地区下層第1回航空測量実施。

4月26日　〃　第2回　〃　。

5月13日　器材撤去し、麻生遺跡発掘調査終了。


岡本
4号排水
3号排水
2号排水
1号排水
切土A
切土B
切土C
切土D
切土E
切土F
高木神社
上麻生
下麻生
浄国寺
赤人寺
山部神社
旭野神社
法寧寺
0
200m

第3図　調査区設定図

4．調査の結果

（1）遺　構（第3図）

1号排水路地区（第4～8図）

今回の調査対象である蒲生南部地区上麻生第1工区・岡本第4工区の北端を画する排水路予定地内の調査で、県道近江八幡蒲生線から主要地方道近江八幡土山線にかけての約 400mのうち、約 200mについて遺構を確認した。調査面積は約 800㎡である。検出遺構は、西半部分において切土B・C地区に関連した平安時代後期の掘立柱建物群、東半部で古墳時代後期の竪穴住居群が顕著に分布する。主要なものは、竪穴住居2棟、掘立柱建物6棟、土壙2基、溝18条である。基本層序は、西半部においては耕土25cm、床土である淡黄灰色土5cmを除くと、茶灰色土の遺構面となる。平安時代後期の掘立柱建物群の柱穴埋土は暗茶褐色土で、掘方と柱痕部の判別は困難であった。東半部では、古墳時代後期の遺構面となる淡灰色砂層までに、耕土、床土、淡青灰色土、淡黄灰色砂質土が35～50cmの厚さで堆積する。

掘立柱建物1（第5図）

1号排水路西半部に位置する9間×3間以上の建物である。北面の柱列は身舎との柱間距離が 170cmと短く、廂と考えられる。廂につづく北より2列目と3列目の柱間は 270cm（9尺）、3列目と4列目の柱間は210cm（7尺）となる。しかし、東西方向の柱間は 195cm（6.5尺）から 230cm（約7.5尺）と統一がない。今回の調査では東西9間の柱列を同一の建物として理解したが、柱筋を同じくした数棟の建物である可能性も否定できない。9間とした場合、東西19.7m、南北 6.6mを計り、今回の調査で検出した建物では最大規模となる。建物方位は、N－21°－Wとなる。柱穴は径30cm前後の円形で、深さ20cm前後が多い。柱穴埋土からは、12世紀前半の土師器・黒色土器・瓦器片が出土した。

掘立柱建物2（第6図）

建物1に重複する東西4間（8.4m）、南北1間（2.25m）以上の建物で、北半部はトレンチ外であるため、全体規模は不明である。柱間は東西 2.1m（7尺）を基本とするが、東面の1列のみ 1.8m（6尺）と短い。建物方向は、N－28°－W となる。柱穴は25cm前後の円形で、深さは30cmを計る。柱穴埋土からは、12世紀前半の土師器・ 黒色土器・瓦器片が出土した。

掘立柱建物3（第6図）

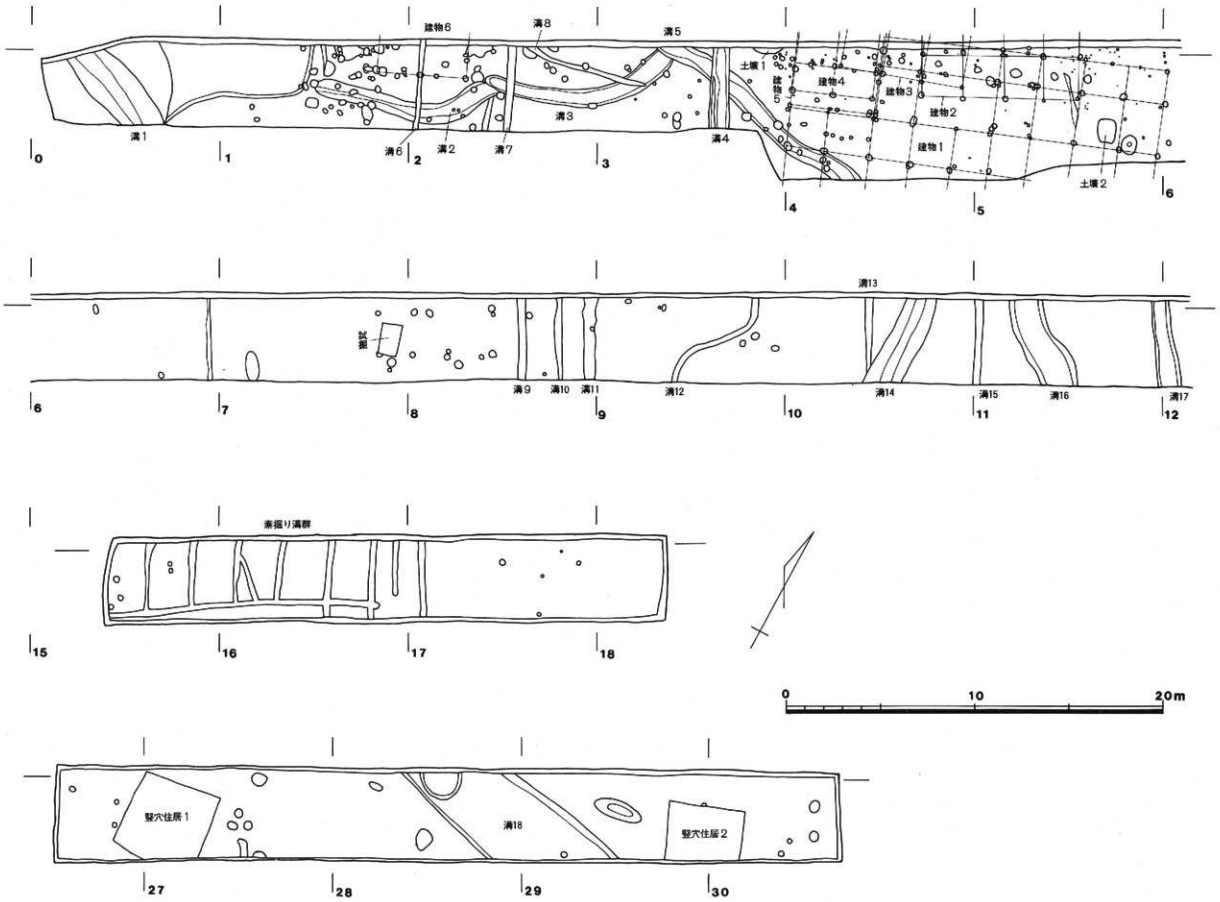
建物1・2に重複する東西3間（6.5m）、南北は規模不明の建物で、南面の1列分の柱穴以外はトレンチ外である。柱間は 2.1m（7尺）を基本とする。建物方位は、N－18°－Wとなる。柱穴は20cm前後の円形で、深さは30cmを計る。柱穴埋土からは、土師器・黒色土器・瓦器片が出土した。

掘立柱建物4（第6図）

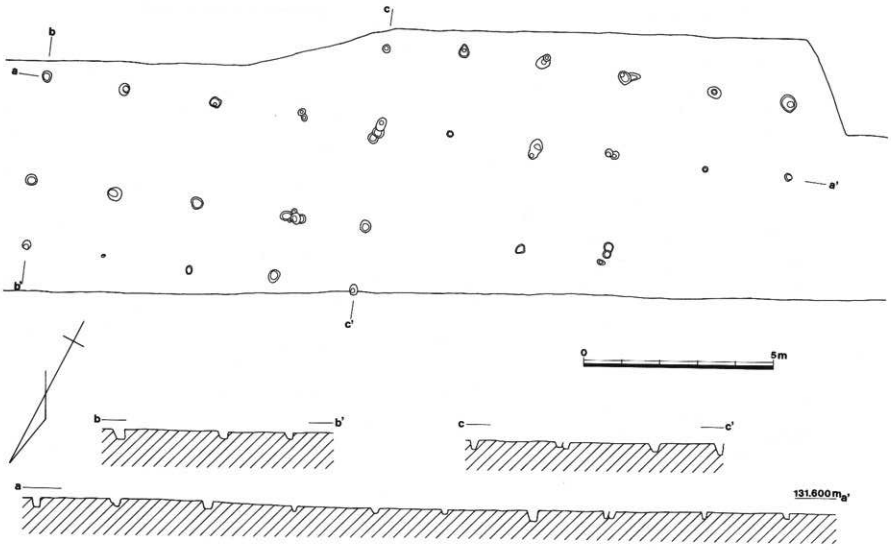
建物1の北西部分を補う位置にある東西2間（4.3m）、南北1間（1.5m）以上の建物で、北半部はトレンチ外であるため、全体規模は不明である。柱間は東西 2.1m（7尺）、南北1.5m（5尺）を計る。建物方位は、N－22°－Wとなる。柱穴は30cmまでの円形で、深さは25cmを計る。柱穴埋土からは、土師器・黒色土器・瓦器片が出土した。

掘立柱建物5（第6図）

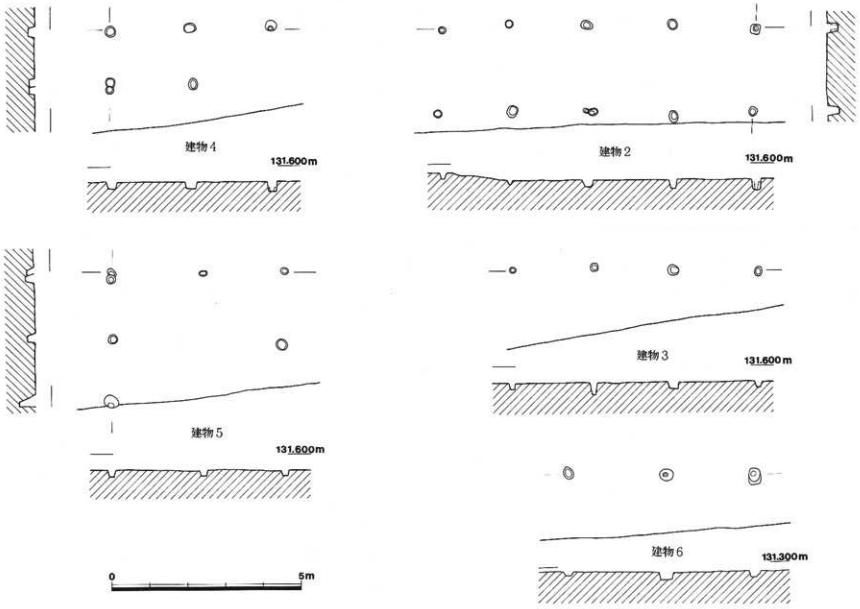
建物4と重複する東西2間（4.3m）、南北2間（3.6m）以上の建物で、北半部はトレンチ外であるため、



第4図　1号排水路地区　遺構平面図



第5図　1号排水　掘立柱建物1



第6図　1号排水　掘立柱建物2・3・4・5・6

全体規模は不明である。柱間は東西が 2.4m （8尺）と 2.2m （約7尺）、南北が 1.8m （6尺）を計る。建物方位は、建物1と同じN－21°－Wとなる。柱穴は20cm前後の円形で、深さ20～40cmを計る。柱穴埋土からは、土師器・黒色土器・瓦器片が出土した。

掘立柱建物6（第6図）

建物1～5から西へ15m に位置する東西2間（4.95m ）、南北は規模不明で、南面の1列分の柱穴以外はトレンチ外にある。柱間は 2.6m （8.5尺）と2.35m （約8尺）を計る。建物方位はN－25°－Wとなる。柱穴は30cm前後の円形で、深さ20cmを計る。柱穴埋土からは、土師器・黒色土器片が出土した。

土壙1

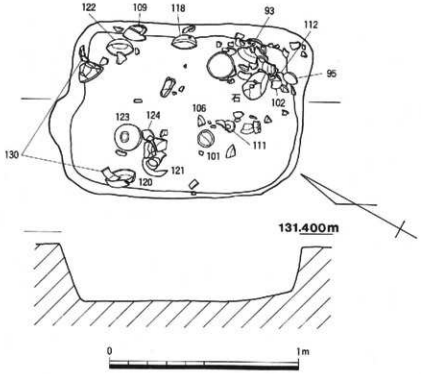
建物1～5の西側、トレンチ北壁に位置する。大半がトレンチ外であるため、形状・規模は不明であるが、北壁断面の観察から、東西1m 、深さ0.16m を計る。埋土内には、土師器・黒色土器片が含まれており、建物群と同時期に形成されたと考えられる。

土壙2（第7図）

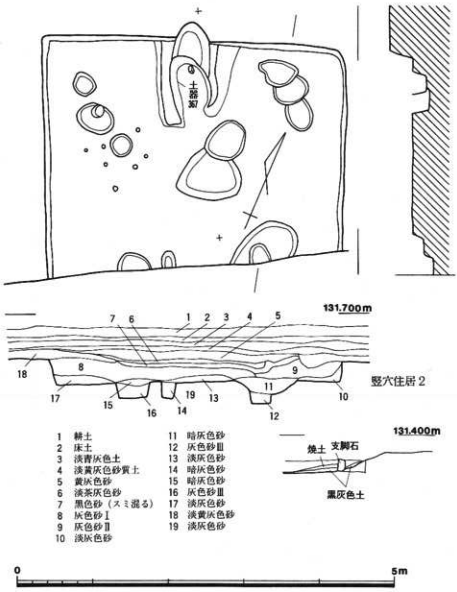
建物2の身舎内の北東辺に位置する隅丸方形の土壙である。大きさは長辺 1.3m 、短辺 0.9m 、深さ 0.3m を計る。主軸方位はN－28°－Wを示す。土壙内には上部から崩落したと考えられる土師器・黒色土器・瓦器が多数出土した(第49図)。埋土断面の観察では木棺の痕跡は認められなかったが、墓壙と考えられる。出土遺物は12世紀第2四半世紀の良好な一括資料となる。

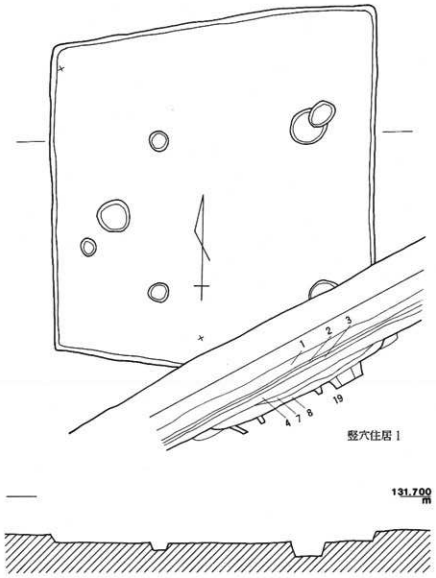
竪穴住居1（第8図）

建物1～5から東へ約 200m に位置する。1辺約 4.3m の方形であるが、北壁と南壁は不明瞭であった。床面積は、1辺 4.3m とすると18.5㎡となる。全体に遺存度が悪く、床面の深さは0.14m を計る。柱穴は4本柱で、柱間は 2.1m 、主軸方位はほぼ真北を示す。埋土より、6世紀後半の土師器・須恵器・炭化物を含む。



第7図　1号排水　土壙2





第8図　1号排水　竪穴住居1・2

竪穴住居２（第８図）

竪穴住居１から東へ25m に位置する。１辺４ｍの方形と考えられるが、南壁はトレンチ外である。床面積は、１辺４ｍとすると16㎡となる。カマドは北壁中央に構築されており、袖部と煙道床面を残している。カマド内には支脚石、手づくねのミニチュア土器（第53図 367）が残されていた。床面には複数のピット、土壙状の落ち込みがみられるが、柱穴とは考えられない。落ち込みは 0.3m ～ 0.9mまでの大きさで11ヶ所ある。深さは0.3 m を計る。竪穴プラン自体の遺存状況は良好で、床面までの深さは、 0.3 m を計る。埋土内からは、６世紀初頭の須恵器（第53図 364～366）、土師器片が出土した。主軸方位はＮ－25°－Ｗを示す。

溝１

１号排水西端の段丘下に位置する溝で、第１段丘面の水田灌漑用水路と考えられる。幅 2.5m 、深さ 1.2ｍを計る。流出方位はＮ－65°－Ｗを示す。溝肩部最下層より、奈良時代の須恵器（第53図 357）が出土した。

溝２・３・５

１号排水西半部に掘削された溝で、溝２・３は、ともにゆるやかな弧を描く。溝５は、ほぼ東西方向に流れる溝で、幅約１ｍ、深さ 0.4m を計る。各溝内より、６世紀後半の須恵器が出土した。

溝４・６・７・９・10・11・13・15・17

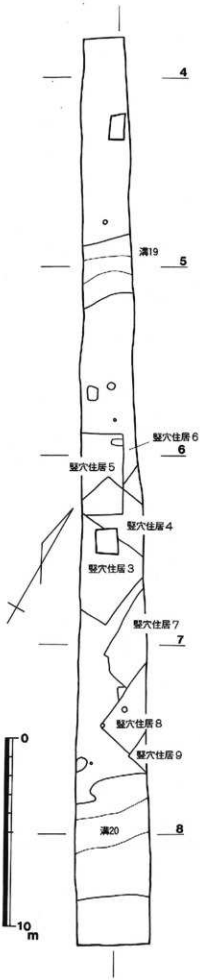
耕土直下より掘削された溝で、それぞれ現在の地割に軸線が一致する。とくに、溝４は、蒲生部条里の坪境と考えられる幅１ｍ、深さ 0.3m の南北溝である。溝内からは、ほとんど遺物を出土しなかった。また、溝９・10・11は、溝４からほぼ半町（54m）東に位置することも注目される。

素掘り溝群

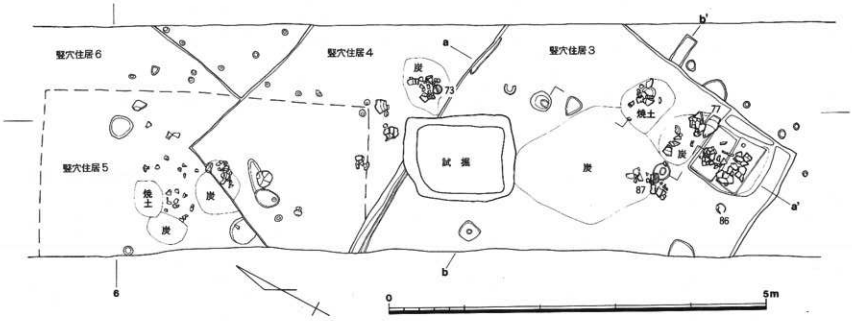
１号排水路地区のほぼ中央に位置する。耕土直下より掘り込まれた溝で、17m 間に８条の平行な南北溝が掘り込まれている。うち６本までに直交する東西溝が１条掘り込まれている。溝の幅は約 0.4m 、深さ約 0.2m を計る。同類のものが、切土Ａ・Ｂ、切土Ｆで検出された。

２号排水路地区（第９～12図）

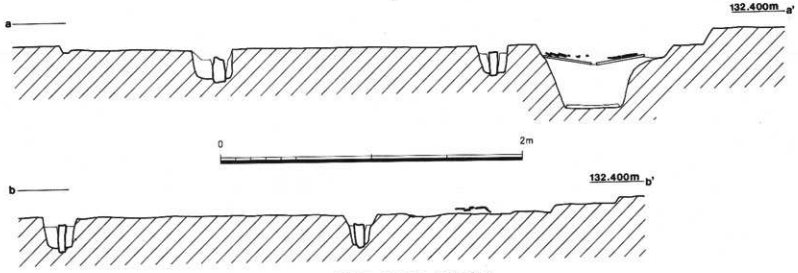
１号排水路の中央に直交する約 200ｍの排水路で、１号排水路より南へ45m から85m にかけて、古墳時代中期の竪穴住居群と溝が検出された。竪穴住居群は、２条の東西溝にはさまれた30m の区画に４回以上の建て替えを行なっている。遺構面までの基本層序は、耕土・床土・淡黄灰色土が 0.6 ～ 0.8m の厚さで堆積しており、遺構面である淡灰色砂層を覆っている。竪穴住居・溝の埋土は炭化物混りの黒灰色土・暗茶灰色土で、古墳時代中期の遺物を多量に包含していた。



第９図　２号排水路地区　遺構平面図



第10図　2号排水　竪穴住居3・4・5・6



第11図　2号排水　竪穴住居3

竪穴住居３（第10・11図）

２号排水路の竪穴住居群のなかでも、もっとも遺存状況が良く、全容がほぼ確認できた。竪穴プランは、１辺4.3m の方形で、主軸をほぼ正方位(Ｎ－2°－Ｅ)とする。東壁面中央にカマドを構築しており、煙道が東壁外方へ延びる。カマド焚口に向って右側の竪穴住居南東角には、１辺0.7m 、深さ0.45m の方形の貯蔵穴がある。貯蔵穴の上面と底部には木製の蓋・底板が遺存していた。とくに、上面の蓋は２枚の板材で、それぞれ、長さ73cm×幅36cm×厚さ４cm、長さ69cm×幅37cm×厚さ３cmを計る。これらの板材には孔があり、転用材の可能性もある。柱は４本柱で、南西の柱のみトレンチ外に位置するが、他の３本については柱根が遺存していた。柱穴は35～40cmで、深さ40cmを計る。柱間は、南北 1.8m 、東西1.95m を計る。北壁についてのみ壁溝を廻らす。床面中央にはカマドから掻き出した炭化物が散布していた。出土遺物の大半は、カマド周辺の床面直上において出土した。とりわけ、カマドと貯蔵穴の間に土師器の甕（第48図77）が遺存していたことは注目される。時期は５世紀後半で、２号排水路の竪穴住居群のなかでは、もっとも新しい時期の住居である。

竪穴住居４（第10図）

南半部を竪穴住居３に切られており、東壁はトレンチ外、西壁も不明瞭なため全体規模は不明である。主軸方位は北壁を基準にして計測すると、Ｎ－18°－Ｅを示す。床面には須恵器坏蓋（第48図73）をはじめとする５世紀後半の土師器・須恵器が遺存していた。柱穴・カマドに関しては明確にし得なかった。

竪穴住居５（第10図）

竪穴プランは明瞭でないが、竪穴住居４よりも新しく、竪穴住居３よりも古い。推定プランによると、１辺が約 4.3m で、床面中央ややや北よりに炉を設ける。床面からは少量の土師器片が出土した。柱穴については確認できなかった。

竪穴住居６（第10図）

東壁の一部のみ遺存しており、南半は竪穴住居４・５に切られ、東半はトレンチ外となっているため、全体規模は不明である。床面から浮いた土師器片少量が出土している。

竪穴住居７・８・９（第９図）

竪穴住居３～６に南接して、３棟が切り合っている。それぞれ、南西角のみ確認できた。出土遺物は土師器の細片のみで、時期決定の根拠を欠くが、周辺遺物の出土状況と層位、埋土から、５世紀後半と考えて大過ない。

溝19（第12図）

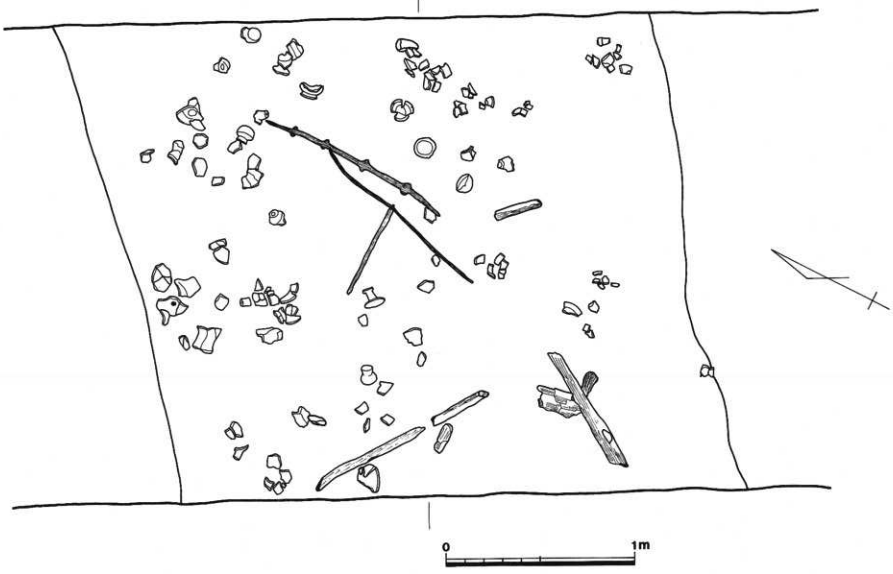
竪穴住居群の北辺を画する東西溝で、幅３m 、深さ0.45m を計る。溝内埋土は５層からなるが、中位の第３層に炭化物・植物遺体・土器を多量に含んでいた。遺物は、５世紀後半の土師器が大半を占めており、整理箱５箱を数えた。遺物出土状況は、溝の北半部により多く出土している。溝断面の形状は、ゆるやかな舟底状を呈しており、自然流路と考えられる。

溝20（第９図）

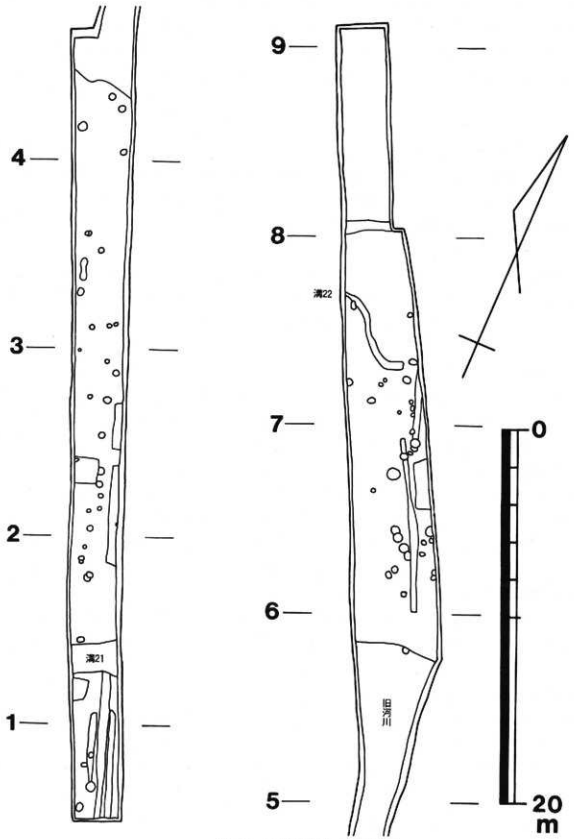
竪穴住居群の南辺を画する東西溝で、幅 6.3m 、深さ 0.6m を計る。溝19に較べて遺物量は少ない。溝19同様、自然流路と考えられる。

３号排水路地区（第13図）

今回の調査対象地の中央を南から北へ流れ、２号排水路に接続する約 600ｍの排水路である。その大半は、蒲生郡条里の里境の溝と重複するが、北端の120ｍ と、切土Ｆについて遺構が存在した。切土Ｆ地区にかかる３号



第12図　2号排水　溝19遺物出土状況図



第13図　3号排水路地区遺構平面図

排水路部分は、同地区の調査区として扱ったため、ここでは北端部分について報告する。調査区の中央には旧河川と考えられる礫層が幅15m にわたってある。その北部分に、古墳時代後期と考えられる柱穴群と、中世の柱穴群が同一遺構面に散在する。前者の埋土は茶混灰褐色土、後者は淡茶灰色土で、根石・つめ石をもつものがある。遺構面である茶褐黄灰色粘質土にいたるまでの基本層序は、耕土12cm、耕土混淡黄灰色土26cmである。旧河川より南半部分に散在する柱穴群は大半が中世の所産と考えられる。また、溝21は、条里地割に関連した溝と考えられる。全体的に出土遺物は少なく、トレンチ南端で信楽焼の捏鉢（第54図 395）が出土しているのが目をひく程度である。

4号排水路地区（第14・15図）

県道近江八幡蒲生線に沿った排水路で、北端近くに竪穴住居1棟と溝3条を検出した。調査区2ケ所に分かれており、南の調査区で竪穴住居、北の調査区で溝を検出した。基本層序は、耕土26cm、黄灰色土12cm、灰色土16cm、淡黄灰色土14cmで、遺構面の淡黄色粘土となる。

竪穴住居10（第15図）

不整形なプランであるが、1辺 4.5m の方形プランが基本となると考えられる。南角部分が突出しているのは2棟が切り合っている可能性がある。主軸はN－47°－Eを示す。カマドは確認できなかったが、北壁中央付近に炭化物が認められた。柱穴も確認できなかった。出土遺物は5世紀後半の土師器がある。

切土A地区（第16～19図）

切土A・B・C地区は本来1区画の調査地であるが、調査工程・遺構の年代によるグループ分けにより、便宜的に切土Aと切土B・Cもしくは切土A・Bとして扱う。切土Aでは、平安時代前期の掘立柱建物3棟、溝1条、しがらみ状遺構、素掘り溝群を検出した。基本層序は、1号排水と同様である。

素掘り溝群（第17図）

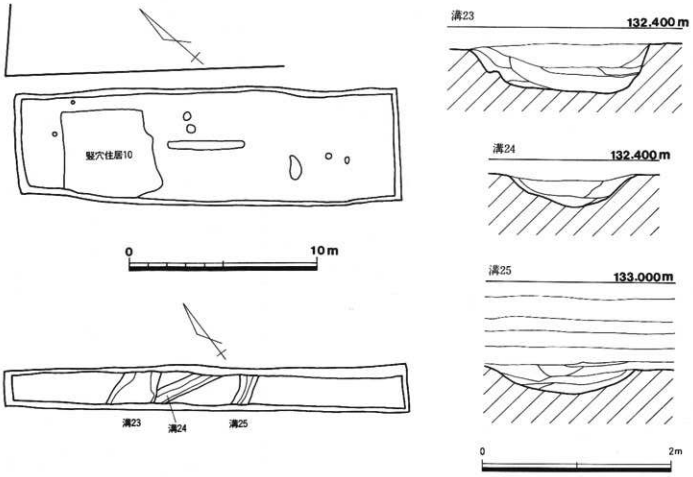
耕土直下より掘り込まれた溝で、ほぼ2m間隔で平行して掘り込まれている。約20～25mで直交する溝があることから、 400～ 500㎡が一区画として認められる。溝は、幅40cm、深さ20cm前後で、埋土の灰色土は旧耕土と思われる。溝の軸線はおおむねN－24°－Wを示す。本来は、他の調査区においても耕土直下において認められるが、遺構として認識されることが少なく、本調査区の如く、遺構面を掘り込んだ例のみが報告されている。

掘立柱建物7（第18図）

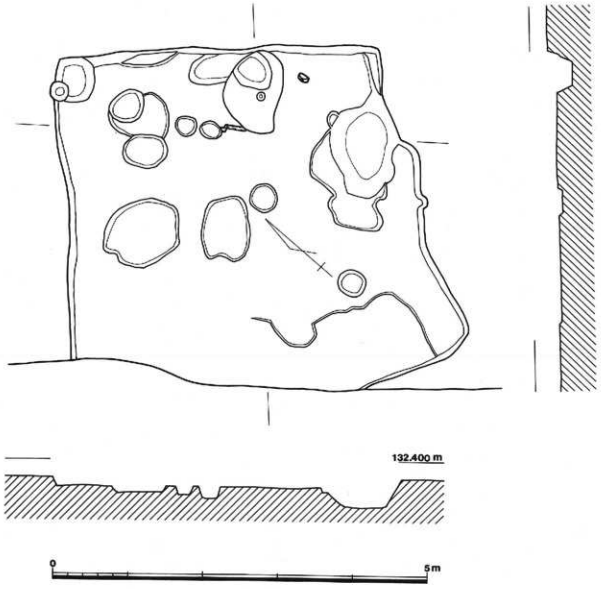
3間(6.7m)×2間(4.3m)の南北棟で、主軸方位はN－21°－Wを示す。柱穴は1辺約70cmの方形掘方で、柱痕は25cm前後を計る。柱間は2.15m （7尺）を基準とする。柱穴掘方より、9世紀前半の須恵器坏蓋が出土している。

掘立柱建物8（第18図）

建物7の南11m に、主軸をほぼ同一にした4間(もしくは6間)×3間(7.45m)の建物で、4間とした場合10.1m 、6間とした場合15.3m を計る。主軸方位はN－18°－Wを示す。柱穴は不揃いで、径20～120cmのうち、60cm前後の隅丸方形が最も多い。柱間は2.55m （8.5尺）を基準とする。西側2列の柱は6間分揃っているが、東から2列目は北から1間分しか柱穴を検出できなかった。柱穴掘方より、建物7と同じ9世紀前半の須恵器が出土した。



第14図　4号排水路地区　遺構平面図



第15図　4号排水　竪穴住居10

掘立柱建物9（第18図）

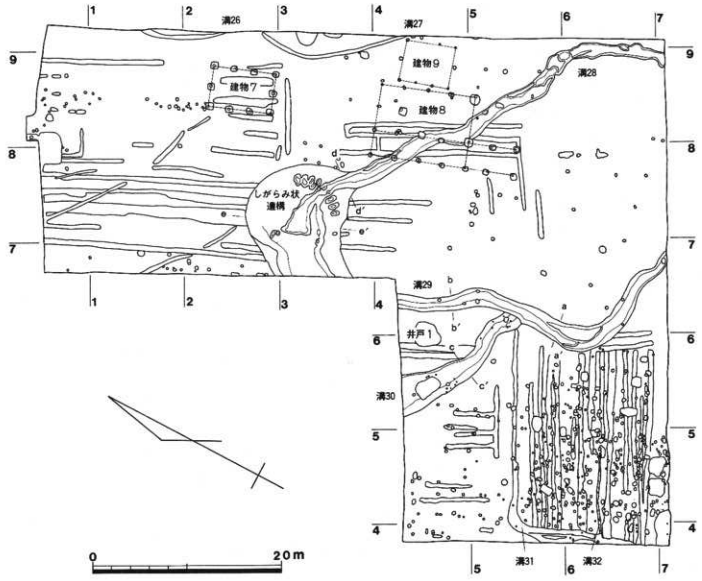
建物8の東に接した3間（5.3m）×2間（4.4m）の建物で、主軸方位はN－16°－Wを示す。柱穴は建物7～9のうち一番小さく20～30cmを計る。柱間は梁行2.2m（約7尺）、桁行1.8m（6尺）を基準とする。柱穴より遺物の出土はないが、位置関係から、建物7・8と同時期と考えられる。

溝28（第16図）

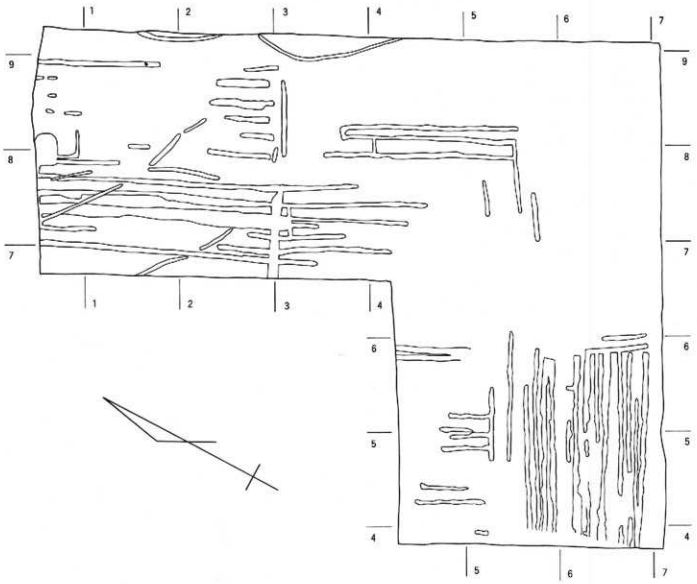
切土A地区の南東角から北西方向に流れる溝で、建物8の北西で落ち込みに流れ込む。溝の幅は1.7m、深さ0.6mを計る。平安時代前期には埋没している。

しがらみ状遺構（第18・19図）

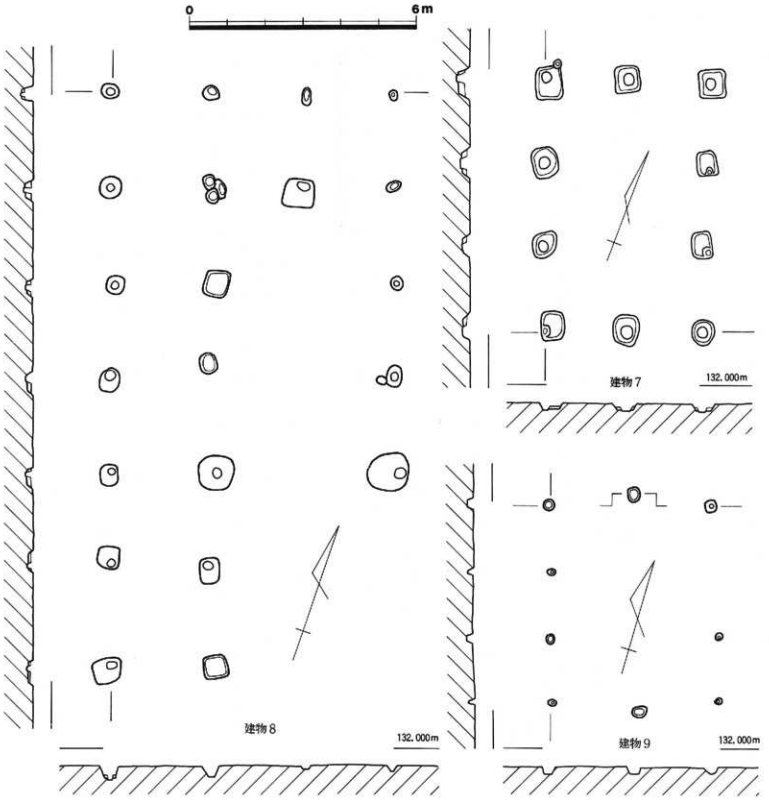
溝28が落ち込みに流入する箇所を制御するために設けられた治水施設と考えられる。杭の掘方のみが流入口をとりまくように半円形に10ケ所検出できた。時期は、落ち込みの最下層より、7世紀中葉の須恵器杯蓋（第53図351）が出土していることから、それに近い時期の所産と思われる。落ち込み埋土の最上層からは建物7～9と同時期の9世紀前半の須恵器が出土している。



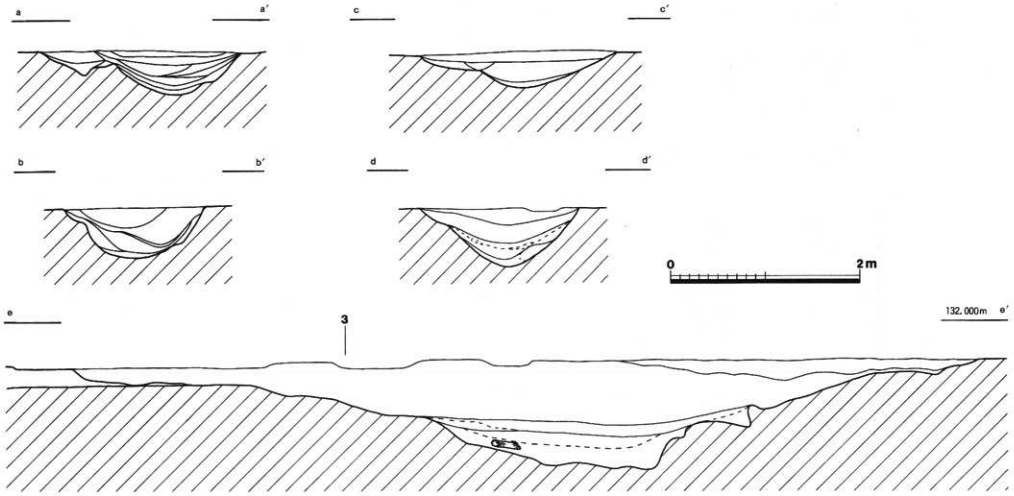
第16図　切土A・B地区　遺構平面図



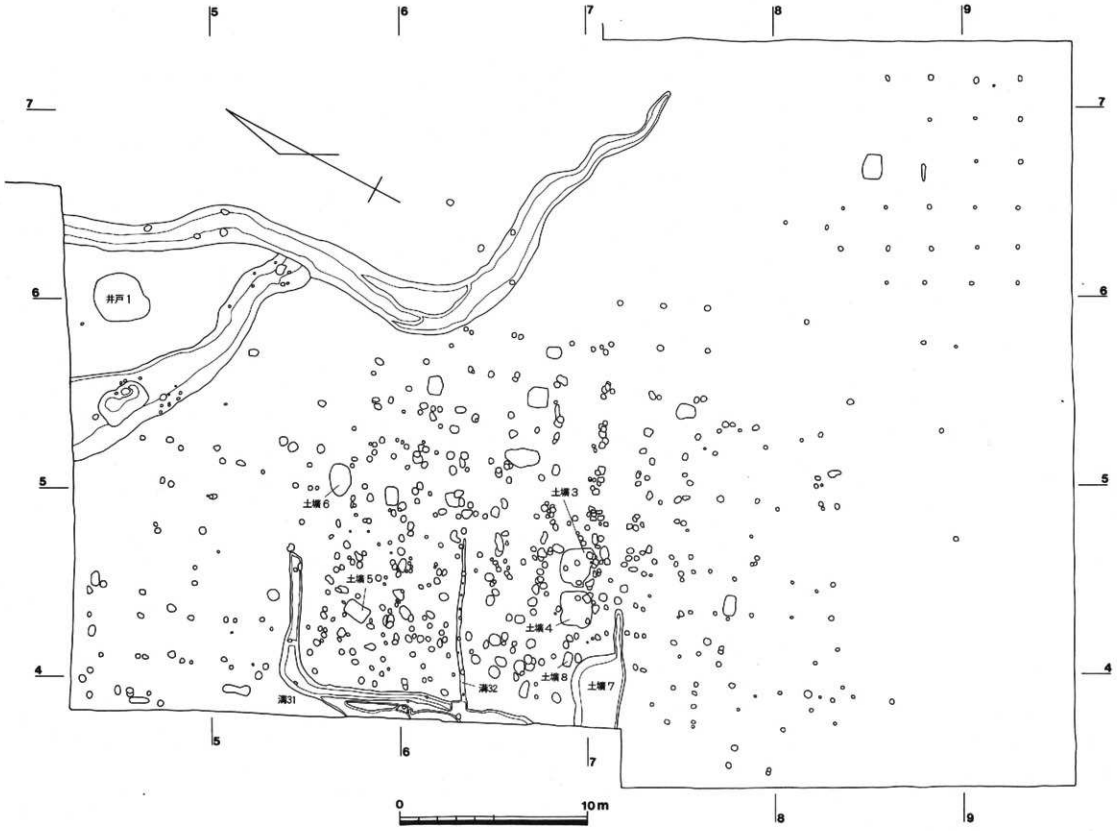
第17図　切土A・B地区　素掘り溝



第18図　切上A　掘立柱建物7・8・9



第19図　切土A・B　溝28・29・30・しがらみ状遺構断面図



第20図　切土B・C地区　遺構平面図

切土B・C地区（第20～28図）

切土C地区は、工事中の不時発見であったために、切土A・B地区に先行して調査した。そのため、C地区の柱穴に関しては完掘せず、主としてプランの確認にとどまっている。切土B・C地区は、主として12世紀の掘立柱建物群を検出した。これらの建物群は、50m北方で検出した1号排水路地区の建物群と同一時期であり、南北1町の拡がりをもった建物群であったと考えられる。検出遺構は、掘立柱建物11棟、土壙6基、溝2条、井戸1基の他、建物として完結しない多数の柱穴群がある。各遺構からは、完品を含む多数の土師器・黒色土器・瓦器の他、輸入陶磁器、緑釉陶器も出土した。

掘立柱建物10（第21図）

切土B地区の中でも、もっとも柱穴の密集した部分に位置する南北4間（9.9m）、東西5間（11.3m）の総柱建物で、北面に南北1間（2.35m）、東西2間（4.6m）の張り出しが付く。主軸方位はN－21°－Wを示す。柱間寸法は南北8尺、東西7.5尺を基準とする。柱穴は不揃いであるが、平均径35cm、深さ50cmを計る。各柱穴からは以下の遺物が出土している。※（　）内番号は第52・53図の遺物番号を示す。

P．148（260）、P．37（253・283）、P．42（281）、P．329（270）、P．20（247・248・250・251・254・257・258・261・263・266・275・276・279・285・288・302・303・321・324・325）、

P．15（259・262・265・269・272・286・287）、P．18（267・273・274・280・301）、P．330（295・322）P．296（314・323）

以上の他、P．307、P．135、P．20、P．94、P．15、P．330、P．296からは、柱を固定するための詰石が出土している。

掘立柱建物11（第22図）

建物10と重複して位置する南北4間（10.1m）、東西4間（8.95m）の総柱建物で、中央柱列のP．348からP．73の間の2本分のみが存在しない。主軸方位はN24°Wを示す。柱間寸法は南北8尺、東西7.5尺を基準とする。柱穴規模は、径25～60cmと不揃いである。各柱穴からは以下の遺物が出土している。

P．103（306・330）、P．110（305）、P．32（310）、P．348（311）、P．93（291）

以上の他、P．172、P．73、P．158、P．36、P．32には詰石がみられる。なお、溝31は、建物11を区画するために掘り込まれたものと思われる。

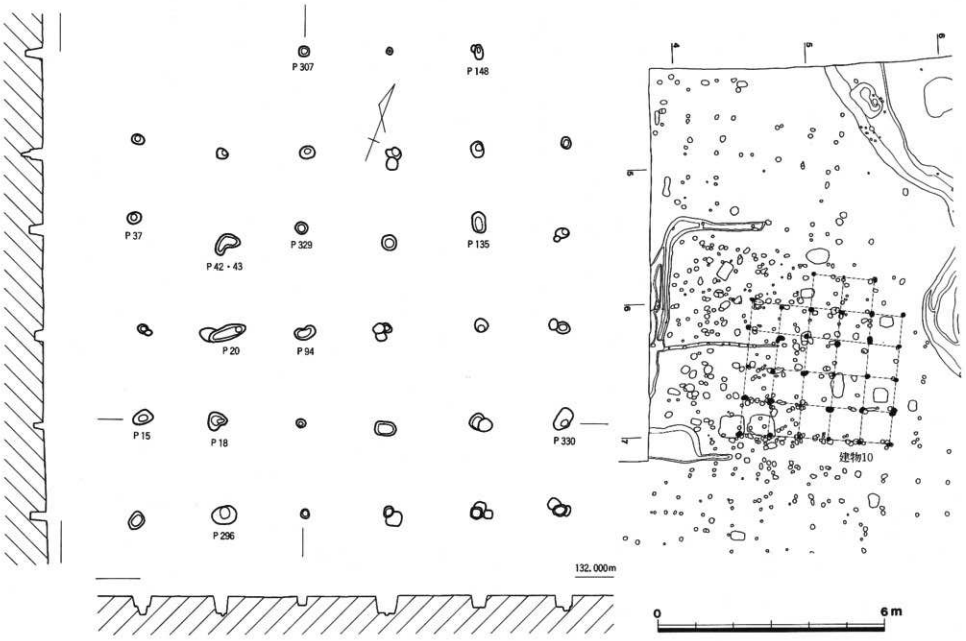
掘立柱建物12（第23図）

建物10とほぼ同一位置・同一方位の建物で、南北4間（9.7m）、東西4間（10.15m）の総柱建物で、東より2列目中央と西端列中央の柱穴は存在しない。主軸方位はN22°Wを示す。柱間寸法の南北間は南より、8尺・7.5尺・8.5尺・8尺、東西間は西より、10尺・7.5尺・8.5尺・7.5尺と不揃いである。柱穴規模も、径20～50cmと一定しない。各柱穴からは以下の遺物が出土している。

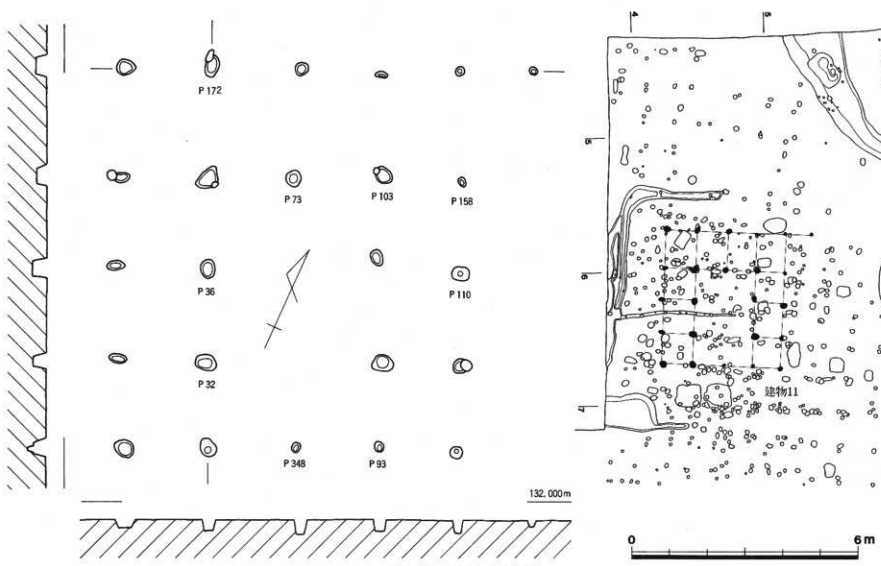
P．24（282）、P．94（331）、P．332（278）

掘立柱建物13（第24図）

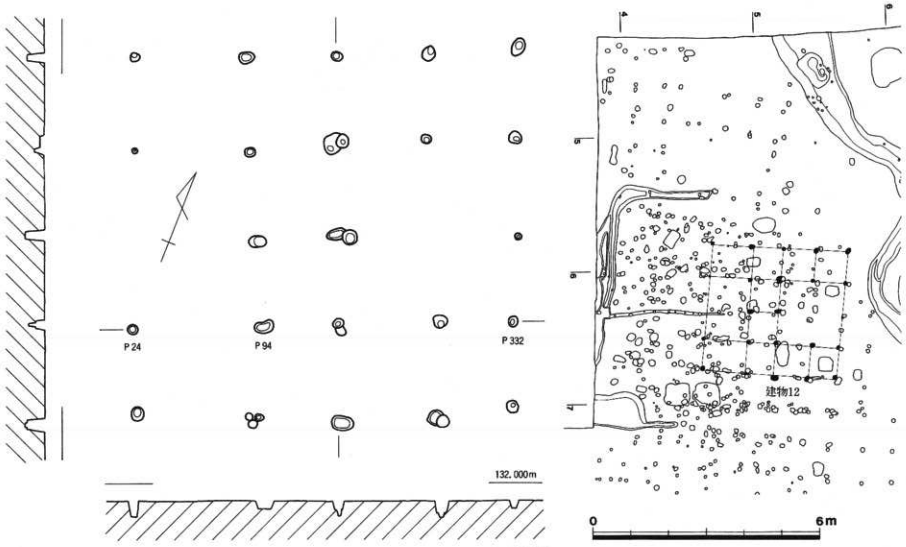
切土B・C地区の建物群のなかの南端に位置する南北3間（7.05m）、東西5間（10.8m）の総柱建物で、西より2間目の北面に1間（2.4m）の張り出しがある。また、東より3列目の北から2つの柱穴、2列目の北端の柱穴は確認できなかった。柱間寸法の南北間は南より、8尺・8尺・7.5尺、東西間は西より、6尺・7尺・8尺・7.5尺・7尺となる柱穴規模も15～30cmと、比較的小さい。北面中央に接して、長辺1.3m、短辺1mの長方形の土壙がある。主軸方位はN－27°－Wを示す。



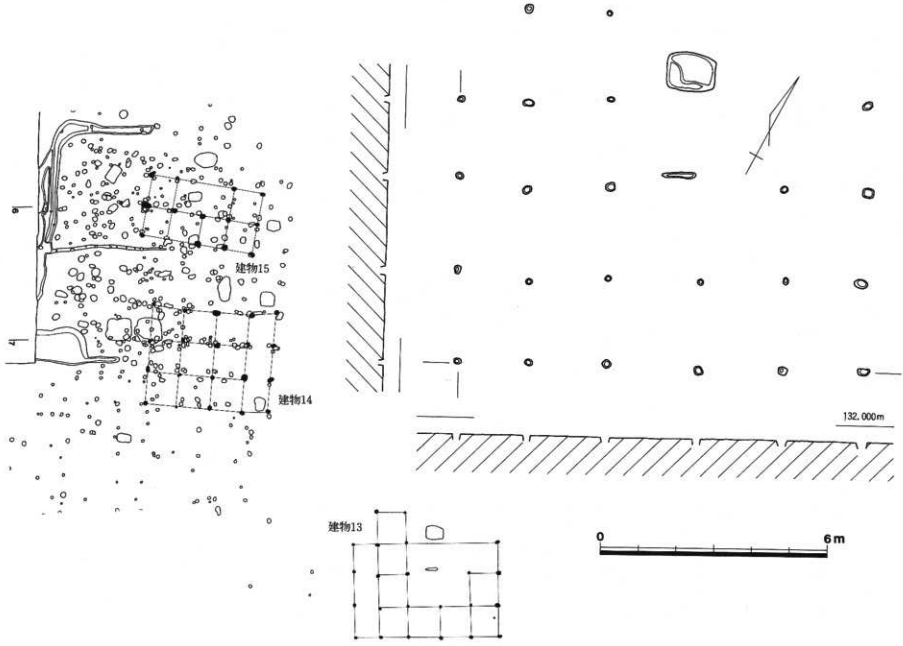
第21図　切土B　掘立柱建物10



第22図　切土B　掘立柱建物11



第23図　切土B　掘立柱建物12



第24図　切土B　掘立柱建物13

掘立柱建物14（第25図）

建物11に南接して位置する南北３間(7.25m)、東西４間(9.3m)の総柱建物である。主軸方位はN－22°－Wを示す。柱間寸法は、８尺を基準とするが、東端の１間のみ２m （約6.5尺）を計る。東西両面の北端の柱は柱間が8.5尺とやや広くなる。P．331は詰石が認められた。

掘立柱建物15（第25図）

建物10～13と重複する建物で、南北２間（4.6m)、東西４間（8.4m ）の総柱建物である。北面中央と南面の西より２つ目の柱穴は確認できなかった。主軸方位はN－16°－Wを示す。柱間寸法は、南北間8.5尺、東西間は西より、 6.5尺、7.5尺、７尺、７尺を計る。各柱穴からは以下の遺物が出土している。

P．167（252)、P．64（329)、P．100（299・326・328・334)、P．108（詰石）

掘立柱建物16（第26図）

建物14と重複する南北２間（4.75m)、東西２間（4.75m ）の総柱建物である。主軸方位はN－25°－Wを示す。柱間寸法は、南北間８尺、東西間は西より８尺・ 7.5尺を計る。

掘立柱建物17（第26図）

建物10・14と重複する南北２間（4.3m)、東西２間（４m ）の総柱建物である。北東角の柱穴は確認できなかった。主軸方位はN－20°－Wを示す。柱間寸法は、南北間７尺、東西間は西より７尺・ 6.5尺を計る。

掘立柱建物18（第26図）

建物11と重複する南北３間（6.55m)、東西１間（2.1m ）の建物である。北東角の柱穴は確認できなかった。主軸方位はN－18°－Wを示す。柱間寸法は７尺を基準とする。

掘立柱建物19（第26図）

溝31以北に位置する南北１間（2.3m)、東西２間（5.8m ）の建物である。北西角の柱穴は確認できなかった。主軸方位はN－12°－Wを示す。柱間寸法は、南北間 7.5尺、東西間 6.5尺を基準とする。P．235には詰石がみられる。

掘立柱建物20（第26図）

建物19と重複するほぼ同 一規模の建物で、南北１間（2.6m)、東西２間（4.4m ）を計る。南面中央の柱穴は確認できなかった。主軸方位はN－18°－Wを示す。柱間寸法は、南北間 8.5尺、東西間は西より 7.5尺、７尺となる。 各柱穴からは以下の遺物が出土している。

P．230（300)、P．232（293・315)、P．236（332）

土壙３（第27図）

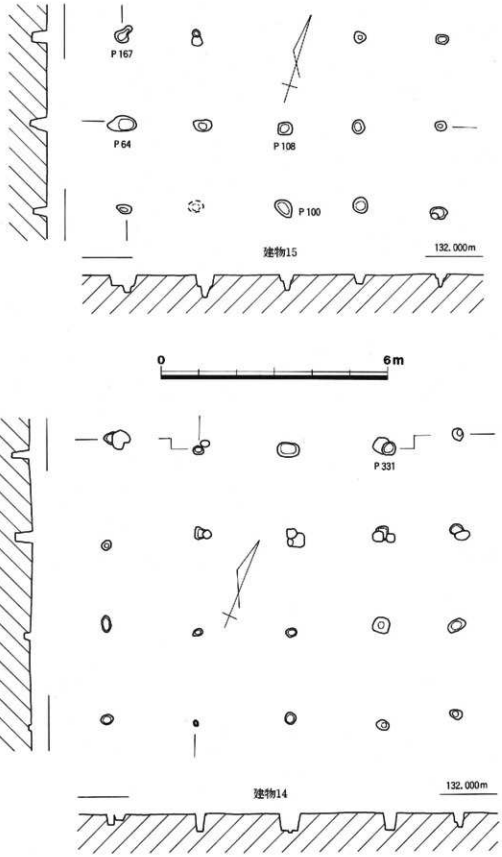
切土B・Cの中央近く、建物11の南に位置する隅丸長方形の土壙である。長辺は1.9m 、短辺1.5m 、深さ0.45 m を計る。土壙内埋土からは土師器・黒色土器・瓦器・山茶椀（第50図 142～161）が出土した。

土壙４（第27図）

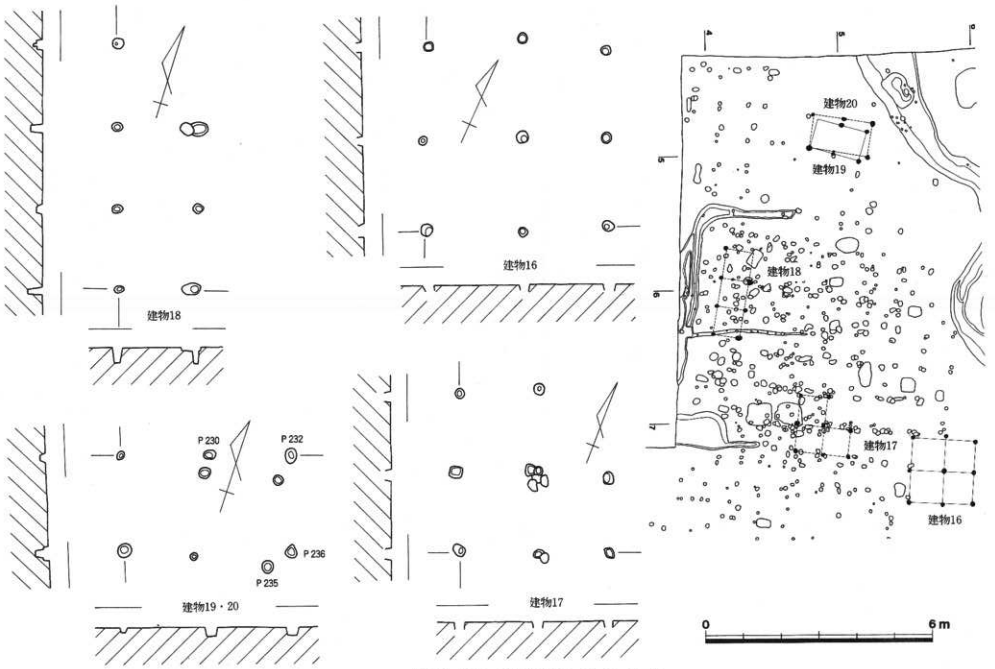
土壙３の西側に接して掘り込まれた土壙である。長辺 1.4m 、短辺1.35m 、深さ 0.5m を計る。土壙内埋土からは土師器・黒色土器・瓦器（第50図 162～ 197）が出土した。

土壙５（第28図）

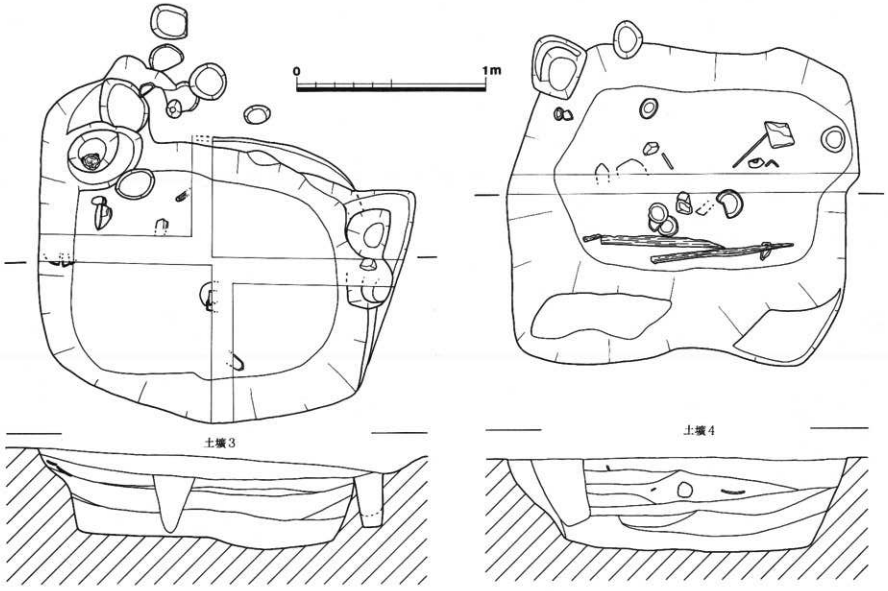
溝31で区画された建物群のうち、建物11の北西角に位置する木棺墓である。木棺は底板部のみ残存していた。大きさは推定で、長辺1.21m 、短辺0.65m を計る。底板の長辺両端から、それぞれ 0.3m 前後に長さ67cm、幅４cm、高さ 3.5cmの角材が、横木として棺底板裏に取り付けてある。底板の遺存状況は厚さ１cmを計るが、本来は



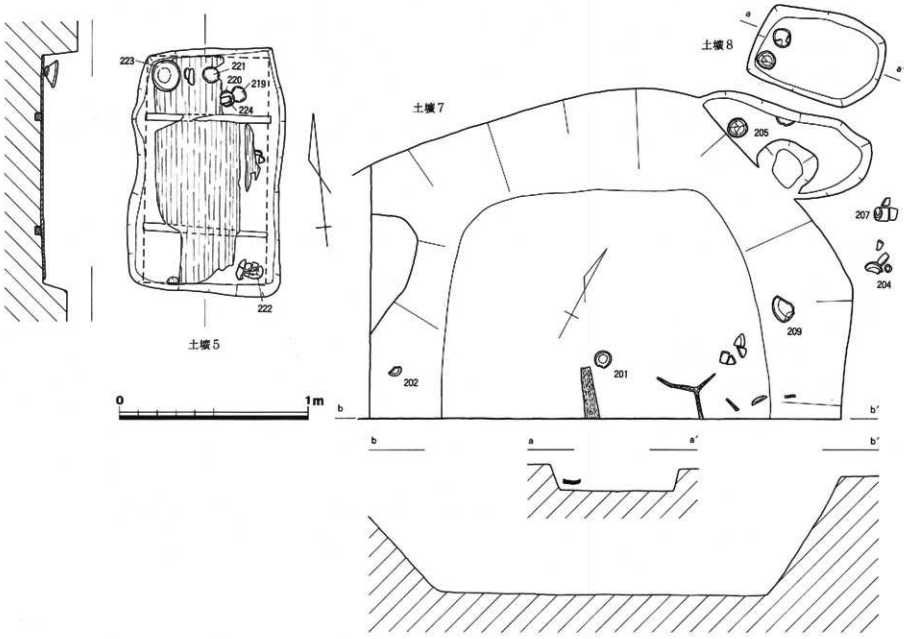
第25図　切上Ｂ　掘立柱建物14・15



第26図　切土B　掘立柱建物16・17・18・19・20



第27図　切土B　土壙3・4



第28図　切土B　土壙5・7・8

数cmであったと考えられる。木棺は主軸方位をN－6°－Eとしており、磁北を意識して埋納されたと考えられる。 木棺内からは、白磁椀1点、土師器小皿3点、大皿1点、白磁片1点（第51図 219～224）が出土した。

土壙6（第20図）

溝31で区画された建物群の北辺に位置する楕円形の土壙である。長径は1.65m 、短径は 1.1m 、深さ 0.3m を計る。土壙内より、土師器、黒色土器、瓦器片が出土した。

土壙7（第28図）

土壙3・4の西側に接して掘り込まれた土壙である。上面には浅い溝状の落ち込みがあった。土壙は完掘していないが、長辺 2.5m 、短辺 2.0m 、深さ0.55m の長方形に近い不整形を呈する。第51図 198～ 218が出土した。

土壙8（第28図）

土壙7の北に接して位置する長方形の土壙である。長辺0.68m 、短辺0.46m 、深さ0.14m を計る。主軸方位はほぼ東西方向（N－97°－W）を示す。土壙の西端には、土師器小皿が2列に並べて3点、正位置に置かれていた。

溝31（第20図）

建物10～12・15の北と西を画する溝で、北辺7m 、西辺13m を検出した。溝の幅 0.6m 、深さ 0.4m を計る。溝内からは、土師器・黒色土器・瓦器（第51図 232～ 246）が出土した。

溝32（第20図）

溝31の北辺から 8.5m 南に、東西に掘り込まれた溝で、溝31へ流れ込む。溝の幅 0.2m 、深さ0.05m を計る。溝内には、0.5～0.8m 間隔で小ピットがあり、柵列の可能性もある。

井戸1（第20図）

切土Bの北辺に位置する。工事との関係で完掘しなかったが、上半は石組、下半は木製の枠を使用した井戸である。井戸枠の一辺は1m 以上、深さ 1.6m を計る。埋土内からの遺物の出土はなかった。

切土D（第29～32図）

岡本の集落の西側に接した約 600㎡ の調査区で、従来より、水晶が採集されていて、水晶田の名称がある。遺構は耕土直下において検出された。遺構面にも、古墳時代の遺物や平安時代後期の遺物が含まれており、今回検出した遺構群は整地した層を切り込んでいる。遺構の主なものは、土壙30基、遺構群を区画する溝、溜枡状遺構落ち込み状遺構2基、柱穴多数である。出土遺物のなかで、とくに注目されるのは、土壙や溝内より出土した室町時代の水晶工房に関連した砥石類（第56図）である。なお、遺構面直上には炭が多く認められ、焼石なども出土していることから、大規模な火災があったことを示している。以下、主要遺構についてのみ記す。

溜枡状遺構（第30図）

調査区の南東隅で検出した方形の石組をもつ土壙で、南辺と西辺の石組を検出した。東半部は調査区外となり不明である。石組の規模は、内法で南北約3m 、東西2m 以上、深さ 0.4m を計る。石組の内面には3ケ所に杭が打ち込んである。埋土より、玉砥石1点が出土した。また、石組掘方より、フイゴの羽口片や鉱滓片を検出している。

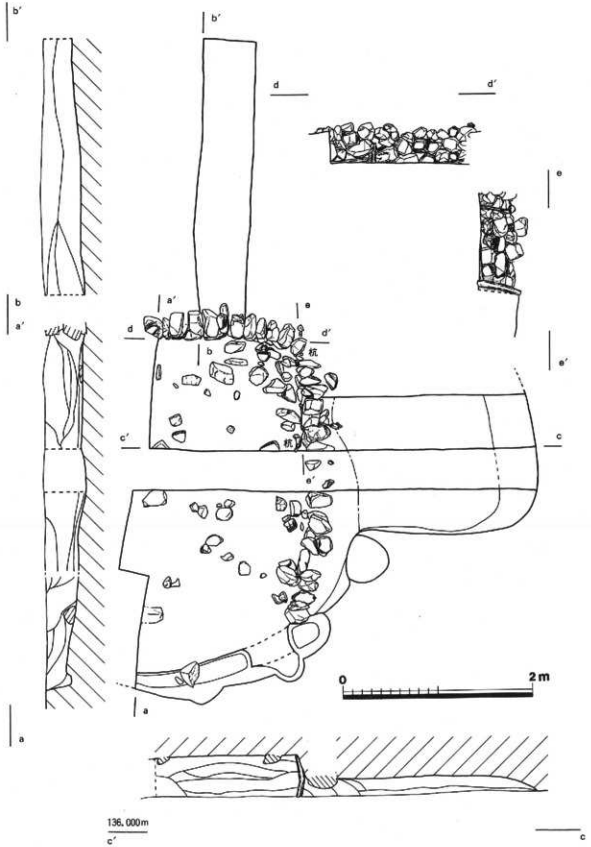
土壙8（第31図）

調査区の南端に位置する楕円形の土壙で、長径 1.5m 、短径 1.0m 、深さ 0.1m を計る。

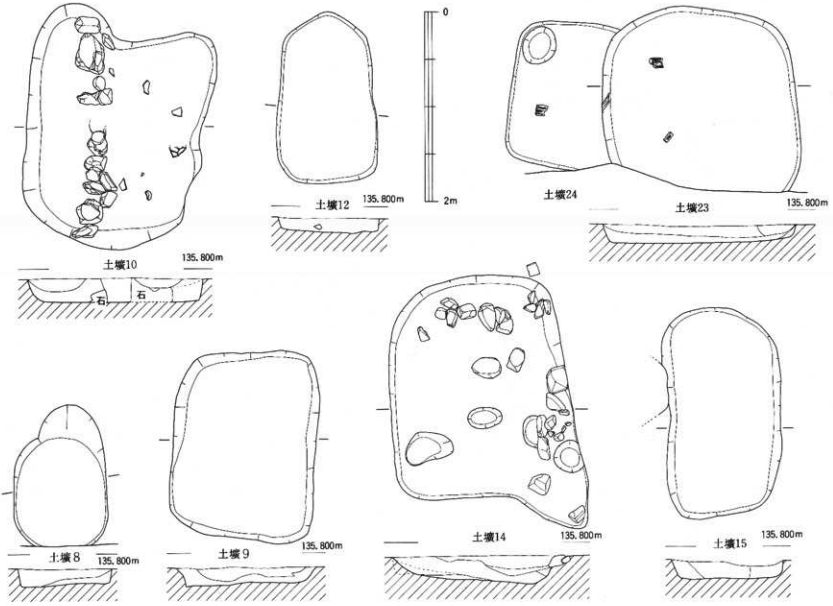
土壙9（第31図）

溜枡状遺構の北西 2.5m に位置する隅丸長方形を呈する土壙で、長辺 2.0m 、短辺 1.5m 、深さ 0.1m を計る。

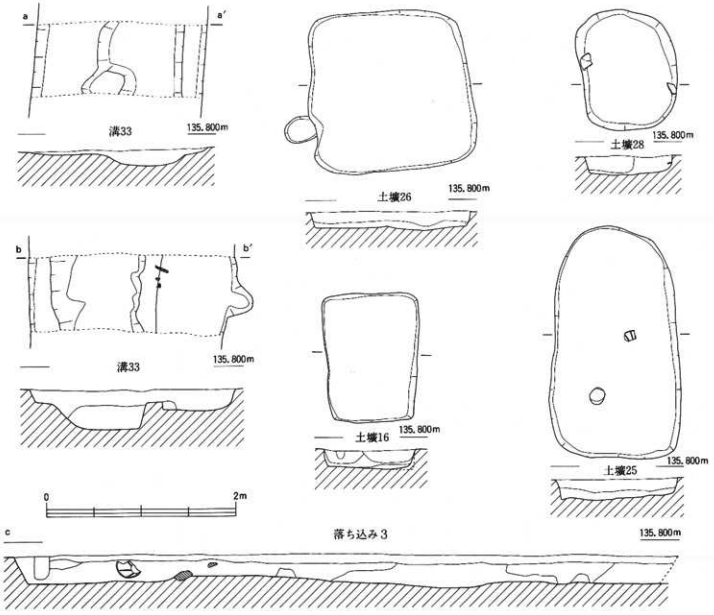
第29図　切土D地区　遺構平面図



第30図　切土D　溜枡状遺構



第31図　切土D　土壙8・9・10・12・14・15・23・24



第32図　切土D　土壙16・25・26・28・溝33・落ち込み3

土壙10（第31図）

土壙9の北に接して位置する隅丸長方形に近い不整形の土壙で、長径 2.6m 、短径 2.0m 、深さ0.26m を計る。土壙の長径に沿って石列がある。埋土より、瀬戸系陶器、焙烙（第54図 381・436）、玉砥石（第56図 439～443）が出土している。

土壙12（第31図）

土壙10の北東2m に位置する隅丸長方形の土壙で、長径 1.8m 、短径1m 、深さ0.14m を計る。

土壙14（第31図）

調査区南辺中央より北へ 3.5m に位置する不整形な土壙で、長辺 2.8m 、短辺 2.0m 、深さ 0.3m を計る。埋土内より瓦質の鍋（第54図 390）が出土した。

土壙15（第31図）

調査区西辺の南よりに位置する隅丸長方形の土壙で、長辺 2.2m 、短辺 1.2m 、深さ0.18m を計る。

土壙23（第31図）

調査区東辺やや北よりに位置する隅丸方形の土壙で、一辺2m 、深さ0.18m を計る。埋土内より、玉砥石（第56図 437）が出土した。

土壙24（第31図）

土壙23に切られる形で南接する隅丸方形の土壙で、一辺 1.6m 、深さ 0.2m を計る。埋土内より、土壙23出土と同一個体の玉砥石（第56図 438）が出土した。

土壙25（第32図）

調査区の中央やや東よりに位置する隅丸長方形に近い土壙で、長径 2.5m 、短径 1.4m 、深さ 0.2m を計る。埋土内には、石が多数落ち込んでいた。

土壙26（第32図）

土壙25の北3m に位置する方形の土壙で、一辺 1.7m 、深さ0.15m を計る。

土壙28（第32図）

土壙25の西1m に位置する隅丸長方形に近い土壙で、長径 1.3m 、短径 1.0m 、深さ 0.2m を計る。

落ち込み3（第29・32図）

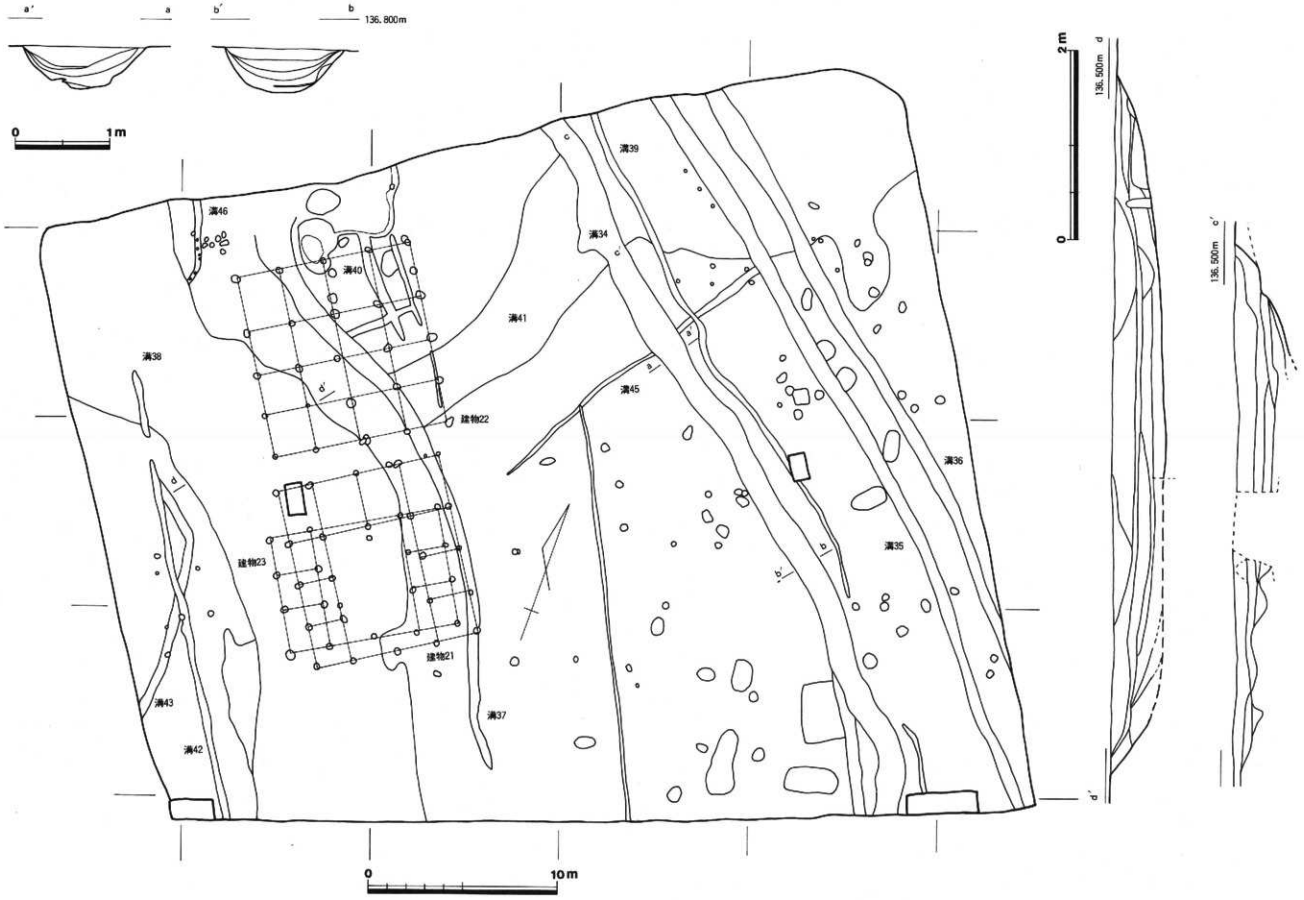
調査区南辺中央に位置する落ち込みで、南半部は調査区外となるため、全体の形状は不明である。あるいは、切土D地区の遺構群の南を画する機能をもつ遺構とも考えられる。埋土内より、陶器、瓦質三足釜、すり鉢（第54図 379・383・386・391・393）などが出土している。

溝33（第29・32図）

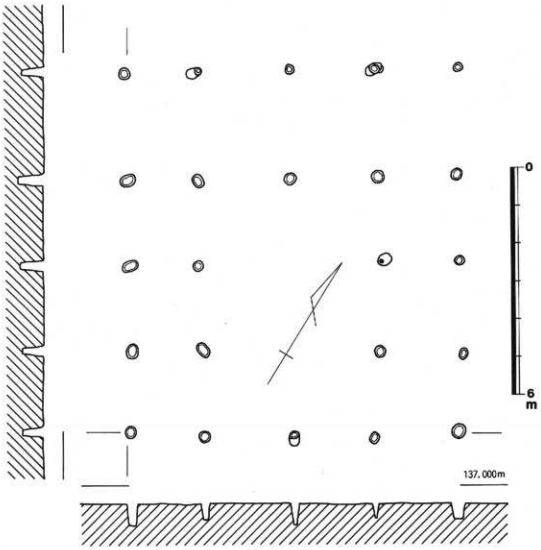
切土D地区の遺構密集区域を画するように、南北方向から東西方向へ屈曲する。溝の南北方向は35m 、東西方向は12m を検出した。溝の幅は 1.8～2.0m 、深さ 0.4m を計る。溝内埋土からは玉砥石（第56図 444）が出土している。

切土E地区（第33～35図）

今回の調査対象区南端に位置する約1500㎡の調査区で、国本と上麻生のほぼ中間にあたる。遺構は耕土と床土を除いた面で検出された。主要な遺構は、平安時代後期の掘立柱建物3棟、溝13条がある。



第33図　切土E地区　遺構平面図



第34図　切土E　掘立柱建物21

掘立柱建物21（第34図）

調査区西半部に位置する南北4間（9.6m）、東西4間（8.9m）の総柱建物である。中央の柱列の南面から2・3つ目の柱はなく、2間×3間の身舎となると考えられる。主軸方位はN－31°－Wを示す。柱間寸法は、南北間は南より、7尺・7.5尺・7.5尺・9.5尺、東西間は西より、6尺・8尺・7.5尺・7.5尺となる。柱穴規模は径30cm前後、深さ60cm前後を計る。各柱穴より、以下の遺物が出土している。(　) 内は第55図遺物番号を示す。

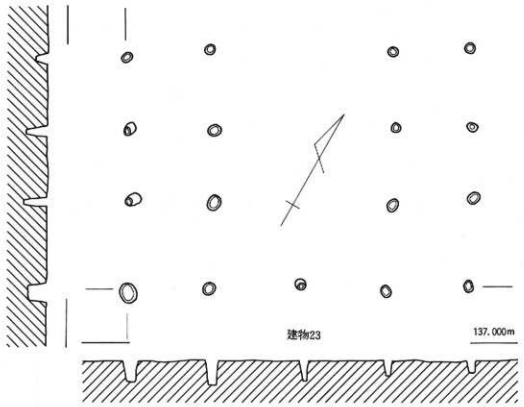
P．20（401）、P．96（400・402）、P．202（405）、P．5（404）

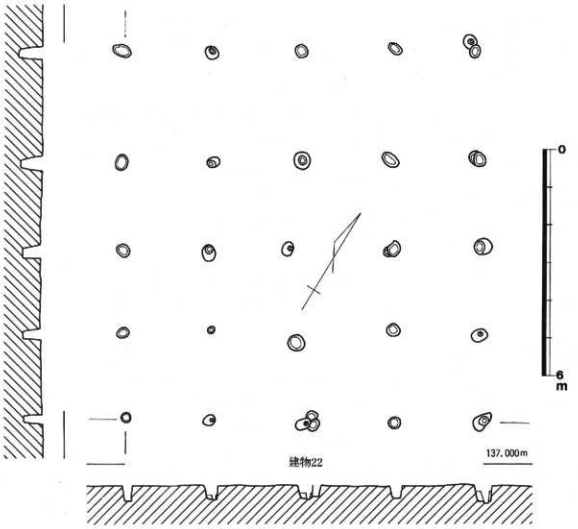
掘立柱建物22（第35図）

建物21の北面から1.7m離れた、ほぼ同一方位・同一規模の建物である。建物規模は、南北4間（9.8m）、東西4間（9.45m）で、主軸方位はN－31°－Wを示す。中央の柱列の南面から2・3つ目は柱筋をはずれる。柱間寸法は、南北間は南より8尺・7.5尺・7.5尺・9.5尺、東西間は西より、7.5尺・8.5尺・7.5尺・7.5尺となる。柱穴規模は径30cm前後、深さ50cmを計る。P．202より土師器坏（第55図 405）が出土した。

掘立柱建物23（第35図）

建物21と重複する南北3間（6.3m）、東西4間（9.1m）の建物である。中央の柱列は南面の1ケ所しか確認で





第35図　切土E　掘立柱建物22・23

きなかった。主軸方位はN－30°－Wを示す。柱間寸法は、南北間は南より、8尺・6尺・7尺、東西間は西より、7尺・8尺・8尺・7尺となる。柱穴規模は30～40cm、深さ50cm前後を計る。P．33より 406が出土した。

溝34・35・36・39（第33図）

調査区東半部で検出した平行に開削された4条の溝で、主軸方位はN－50°－Wを示す。溝34と溝39の中心間距離は2m、溝39と溝35は4m、溝35と溝36は 2.5m を計る。溝幅は溝34が 1.5m 、溝39が 0.3m 、溝35が 1.2m 溝36が1m を計る。溝35からは8世紀初めの須恵器杯（第55図 396）が出土している他、溝の延長上にあたる北へ約50m の地点でも、試掘において奈良時代前期の須恵器杯蓋が出土している。これらの平行した溝は、道路の側溝と考えるのが妥当であろう。

溝38（第33図）

建物21～23以前に埋没した自然流路で、幅8m 、深さ 0.5m を計る。最上層より、平安時代後期の土師器・黒色土器（第55図 407・408）、山茶椀などが出土している。工事との関係で、完掘しなかった。

切土F地区（第36～42図）

今回の調査対象区のほぼ中央、上麻生と岡本の中間に位置する約2700㎡の調査区である。遺構は耕土と床土を除いた面で検出された。主要な遺構は、弥生時代後期の方形周溝墓3基、古墳時代後期の竪穴住居2棟、平安時代後期の掘立柱建物5棟、条里関係の溝などである。なお、調査中、下層遺構の存在が判明した。概要については、切土F地区下層として報告する。

素掘り溝（第37図）

調査区南半に分布する耕土直下から掘り込まれた溝である。溝は、1.5～ 2.0m 間隔で平行している。溝の方位はN－17°－Wを示す。

掘立柱建物24（第38図）

調査区北東隅に位置する南北4間(9.2m)、東西3間(7.4m)以上の総柱建物である。主軸方位はN－23°－Wを示す。柱間寸法は、南北間は南より、 7.5尺・8尺・8尺・7尺、東西間は西より、8尺・ 7.5尺・8尺を計る。柱穴は、径30～40cm、深さ50cmを計る。

掘立柱建物25（第38図）

建物24と重複する南北2間(4.4m)、東西3間(6.9m)以上の建物である。主軸方位はN－30°－Wを示す。柱間寸法は、南北間は南より、7.5尺・7尺、東西間は西より、7尺・ 7.5尺・8尺を計る。柱穴は、25～40cm、深さ50cmを計る。

土壙38（第39図）

建物25・26の西面に接して掘り込まれた長方形の土壙で、長辺1.65m 、短辺 0.9m 、深さ0.45m を計る。土壙底部はさらに 1.0m × 0.5m の掘り込みがある。主軸方位は N－18°－E を示す。土壙内南半から、12世紀の土師器小皿3点が直立した状態で出土した。

掘立柱建物26（第39図）

調査区中央やや西よりに位置する南北2間(4.95m)、東西3間(7.15m)の建物で、主軸方位はN－24°－Wを示す。建物西面には、方位を異にした廂と考えられる柱列がある。柱間寸法は、8尺を基準とする。

掘立柱建物27（第39図）

建物26の南12m に位置する南北2間（4.4m)、東西3間（6.65m ）の建物で、主軸方位はN－31°－Wを示す。

柱間寸法は、7.5尺を基準とする。

掘立柱建物28（第40図）

調査区北端に位置する南北4間（11.0m）、東西3間（7.25m）の建物で、西面に東西1間（2.25m）、南北2間（6.1m）の張り出しがある。南面の東から3つ目の柱と、北面の東から2つ目の柱は確認できなかった。柱間寸法は、南北間は南より、7尺・9.5尺・10.5尺・9.5尺、東西間は西より、8.5尺・8尺・7.5尺を計る。

竪穴住居11（第41図）

調査区北西角近くに位置する方形の竪穴住居で、東西辺 5.6m、南北辺 5.8m を計る。柱は4本柱で、柱穴寸法は東西 2.5m、南北2.74m、柱穴の径14cm、深さ60cmを計る。主軸方位はN－24°－Wを示す。北壁中央の床面は焼けており、カマドの痕跡と考えられる。壁溝は南半部にのみ廻らせている。床面及び柱穴から、6世紀後半を示す土師器、須恵器（第55図 431～434）が出土した。

竪穴住居12（第42図）

調査区北西角に位置する方形の竪穴住居で、東西辺 5.1m、南北辺4.82m を計る。柱は4本柱で、柱穴寸法は東西間・南北間ともに2.34m を計る。柱痕部は径8cm、深さ36cmを計る。本住居は、床面直上全面に炭化材が認められ、焼失して廃屋となったと考えられる。また、住居中央を2分するように、平安時代中期の溝が南北に開削されている。住居の主軸方位はN－23°－Wを示す。北壁中央の床面には、浅い凹みと焼土が認められ、カマドの痕跡と考えられる。南壁の東寄り床面には、上端は方形、下半は円形の貯蔵穴が設けられている。上端は南北90cm、東西80cm、深さ66cmを計る。貯蔵穴上層から、6世紀後半の須恵器（第55図 428）が出土した。

方形周溝墓1（第36図）

調査区のほぼ中央に位置する。方形部上端で、南北11.9m、東西10.3m を計る。周溝は、幅約1m、深さ 0.4mを計る。主体部は確認できなかった。主軸方位はN－33°－Wを示す。周溝内より、弥生時代後期の甕の細片が出土している。

方形周溝墓2（第36図）

周溝墓1の南10mに位置する。方形部は全体にひずむが上端で、南北約11m、東西11.2m を計る。周溝は、幅1.6m、深さ1.0mを計る。切土にかかる周溝部分は完掘したが、遺物はなかった。主軸方位はN－43°－Wを示す。

方形周溝墓3（第36図）

周溝墓2の周溝を共有して南接する。3基の周溝墓のうち一番大きく、上端で、南北約16m、東西約14m、周溝の幅3m を計る。主体部は確認できなかった。

土壙39（第36図）

周溝墓2の西 1.2m に、主軸方位を同じくして位置する長方形の土壙で、木棺直葬墓の可能性がある。長辺1.1m、短辺 0.9m を計る。

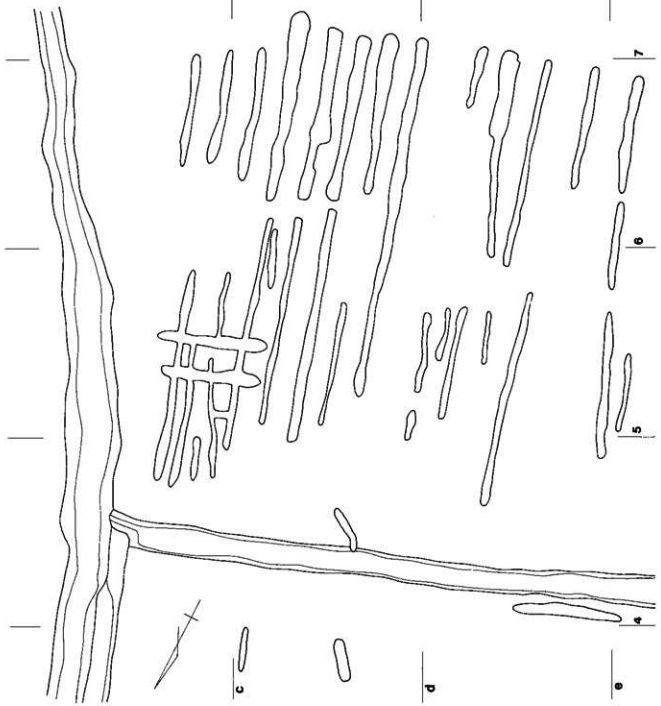
溝48（第36図）

蒲生郡条里の里境に一致する溝で、幅 2.8m、深さ 0.8m を計る。溝内下層より、瓦器（第55図 424・427）が出土した。

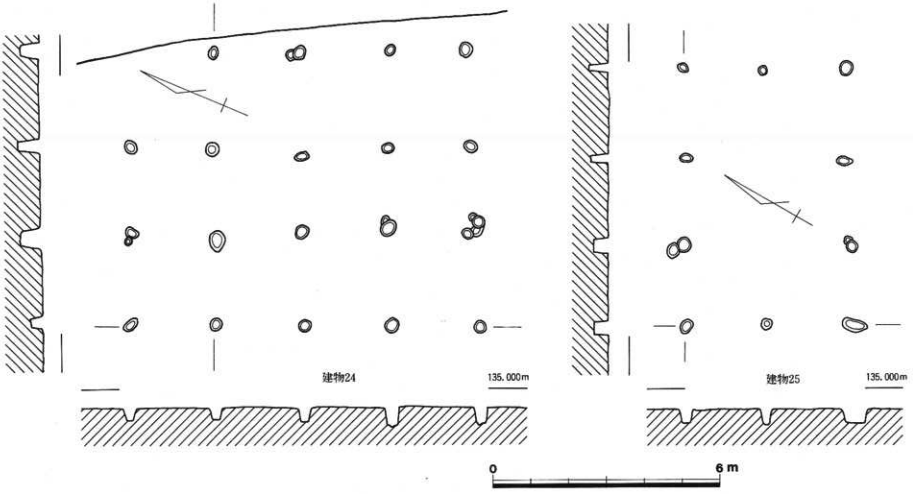
溝51（第36図）

調査区西端部に開削された南北溝で、主軸方位はN－26°－Wを示す。溝の幅約1m、深さ 0.3m を計る。溝内より緑釉陶器2点（第55図 422・423）が出土した。

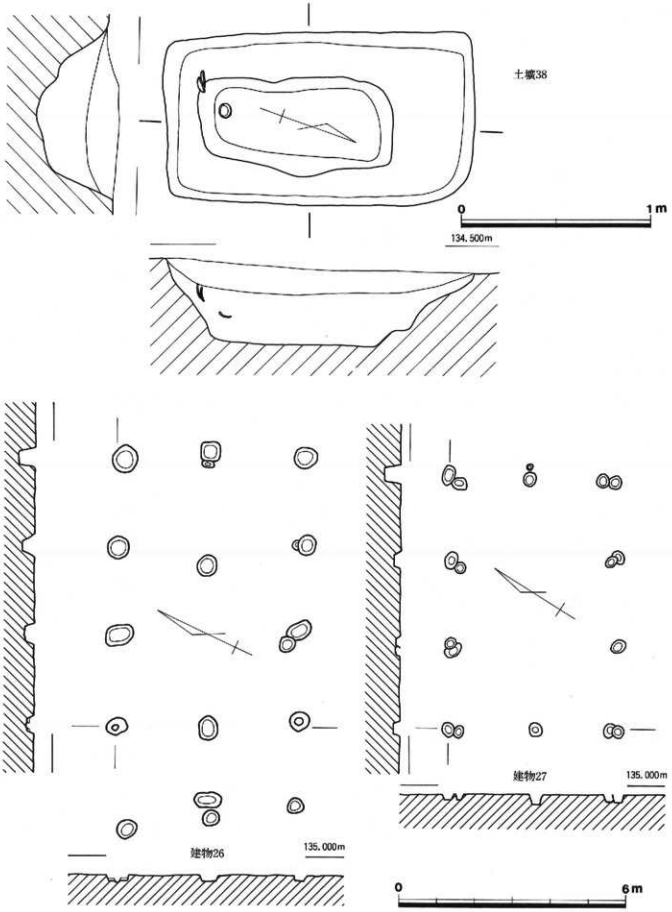
第36図　切土F地区　遺構平面図



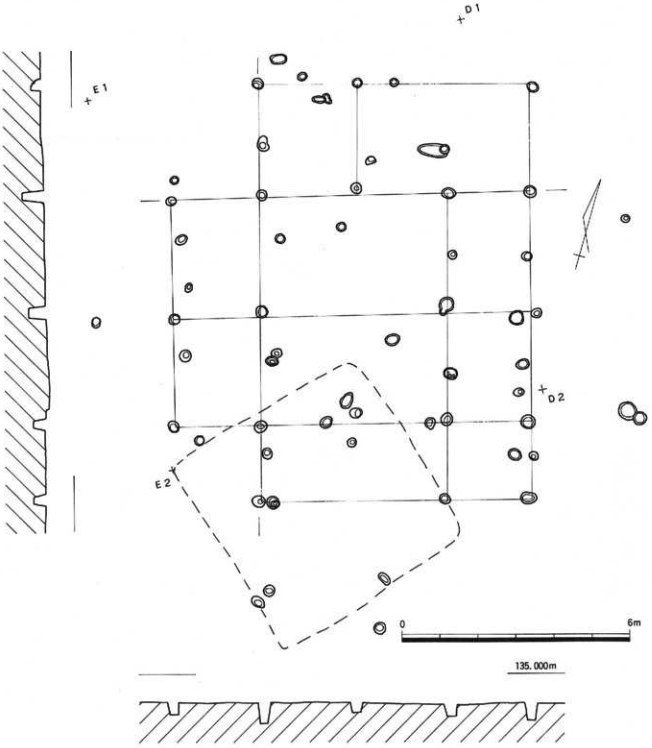
第37図　切土F　素掘り溝



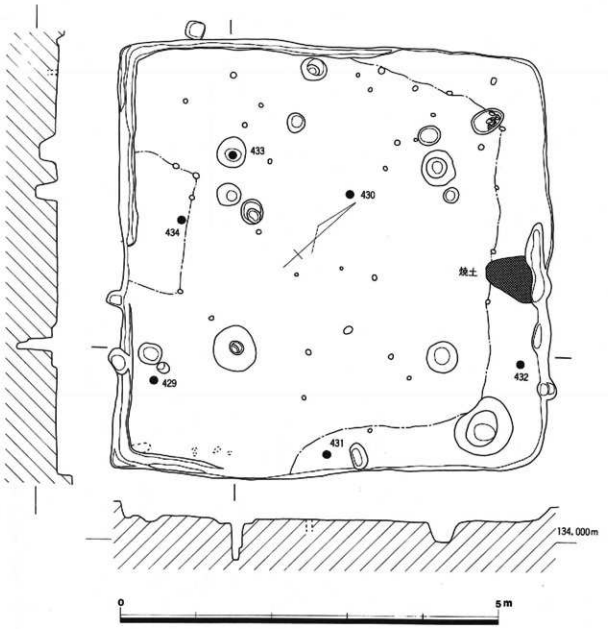
第38図　切土F　掘立柱建物24・25



第39図　切土F　掘立柱建物26・27・土壙33



第40図　切土F　掘立柱建物28



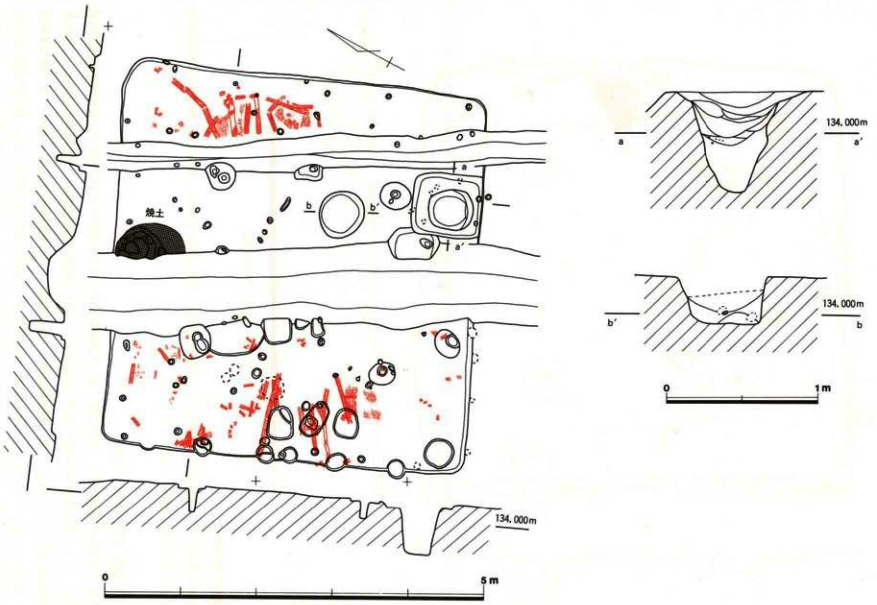
第41図　切土F　竪穴住居11

溝53（第36図）

溝51に切られて、屈曲部のみを確認した。溝幅約 2.5m 、深さ 0.5m を計る。溝内より、須恵器（第55図435）が出土した。古墳の周溝とも考えられる。

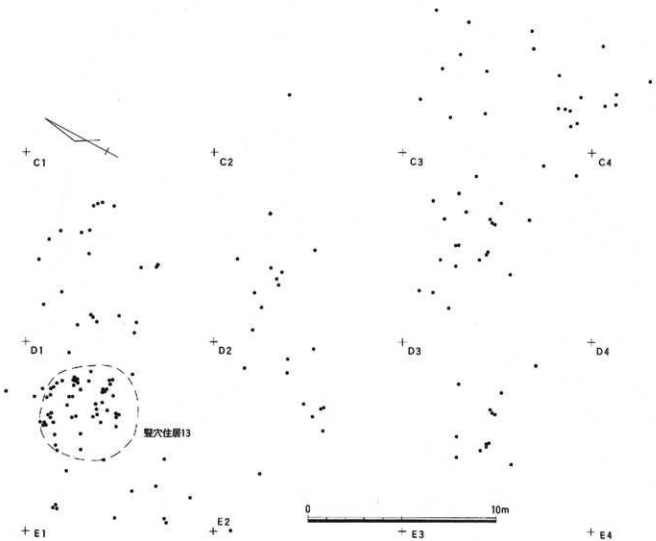
切土F地区下層（第43・44図）

岡本と上藤生の集落の間に、舌状に張り出した微高地である切土F地区の下層で検出された縄文時代晩期の遺構群で、上下2層の縄文時代晩期の遺構が検出された。切土F地区の基本土層は、第1層耕土（35cm ）、第2層淡青灰色砂質土（0～20cm）、第3層暗茶褐色土（20～30cm）、第4層茶褐色土（10～35cm）、第5層明茶灰色土（地山）となる。このうち、第2層上面が、弥生時代から平安時代後期の遺構面となる。第3層は縄文時代晩期の遺物包含層で、第4層上面が第2遺構面となる。絶対高は134.062～133.861 m を計る。さらに、第5層上



第42図　切土F　竪穴住居12

第43図　切土F　下層遺構平面図



第44図　切土F下層サヌカイトチップ分布図

面が第3遺構面となる。絶対高の1点は 133.817ｍを計る。これらの縄文時代晩期の遺構群のうち、ほ場整備での水田№92に関しては第2・3遺構面（300㎡×2＝600㎡）ともに調査を行なった。水田№92－112に関しては第2遺構面のみ（1200㎡）、水田№70に関しても同様に、第2遺構面のみ（ 500㎡）調査を行なった。調査総面積は2300㎡となった。主な検出遺構は、竪穴住居、土壙、柱穴群、甕棺墓などである。これらの遺構群は切土F地区の南北1ラインから4ラインの30ｍ、東西BラインからEラインの30ｍ に集中しており、この範囲が居住区域であったと考えられる。この中には、多数の柱穴群とともにサヌカイトの剥片が遺構面直上に散布していた。柱穴は、径20～30㎝のものがもっとも多く、掘方は、地面に対して垂直なものと、斜角をなすものとがある。柱穴の底部は尖り気味に終るものが多く、先端を尖らした柱材を使用している。柱穴群は、垂直に立つ主柱と、斜角をなす垂木がセットとなって住居を構成すると考えられるが、今回の報告では明確にし得なかった。竪穴住居13は、径約5ｍ の不整円で、深さ8㎝を計る。竪穴の輪郭、柱穴ともに明確ではなかったが、暗茶褐色の堆土中に、打製石斧（第57図 478）、石鏃をはじめ、サヌカイトの剥片50点以上が集中していたことから、住居と考えた。竪穴住居の北東約7ｍ の地点では、土壙内底部にベニガラを撒いた遺構があった。土壙は、隅丸長方形に近く、長径約 1.1ｍ、短径 0.8ｍ、深さ0.27ｍ を計る。ベニガラは、土壙内底部の北半部の50㎝四方において認められた。また、竪穴住居の南東27ｍ の地点で、甕棺1基（第57図 464）を検出した。

（２）遺物（第45～57図）

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナ（長さ54cm×幅34cm×深さ14cm）に約80箱を数える。内訳は、縄文時代晩期の土器・石器類、弥生時代の土器、古墳時代中期から後期にかけての土器、奈良時代から平安時代前期にかけての土器、平安時代後期から鎌倉時代前期の土器、室町時代の土器・石器類に分類できる。このうち、２号排水の溝19から出土した古墳時代中期の一括資料と、１号排水の土壙２・切土Ｂの土壙３～７・建物群から出土した平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての一括資料は、今後の編年作業の基準資料となるべき内容をもつものである。以下、時代別に記述する。

縄文時代晩期（第57図）

切土Ｆ地区下層の遺構群及び包含層から出土した。遺物量は、整理用コンテナに３箱である。このうち、図化しえたものは、土器18点、土製品１点、石器14点である。このうち、石匙（477）についてのみ、切土Ｂ地区の包含層から出土している。土器については、全体が判明するのは甕棺として使用されていた（464）のみで、他は、口縁部11点、底部６点である。口縁部の形態と凸帯の有無で分類する。

甕Ａ（447～449）：外弯して開く口縁部の外面に幅の広い凸帯がつく。凸帯には貝殻状工具による押圧がある。口縁端部は丸くおさめる。胎土は比較的粗い。外面には、明瞭な条痕がみられる。

甕Ｂ（451・452）：直線的に開く口縁部の外面に断面三角形の凸帯がつく。凸帯には刻目を施す。口縁端部は尖り気味に終るもの（451）、外側が肥厚気味に終るもの（452）がある。胎土は精良である。

甕Ｃ（450・453）：外弯して開く口縁部の外面に幅の広い凸帯がつく。凸帯には押圧が認められる。口縁端部は丸く終る。

甕Ｄ（454）：直線的に開く口縁部の外面に断面三角形の凸帯がつく。口縁端部は、丸味を帯びて終る。胎土は精良である。

甕Ｅ（455）：口縁部は外反する。口縁端部は丸く終る。胎土は精良である。

甕Ｆ（456・457）：口縁部は直線的に外上方へ開く。口縁端部は面をもつ。器壁は厚く、内外面に条痕がみられる。

今回の調査で唯一、全体の判明する甕（464）は、上記の分類によると甕Ｂに該当する。口縁部は直線的に開き、端部近くに一条の刻目凸帯を付す。体部上半に最大径をもち、ゆるい段をなしている。底部は平底である。口径は43.5cm、高さ約40cm、底部径 7.7cmを計る。体部上半は内外面ともに条痕を施し、下半はヘラケズリである。

用途不明土製品（465）：径３cmのドーナツ状土製品で、突起部をもつ。一部は欠損しており、この土製品自体は、装飾的な部品であることを予想させる。

凹石（466・467）：２点出土した。いずれも円形もしくは楕円形で、一方の面の中央に凹みをもち、対面は使用痕をもつ。(466)は一部欠損しているが、径 9.7cm、厚さ 6.4cm、(467)は、長径10.4cm、短径8.4cm、厚さ4.6cmを計る。

石棒（468・469）：いずれも破片であり全体像はうかがえない。(468)は棒部の磨きが認められる。(469)は、頭部で、７条の沈線を廻す。

石鏃（470～476）：無柄式の石鏃７点が出土した。すべてサヌカイト製で、長さ1.6～2.6cm、幅1.2～1.8cm

1.8cm、厚さ 0.3～ 0.4cmを計る。

石匙（477）：横型石匙で、刃部長 9.4cm以上、幅 5.6cm、厚さ 0.6cmを計る。切土B地区からの単独出土であり、時期的にも遡る可能性が強い。サヌカイト製である。

打製石斧（478）：竪穴住居13内から出土した。長さ14cm、幅 5.4cm、厚さ 2.6cmを計る。サヌカイト製。

石皿（479）：凹面は磨り減る。残存長18cm×13.4cm、厚さ3.6cmを計る。

（まとめ）以上の遺物のうち、土器については、東海系と考えられる条痕文系の土器が多いことが注目される。時期的には縄文時代晩期後半の馬見塚式から元貫森式に平行すると考えられる。また、遺構面上や竪穴住居内より、多数のサヌカイト片が出土することから、石鏃を中心とする石器製作が行われていたことは確実である。

弥生時代

麻生遺跡の弥生時代遺構は、切土F地区の方形周溝墓群のみであるが、遺物は前期末から後期までのものを出土している。いずれも微量のうえ細片であったため図化しえなかった。前期末の土器は、切土F地区下層の縄文時代晩期遺物包含層の直上で1点のみ検出した。つづく、中期の土器は、2号排水の下麻生に近い自然流路内より数点出土した。後期の土器は、切土F地区の方形周溝墓群周辺から数点出土している。

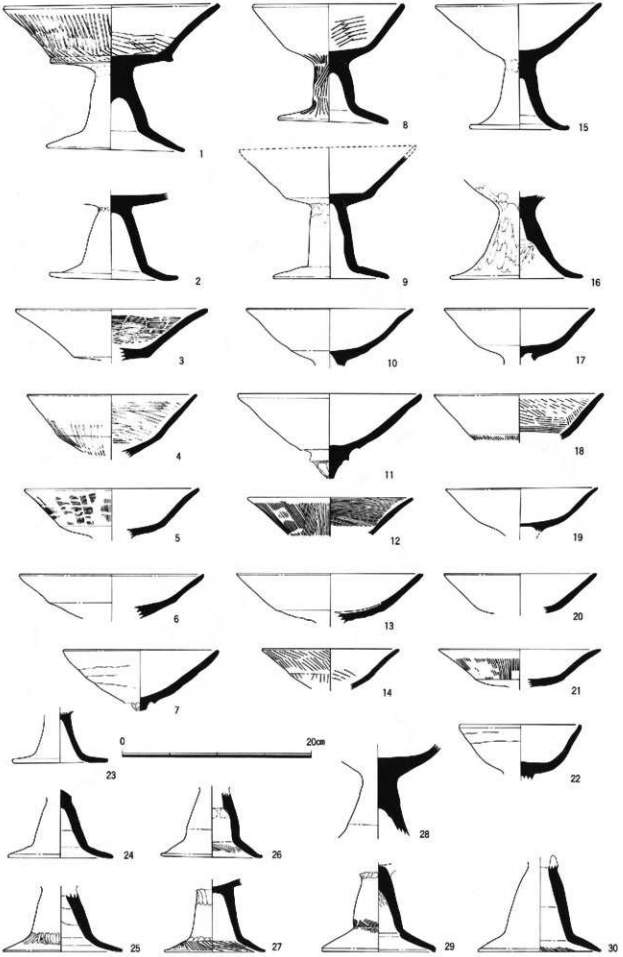
古墳時代（第45～48・53・55図）

2号排水路地区の溝・竪穴住居群から出土した中期の土器群と、1号排水路地区の竪穴住居群・溝及び切土F地区の竪穴住居群から出土した後期の土器群に分かれる。とくに前者の土器群は、整理用コンテナ20箱を数え、須恵器出現直後の5世紀後半代の湖東地域土器様相を知るうえで資料的価値は高い。ここでは、溝19出土土師器を中心に分類する。

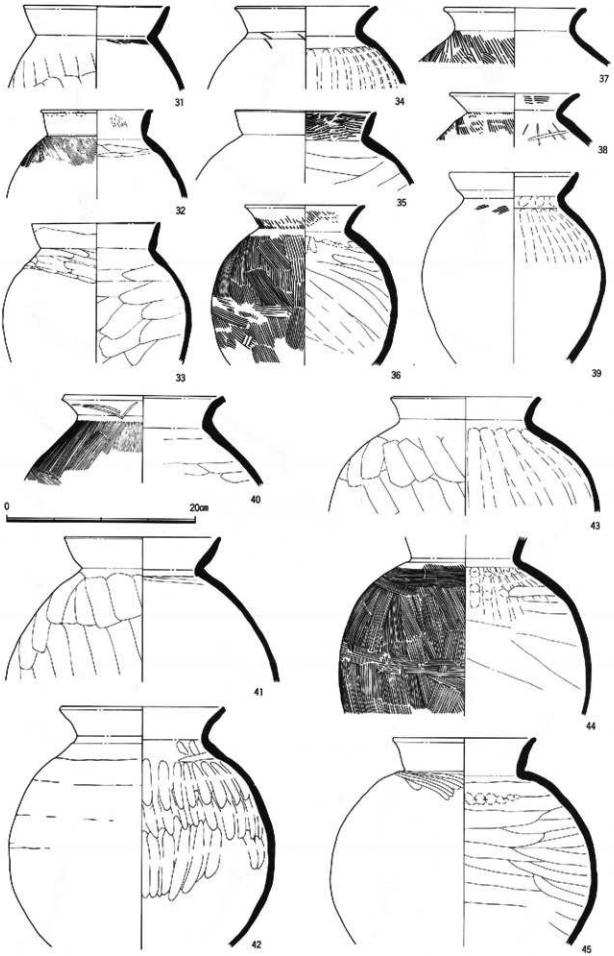
（中期）

高杯（第45図1～30）：杯部の形態から4タイプに分類できる。A(1)杯部の底部と口縁部の屈曲部分に断面三角形の凸帯を廻す。口径は22.9cm、高さ15.3cmと大型である。口縁端部は面をなし、端部近くの内面は浅い凹線となる。杯部外面と内面下半は幅の広いハケ目を施す。B（3・5・6・8・9・12・17・18・20・21）杯部の底部はAと較べて小さく、口縁部は外上方に直線的に開き、屈曲部はゆるやかな稜をなす。口縁端部は丸く終るものが多い。杯部内面及び杯部の底部外面にハケ目を施すものが多い。（8）では脚部外面にもハケ目を施す。C（4・7・10・11・13・14・15・19）杯部については、底部と口縁部の境が明瞭でなく、脚部との接合部から口縁端部まで直線的に外上方へ開く。口縁端部は尖り気味に丸く終るものが多い。全体の調整はナデによるものが多い。D（22）杯部は椀形を呈し、A～Cタイプに較べて小型である。口縁部外面には粘土紐の継目を残す。法量は、Aタイプの口径22.9cm、Bタイプの口径17.7cm、Cタイプの口径17.4cm、Dタイプの口径12.9cmを計る。

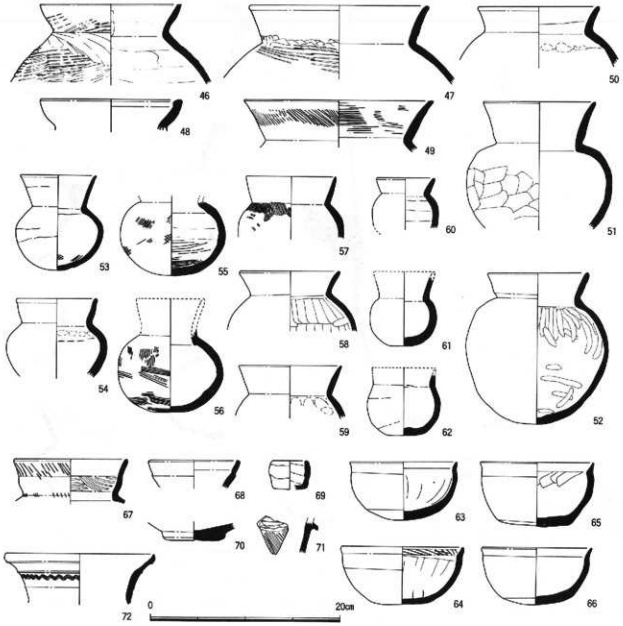
甕（第46・47図31～50）：口縁部の形態から9タイプに分類できる。A（31・41・46）口縁部は内弯気味に外上方へ開く。口縁端部は内傾した面をなすもの（31・46）と丸く終るもの（41）がある。体部外面はヘラケズリするもの（31・41）とタタキ目を残すもの（46）がある。B（34・40・42・43）口縁部は外弯気味に外上方へ開く。口縁端部は外傾した面をなす。体部外面はナデによるもの（34・42）、ハケ目を施すもの（40）、ヘラスズリするもの（43）がある。体部内面上半は指によるタテナデ（34・42・43）が多い。体部内面下半の調整がわかる唯一の例ではヘラケズリする（42）。なお、口縁部外面にV字のヘラ記号をもつもの（40）がある。C（33・38・45・47・50）口縁部は直線的もしくは外弯気味に外上方へ開く。口縁端部は尖り気味に丸く終る。体部外面肩部をヘラ状工具でヨコ方向に押圧し、以下をナデによるもの（33・45）、体部外面肩部にハケ目を施すもの（38・47）、体部外面は



第45図　2号排水　溝19　出土遺物(1)

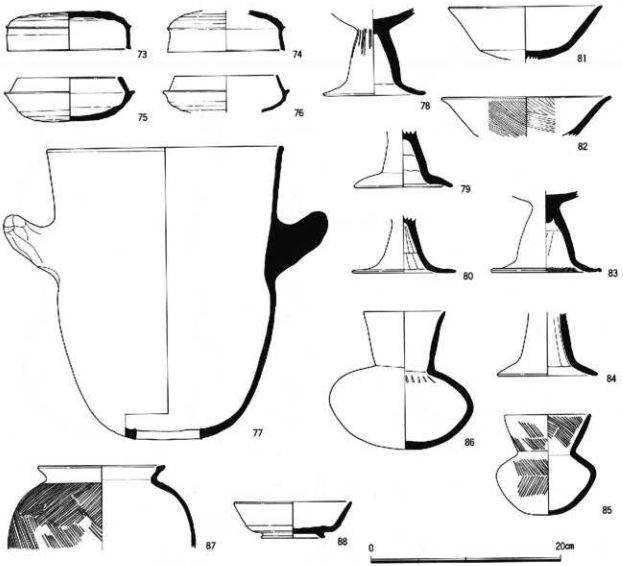


第46図　2号排水　溝19　出土遺物(2)



第47図　2号排水　溝19　出土遺物(3)

ナデによるもの(50)がある。体部内面は、ヘラケズリをするもの(33・45)とナデによるもの（38・47・50）がある。D(36・37・44)口縁部は外寄気味に外上方へ開き、口縁端部内側に凹線を廻す。体部外面はハケ目を施し、内面はヘラケズリする。E(32)口縁部は直立に近い。口縁端部は外方へつまみ出す。体部外面肩部はハケ目、以下はナデる。体部内面はヘラケズリののちナデる。F(35・49)口縁部は直線的に外上方に開き、口縁端部は内傾した面をなす。体部外面はナデ、内面はヘラケズリによる。口縁部内面はハケ目を施す。G（39）口縁部は内寄気味に外上方へ開き、口縁端部内側に凹線を廻す。体部外面はタテナデ、内面は指によるタテナデをする。H(48)口縁部は内寄して外上方に開く。口縁端部は内傾した面をなし、内側は肥厚する。I（67）口縁部は中位で屈曲し段をなす。口縁部外面はハケ目を施す。法量は、口径の比較で、Aタイプ15.7cm、Bタイプ17.5cm、Cタイプ14.9cm、Dタイプ15.0cm、Eタイプ11.9cm、Fタイプ17.5cm、Gタイプ13.6cm、Hタイプ15.0cm、Iタイプ12.1cmを計る。



第48図　2号排水　出土遺物

壺（第47図51～62）：法量からは大・中・小の3種類に分類できる。大壺は、口径 9.5～11.8cm、胴部最大径15cm前後を計る。口縁部が長いもの(51)と短いもの(52・57・58・59)とがある。体部外面はヘラケズリするもの(51)、ハケ目を施すもの(57)、ナデるもの(52・58・59)がある。体部内面はナデによるが、ヘラケズリするものが1例(58)ある。中壺は、口径 8.0～8.6cm、胴部最大径 9.2～11.0cmを計る。体部外面はナデによるもの(53・54)とハケ目を残すもの(55・56)がある。小壺は、口径 6.2cm、胴部最大径 7.0～7.8cmを計る。全面ナデによる調整をする。

杯（第47図63～66）：半球形を呈するもの(63)と平底に内寄する口縁部をもつもの(65)と両者の中間的な形態のもの(64・66)がある。いずれも口縁端部は外反して尖り気味に終る。口縁端部近くはヨコナデ、他はナデによる。内面にヘラ状工具による放射状の押圧痕があるもの(63・64)や、口縁端部内面にハケ目を施すもの(64)がある。法量は、口径11.3～13.0cm、高さ 6.1～ 6.7cmを計る。

手づくねミニチュア土器（69）：口径4cm、高さ3cmの円筒状を呈する。内外面に粘土紐の継目を明瞭に残す。

須恵器壺（72）：口縁部外面に3条の稜をもち、2条目と3条目の間に波状文を施す。TK－23型式からTK－47型式に平行すると考えられる。

須恵器杯蓋（73・74）：天井部から口縁部への屈曲部に鋭い稜をもつ。口縁部は垂直に下り、端部は内傾した凹面をなす。天井部は全面にヘラケズリする。ＴＫ－208型式からＴＫ－23型式に平行すると考えられる。(73)は竪穴住居4から、(74)は溝20から出土した。

須恵器杯身（75・76）：(75)は口縁の立ちあがりが内傾し、端部に面をなす。器壁は（76）と比較して厚い。（76）は口縁の立ちあがりが内傾し、端部は丸く終る。(75)に較べて、立ちあがりは長い。上記の杯蓋類より新しい様相を示している。ともに溝20から出土した。

甑（77）：竪穴住居3のカマド横から出土した。口径25㎝、器高30.9㎝を計る。胴部上半に２本の把手をもつ。底部は長径 6.7㎝の楕円形の穴が２つある。土師器。

（後期）

１号排水の竪穴住居２（第53図 364～367）、切土Ａのしがらみ状遺構（第53図 351～352）、切土Ｆの竪穴住居11（第55図 429～434）・12（第55図 428）・溝53（第55図 435）から出土した。各調査区からの遺物出土量は決して多くないが、広範囲から出土する。須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺・甕、土師器甑・把手付椀などがある。

須恵器杯身(364・428・429)：（364）はたちあがりがもっとも垂直に近く、端部は内傾した面をなす。ＴＫ－47型式に平行すると考えられる。(428・429)はたちあがりが内傾して、器高も低くなる。ＴＫ－43型式に平行すると考えられる。口径は、(364)が11.0㎝、(428)が12.2㎝、(429)が10.6㎝を計る。

須恵器杯蓋（351）：天井部につまみを有し、口縁部内面にかえりをもつ。７世紀第２四半世紀の所産と考えられる。

須恵器高杯（352・365・366）：（352）はたちあがりを有する有蓋高杯である。(365・366)は同一個体の杯部と脚部である。杯部の中位に段を有し、以下に波状文を施す。脚部は短脚一段透しで、三方向に透しをもつ。(364)と同時期である。

須恵器鉢（430）：口縁端部は欠損する。球形の胴部に大きく開いた口縁部がつく。胴部中位には長さ１㎝前後の縦位の平行刻目がある。口縁部には上下に波状文を施す。胴部には融通有の円孔がない。(429)と同時期。

須恵器甕（433・434）：いずれも口縁部のみで、胴部は不明である。口縁端部が上下方向に肥厚するもの(433)と、下方に折り返すもの（434）がある。口径は、(433)が14.0㎝、(434)が18.3㎝を計る。

土師器甑（431）：竪穴住居11の床面から出土している。口径21.8㎝、器高24.7㎝を計る。胴部中位のやや上に左右２本の把手をもつ。底部は中央に幅 1.6㎝の板状のしきりがあり、左右は穴となる。胴部外面は、タタキ目を施した後、全面にカキ目を施す。胴部下端の内外面はヨコ方向のヘラケズリをする。

土師器把手付椀（432）：把手は欠損する。口径12.0㎝、器高 7.7㎝を計る。内面はヨコ方向のカキ目を施す。

手ずくねミニチュア土器（367）：竪穴住居２のカマド内から出土した。半球形で、全面に指押えの痕を残す。口径 6.3㎝、器高 3.5㎝を計る。

奈良時代～平安時代前期（第48図88・第53図 346～350・ 353～363・第55図 396～398）

１号排水（346～350・356・557)、２号排水(88)、切土Ａ(353～355・358～363)、切土Ｅ(396～398)から出土した。図化しえたものはすべて須恵器で、杯身・杯蓋・皿・鉢・盤である。年代的には７世紀末から９世紀前半までのものを含む。

杯Ａ（358・359・396）：平底の杯で、底部に丸味をもつもの（396）と、平らなもの（358・359）がある。前者は７世紀末、後者は９世紀前半とみられる。

杯B（88・348・349・360・361・398）：底部から口縁部となる屈曲部より内側に、外下方へのびる高台がつくもの(88)と、屈曲部に高台がつくもの(348・349・360・361・398)がある。前者は7世紀末、後者は8世紀～9世紀前半とみられる。大きさには大小があり、大は高台径で10.2～13.3cm、小は 6.8～ 8.5cmを計る。

杯蓋(346・447・350・353～355・397)：口縁端部が内下方へ垂下するもの(350)、天井部から口縁部にかけてがわずかに屈曲し、口縁端部がほぼ垂直に垂下するもの(346・353・354)、天井部と口縁部の境は明瞭に屈曲し、口縁端部は短く垂下するもの(347・355・397)とに分けられる。それぞれ、8世紀前半、8世紀後半、9世紀前半に比定される。口径には大21.6cm、中15.5～17.5cm、小12.8cmがある。

皿(362・363)：口縁端部が丸く終るもの(362)と、面をなすもの(363)がある。(362)は口径14.2cm、器高2.1cm、(363)は口径15.6cm、器高 1.6cmを計る。

鉢(356)：欠半は欠損するが、鉄鉢形になると考えられる。口縁端部は外上方へ尖り気味につまみ出す。口径は14.8cmを計る。

壺(357)：溝1より出土した。蓋付の薬壺と考えられる。口径11.0cm、器高14.1cm、胴部最大径21.1cmを計る。8世紀前半の所産とみられる。

中世前期（第49図～第53図・第55図）

1号排水及び切土B地区の掘立柱建物群・土壙から多量の出土をみた。とりわけ、1号排水の土壙2、切土Bの土壙3・4・5・7の遺物は一括性があり、今後の土器編年の基準資料となり得る。出土土器の器種は、土師器・黒色土器・瓦器・灰釉系陶器・緑釉・白磁・須恵器である。とりわけ、近江においては比較的少ない瓦器が、土師器：黒色土器：瓦器の比率で概算すると5：3：2に近いことは注目される。これらの土器は、大半が12世紀代におさまり、3～4型式に分類できる。ここでは、上記の一括遺物を中心に説明する。

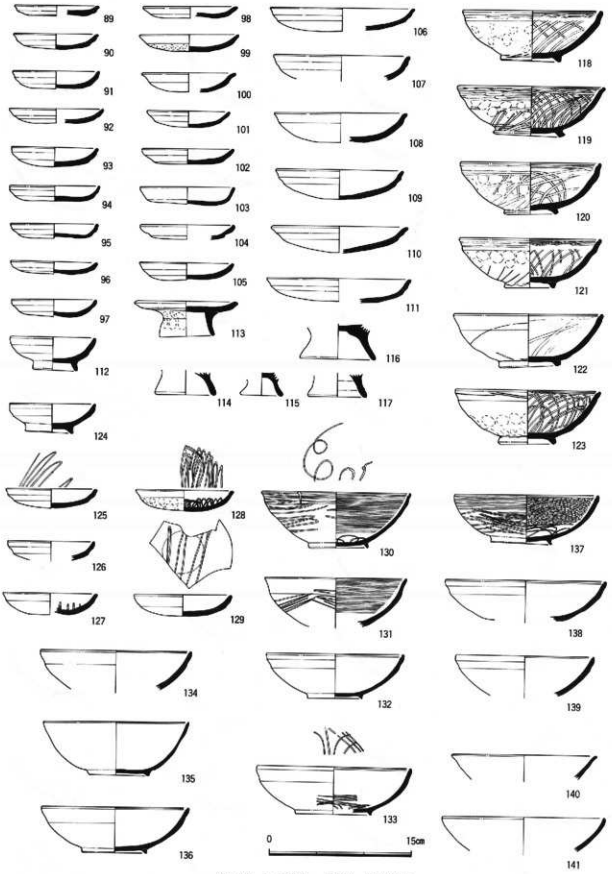
(土壙2) 土壙墓と考えられる遺構で、完形品も多く、一括性が高い遺物群である。土師器の小皿・大皿・脚付小皿・小椀、黒色土器の椀、瓦器の小皿・小椀・椀、緑釉陶器の椀、白磁の椀が出土した。とりわけ、黒色土器の椀6点（118～123）が完品で出土したことが目をひく。

土師器小皿（第49図89～105）：口縁部の形態より5タイプに分類できる。Aタイプ(89～97・101・102・105)口縁部を二段ナデするもので、口縁端部を外反させるものと丸く終らせるものがある。土壙2出土の土師器小皿の大半を占める。口径は 8.7～10.0cm（平均 9.3cm)、器高は 1.1～ 2.1cm（平均 1.7cm）を計る。Bタイプ(98・99)口縁部は一段ナデで、外反し、端部は丸く終る。口径は10.0～10.5cm（平均10.3cm)、器高は 1.3～1.8cm（平均 1.6cm）を計る。Cタイプ（100）口縁部は強くナデて、外寄して外反する。口径10.0cm、器高2.0cmを計る。Dタイプ（103）口縁部は垂直に近く立ちあがり、端部は丸く終る。口径10.0cm、器高 1.9cmを計る。Eタイプ（105）口縁端部は内側にわずかに肥厚する。底部から口縁部にかけての屈曲部はナデによる押圧で凹む。口径10.0cm、器高 1.5cmを計る。以下の土師器皿の分類は上記による。

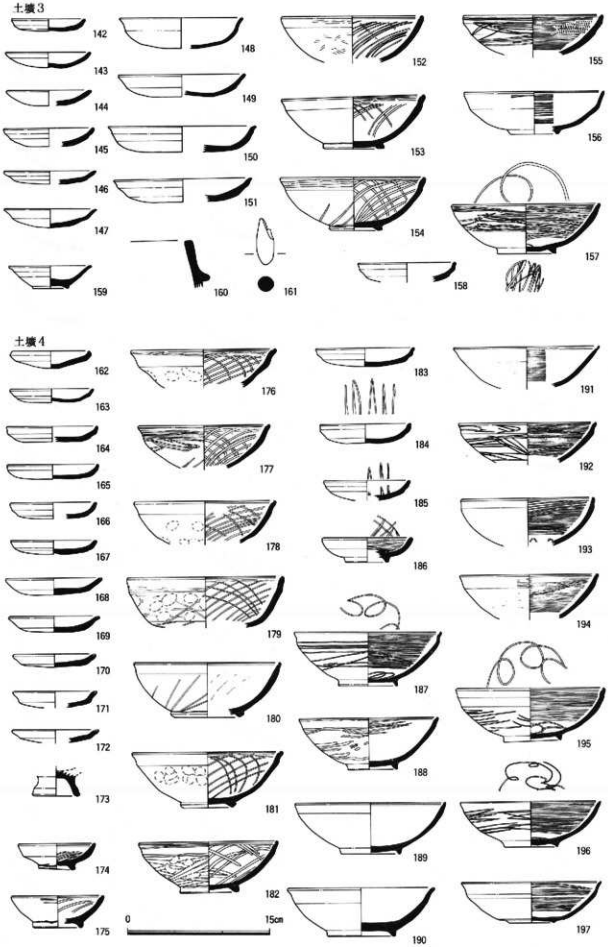
土師器大皿（106～111）：口縁部の形態から2タイプに分類できる。Aタイプ(106・107・109～111)口縁部を二段ナデする。口縁端部は外反する。口径は13.5～15.3cm（平均14.6cm)、器高は2.5～3.1cm（平均 2.7cm）を計る。Cタイプ（108）口縁部は強く外反する。口径14.0cm、器高3.2cmを計る。

土師器脚付小皿（113～117）：唯一全体がわかる例（113）では、口径10.9cmの小皿に高い脚部がつく。器高は3.8cmを計る。脚部は底径は 4.5～ 8.0cm（平均 6.2cm）を計る。

土師器小椀（112）：高台をもつ口径 9.1cm、器高 3.5cmの小椀である。瓦器の小椀（124）と類似する。



第49図　1号排水　土壙2　出土遺物



第50図　切土B　土壙3・4　出土遺物

黒色土器椀（118～123）：厚手でゆるやかに内弯する体部に、断面台形で外方へ踏張る厚手の高台がつく。口縁端部内側には一条の沈線を廻す。口縁部は強くヨコナデするため体部との境がわずかに屈曲する。内面は、見込みの中央から口縁部にかけて放射状にミガキを施す。ミガキは左上りを施した後、右上りを施す。外面は、高台と体部の接合部から口縁部にかけて放射状にミガキを施すが、内面ほど密ではなく、長さも体部中位で終る。体部外面は荒いミガキを施すが、指頭圧痕による凹みには指紋や掌痕を残す。口縁部外面はヨコナデ後、ヨコ方向のミガキを施す。法量は、口径14.8～15.8cm（平均15.2cm）、器高 5.2～5.8cm（平均 5.5cm）、高台径 5.3～7.6cm（平均6.3cm）を計る。

瓦器小皿（125～129）：口縁部の形態から3タイプに分類できる。Aタイプ（125・126）：口縁部を二段ナデする。内面は見込みにジグザグ線状のミガキを施す。Bタイプ（127・128）：口縁部は一段ナデで、外反する。Fタイプ（129）：底部から口縁部にかけての屈曲部はナデによる押圧で凹む。内面は見込みにジグザグ線状のミガキを施す。なお、(129）は炭素の付着がない。

瓦器小椀（124）：土師器小椀（112）と類似する。高台は（112）よりも短く、口縁部は二段ナデする。口径9.1cm、器高3.1cmを計る。

瓦器椀（130～139）：全容のうかがえる(130）と(137）について説明する。(130）は、内弯気味に開く体部に口縁部が少し外弯して立つ。高台は外下方へ踏張る。口縁端部内側には一条の沈線を廻す。見込みは螺旋状のミガキ、内面体部は圏線状ミガキを施す。口縁部外面はヨコ方向のミガキ、外面体部は4～5回に分割したヨコ方向のミガキを下半まで施す。(137）は、体部から口縁部にかけて内弯して開く。高台は外下方へ踏張る。見込みは螺旋状のミガキ、内面体部はヨコ方向のウロコ状のミガキを施す。口縁部外面はヨコ方向のミガキ、外面体部は4～5回に分割したヨコ方向のミガキを下半まで施す。法量は(130)の口径15.8cm、器高 5.9cm、(137)の口径15.3cm、器高 5.2cmを計る。(130）は輪花椀を意識している。

緑釉陶器椀（140）：口径15.3cmの椀で、口縁部は外反する。釉は濃緑色を呈する。

白磁（141）：口縁部は内弯する。口径 7.2cm。

（土壙3） 大型の土壙で、埋土中位からの出土が多かった。土壙埋没後に掘り込まれた柱穴内の遺物が混入している可能性もある。土師器小皿・大皿・羽釜・土錘、黒色土器椀、瓦器小皿・椀、灰釉系陶器が出土した。

土師器小皿（142～147）：口縁部の形態より3タイプに分類できる。Aタイプ（142・145）口径は 7.8～9.7cm（平均 8.8cm）、器高 1.3～2.0cm（平均 1.7cm）を計る。 Bタイプ（143・144・146）口径 9.0～9.8cm（平均9.3cm）、器高 1.4 ～ 1.7cm（平均 1.6cm）を計る。Cタイプ（147）口径 9.8cm、器高 2.0cmを計る。

土師器大皿（148～151）：口縁部の形態より3タイプに分類できる。Aタイプ(150・151）土壙2のものよりも口縁端部を強く外反させる。口径14.6～15.6cm（平均15.2cm）、器高2.5～2.7cm（平均 2.6cm）を計る。Bタイプ（149）口径13.4cm、器高 2.4cmを計る。Cタイプ（148）口径13.1cm、器高 3.2cmを計る。

土師器羽釜（160）：内傾した口縁部の外面に断面三角形のつばがつく。口縁端部は面をなす。胎土は荒い。

黒色土器椀（152～154）：土壙2の（118～123）と同タイプ。口径15.1～15.4cm（平均15.2cm）、器高 5.5～5.7cm（平均 5.6cm）を計る。

瓦器小皿（158）：Aタイプのもので、口径10.4cm、器高 2.1cm以上を計る。

瓦器椀（155～157）：(155）は、口縁部を二段ナデする。口縁端部内面には一条の沈線を廻す。体部内面は圏線状ミガキを施すが、一部ウロコ状ミガキとなる。口縁部外面はヨコ方向のミガキ、体部外面は下半まで3～4回に分割したヨコ方向のミガキを施す。(156）は、口縁部が内側に屈曲して立ち上がる。高台は断面三角形のものが

短くつく。体部内面は圏線状ミガキを施す。他は不明。(157)は、内弯して開く体部に、わずかに外反して口縁部が立つ。高台は断面三角形のものが外下方へ踏張る。口縁端部内面には一条の沈線を廻す。見込みは2～3回の螺旋状ミガキ、体部内面は圏線状ミガキを施す。口縁部外面はヨコ方向のミガキ、体部外面は、中位まで3～4回に分割したヨコ方向のミガキを施す。また、底部外面にもジグザグ状ミガキと十字ミガキが施されている。法量は、(155)が口径14.8cm、(156)が口径14.8cm、器高 4.6cm、(157)が口径15.7cm、器高 5.3cmを計る。

灰釉系陶器 (159)：体部は外上方に直線的に開き、口縁部は外反する。高台は断面三角形のものが短くつく。口径 8.8cm、器高 2.4cmを計る。

(土壙4) 土壙3に隣接した大型の土壙で、土壙3と同じく、埋没後に掘り込まれた柱穴内の遺物が混入している可能性もある。土師器小皿・脚付小皿、黒色土器小椀・椀、瓦器小皿・小椀・椀、灰釉系陶器が出土した。

土師器小皿 (162～172)：口縁部の形態より4タイプに分類できる。Aタイプ (163～167) 口径8.9～9.7cm(平均 9.3cm)、器高 1.5～ 1.8cm (平均 1.6cm)を計る。Bタイプ (168) 口径10.2cm、器高 1.8cmを計る。Cタイプ (169～172) 口径 8.8～ 9.7cm (平均 9.2cm)、器高 1.4～1.7cm (平均 1.6cm) を計る。Gタイプ(162)底部は丸味を帯び、口縁部は上方へつまみあげて、端部は尖り気味に終る。口径 8.6cm、器高 1.9cmを計る。

土師器脚付小皿 (173)：皿部は欠損する。脚部底径 5.1cm、残存高 3.2cmを計る。

黒色土器小椀 (174・175)：(174)は、口径 8.2cm、器高2.7cmを計る。体部内面には右上りの放射状ミガキを施す。外面は不明。(175)は、口径 9.9cm、器高 3.5cmを計る。体部内面は右上りの放射状ミガキを施す。外面にもミガキを施すが詳細不明。いずれも、黒色土器椀を小型化したものである。

黒色土器 (176～182)：(179) は底部が大きく、体部は直線的に上方に立ちあがる。口縁部は体部との境に屈曲をもってわずかに外反する。(176～178・180～182) は土壙2の黒色土器と同様のプロポーションである。調整については外面のミガキに差異が認められる。まず、口縁部外面をヨコ方向にミガキ、体部外面を不定方向に荒くミガキを施すもの (177・179・182) と、高台の接合部から口縁部にかけて放射状にミガキを施すもの (180) がある。(176・178・181) については、外面調整は不明である。

瓦器小皿 (183～185)：Aタイプのものばかりである。(184・185) は見込みにジグザグ線状ミガキを施す。(183) はミガキがない。口径 9.2～10.5cm (平均 9.8cm)、器高 2.0cmを計る。

瓦器小椀 (186)：器高が低いため高台付皿ともみられるが、小椀とした。体部内面は圏線状ミガキ、見込みはジグザグ状ミガキを施す。外面はナデによる。

瓦器椀 (187～189・191～197)：全容のうかがえる(187・188・195～197)についてみてみると、(197) 以外は、(130) と同じく、見込みに螺旋状ミガキを施し、体部内面は圏線状ミガキ、体部外面は、分割法によるミガキを施す。口縁部外面のヨコ方向のミガキは省略される傾向にあり、(130)よりは新しい時期となる。とりわけ (196) は、高台が断面三角形となっており、(187・188・195)よりも後出する。(197)は、器高が低く、高台もさらに短くなり、体部外面のミガキも省略されており、土壙4の資料の中で、一点のみ型式的にかけ離れて新しくなる。土壙4を掘り込んだ柱穴埋土内遺物の可能性がある。(187・188・195)の口径14.7～15.8cm (平均15.4cm)、器高 5.5～5.8cm (平均 5.6cm) を計る。(196)は口径14.8cm、器高 4.9cm、(197)は口径14.7cm、器高 4.4cmを計る。

灰釉系陶器 (190)：体部は内弯して開き、口縁部は外反する。高台は断面台形がつく。口径15.6cm、器高 5.2cmを計る。

(土壙5) 木棺墓の副葬品であり、一括性は極めて高い。土師器小皿・大皿、白磁椀が出土している。

土師器小皿 (219～221)：Fタイプのもの(219・220)とBタイプ(221)のものがある。それぞれの法量は、(219)

口径 8.5cm、器高 1.2cm、(220)口径 8.6cm、器高 1.2cm、(221)口径 8.7cm、器高 1.6cmを計る。

土師器大皿（222）：Aタイプのものであるが、土壙2よりもナデの段が甘く、新しい様相を示している。口径14.8cm、器高 2.6cmを計る。

白磁椀（223・224）：(223)は口縁部を玉縁とする。高台は幅広で、削り出している。見込み部に沈線がはいる。釉は灰白色を呈し、内面と外面中位までかかる。口径16.3cm、器高 6.5cmを計る。(224)は破片で、体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的にのびる。口縁端部は面をなす。

（土壙6） 土師器脚付小皿（225）と瓦器椀（226）を図化した。

（土壙7） 土師器小皿・羽釜、黒色土器椀、瓦器椀・鍋が出土した。

土師器小皿（198～205・213）：口縁部の形態より4タイプに分類できる。Aタイプ（199・200）口径9.6～10.4cm（平均10.0cm）、器高 1.4～1.6cm（平均 1.5cm）、Bタイプ（201～205）口径 8.6～ 9.6cm（平均 9.1cm）、器高 1.2～1.6cm（平均 1.5cm）、Eタイプ（213）口径10.6cm、器高 2.1cm、Gタイプ（198）口径 8.7cm、器高 1.9cmを計る。

土師器羽釜（214～217）：いずれも小片で、全容はうかがえない。内湾気味に内傾した口縁部下半に、断面三角形のつばがつく。口縁端部は面をなす。口縁部外面はナデ、内面はヨコ方向のハケ目を施す。

黒色土器椀（206～208）：土壙2と類似したプロポーション・調整であるが、口径がわずかに大きく、高台もより踏張るところから、年代的には若干遡ると考えられる。(208)は、厚手で、体部内外面ヨコ方向のミガキ、見込みはジグザグ線状のミガキを施す。高台は外下方へしっかりと踏張る。焼成は黒色土器のそれであるが、調整は瓦器の手法である。(206)の口径15.3cm、器高 5.2cm、(207)の口径16.3cm、器高 6.0cmを計る。

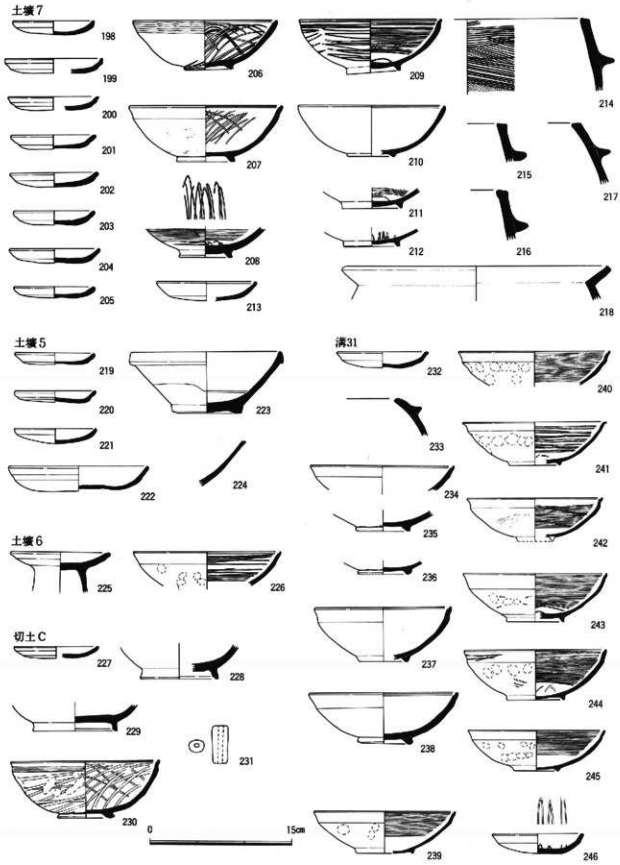
瓦器椀（209～212）：(209)と(212)は藤生遺跡出土の瓦器のなかでも、最も古い形態を示す資料である。(209)は外面のミガキが高台近くまで施され、高台は断面台形のものがつく。(212)は底部のみであるが、見込みのミガキはジグザグ線状で、高台も断面台形のものがつく。(209)は口径15.1cm、器高 5.7cmを計る。

瓦器鍋（218）：口縁部のみで全容は不明である。口縁部は「く」の字に開き、端部は外傾した面をなす。口径28.4cmを計る。

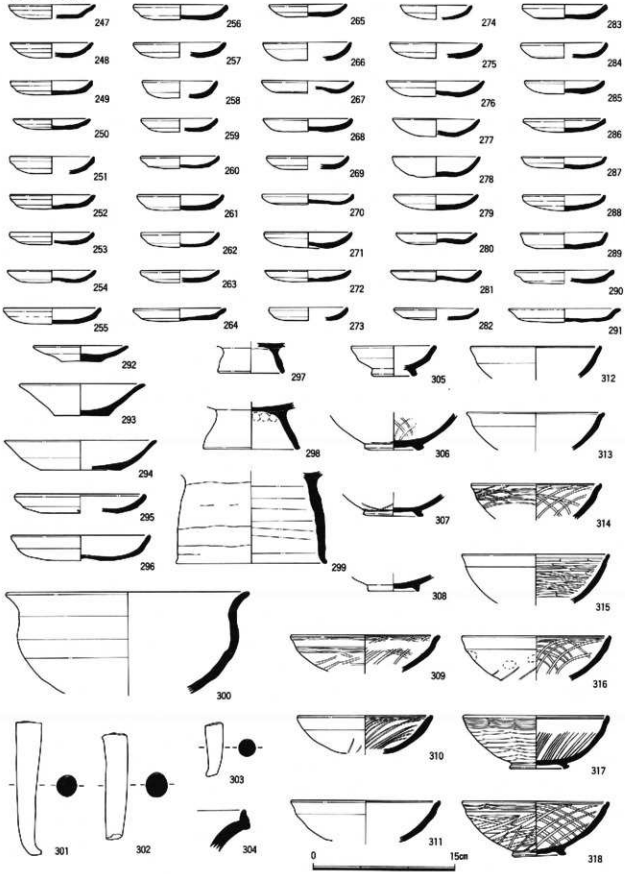
（溝31） 上述の遺物を出土した土壙や掘立柱建物を区画する溝で、年代幅のある遺物を出土した。土師器小皿・羽釜、黒色土器椀、瓦器小皿・椀などが出土している。瓦器椀のうち(241)・(245)は、切土B地区のなかでも、最も新しい様相を示している。

（柱穴） 掘立柱建物群を構成する柱穴群からは、土師器・黒色土器・瓦器を中心とした遺物が出土した。その多くは破片であるが、なかには(252)・(271)・(331)のように、完形品として出土するものもある。しかし、柱穴埋土が茶褐色土で、柱痕部と掘方の判別がしにくく、掘立柱建物の時期決定資料として直接使用するには危険が多い。ここでは、掘立柱建物群の年代幅を示す資料として一括して取扱う。出土遺物の器種は、土師器小皿・大皿・脚付小皿・脚付大皿・鍋・三足鍋、黒色土器小椀・椀、瓦器小椀・椀・小皿、白磁皿・椀、緑釉陶器椀、須恵器片口鉢である。

土師器小皿（247～292）：口縁部の形態からAタイプ（247～255）、Bタイプ（265～269・271・272・274～281）、Cタイプ（264・287・291）、Dタイプ（289）、Fタイプ（257～263・273・282）、Gタイプ（256・270・283～286・288）、そして、底部糸切のHタイプ（292）に分類できる。法量はAタイプの口径8.2～10.4cm（平均 9.1cm）、器高 1.2～1.7cm（平均 1.5cm）、Bタイプの口径 7.6～10.4cm（平均 9.2cm）、器高 1.1～ 2.2cm（平均 1.6cm）、Cタイプの口径 9.0～11.9cm（平均10.3cm）、器高 1.3～1.5cm（平均 1.4cm）、Dタイプの



第51図　切土B　土壙5・6・7・溝31・切土C　出土遺物



第52図　切土B　柱穴　出土遺物

口径 9.3cm、器高 1.7cm、Fタイプの口径 8.0～9.8cm（平均 8.6cm）、器高 1.2～1.9cm（平均 1.5cm）、Gタイプの口径 8.4～10.0cm（平均 9.1cm）、器高 1.1～1.8cm（平均 1.5cm）、Hタイプの口径10.1cm、器高 1.6cmを計る。

土師器大皿（293～296）：(293)と(294)は底部糸切のHタイプであるが、(293)は、径 5.7cmの底部から直線的に体部が開き、口縁端部は外反する。(294)は、底部径が 8.4cmと大きく、体部は内弯して開き、口縁端部はわずかに肥厚する。(295)はAタイプ、(296)はFタイプに分類できる。法量は、(293)の口径13.3cm、器高 3.4cm、(294)の口径16.1cm、器高 3.1cm、（295）の口径14.0cm、器高 2.1cm、（296）の口径14.8cm、器高 2.7cmを計る。

土師器脚付小皿（297）：脚部のみで、底径 7.0cmを計る。

土師器脚付大皿（298・299）：(298）は底径10.2cm、(299）は底径16.0cmの大型品である。

土師器鍋（300）：今回の調査では２例しかない器種である。半球形の胴部に、外反する口縁部がつく。全面ナデによる。口径25.8cm、残存高11.0cmを計る。

黒色土器小椀（305）：風化のためミガキ等の調整は不明。口径 9.0cm、器高 3.2cmを計る。

黒色土器椀（306～318）：体部内面をヨコ方向に密にミガキを施すもの（315）から、器高が低く、体部外面のミガキもほとんど省略してしまうもの（310）まで、時期幅がある。(317・318）は、体部外面全面にミガキを施すほか高台も大きく踏張ることから、（315）につづくものと思われる。

瓦器小皿（328～331）：口縁部が直線的に開くもの（331）から、大きく外反するもの（328～330）へとつづく。（331）は口縁部内面に圏線状ミガキを施す。いずれも見込みにはジグザグ線状ミガキを施す。

瓦器小椀（325）：器高が低いので、高台付皿とした方がいいかもしれないが、小椀として分類した。口縁部内面は圏線状ミガキ、外面は分割法によるヨコ方向のミガキを施す。高台は欠損する。口縁部内側には一条の沈線を廻す。口径10.4cmを計る。

瓦器椀（319～324・326・327）：体部外面を分割法によるヨコ方向のミガキを施すもの(320・321・323・324)と、ミガキを省略するもの（319・322）がある。底部のみの破片である（326・327）も高台は断面三角形で、本遺跡出土の瓦器のなかでは新しい様相を示す。

白磁皿（333）：口縁部は内弯し、見込みに一条の沈線を廻す。口径10.6cm。

白磁椀（334～337）：口縁部は外反し、端部は丸く終るもの（334）と、口縁部が玉縁状になるもの(335・336)がある。口径は、（334）17.9cm、（335）16.4cm、（336）16.6cmを計る。

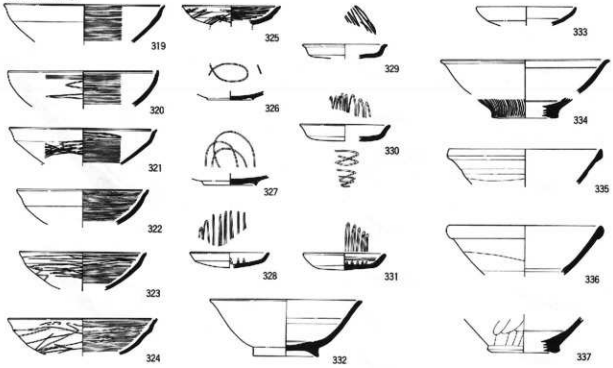
緑釉陶器椀（332）：軟陶で、釉は濃緑色を呈する。体部はやや内弯気味に外上方に開き、口縁部は外反する。高台は断面三角形である。見込みに一条の沈線を廻す。口径16.1cm、器高 6.0cmを計る。

（1号掩水） 前述した土壙２の一括遺物以外にも、柱穴や包含層から、土師器小皿（338～342)、瓦器小皿(343)、瓦器椀（344)、緑釉陶器椀（345）が出土している。いずれも、切土B出土遺物と同時期である。

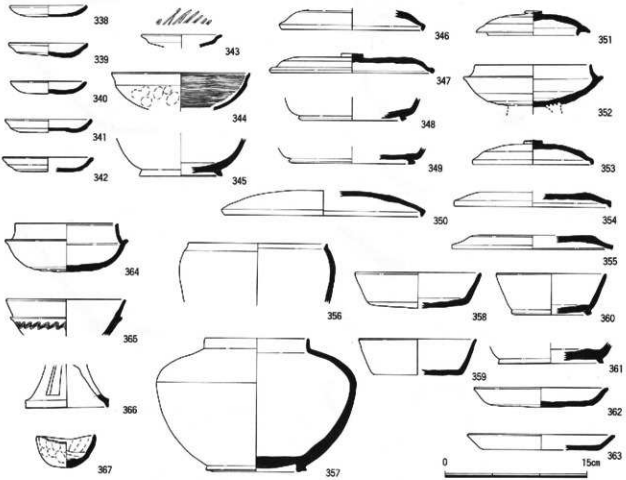
（切土E） 掘立柱建物21～23及び溝38から、土師器小皿（400～404)、土師器杯（405)、黒色土器小椀（408)、黒色土器椀（406・407）が出土した。いずれも、切土B出土遺物と同時期である。

（切土F） 掘立柱建物24・25・28、土壙38、溝48から、土師器小皿（410～417)、土師器大皿（421)、黒色土器椀(418～420)、瓦器椀（424～427）が出土している。このうち、土壙墓と考えられる土壙38出土の(411・414～417)は一括性のある資料である。また、溝38出土の瓦器椀（424・427）は、本遺跡出土の瓦器のなかでは新しい様相を示しており、条里溝と考えられる溝38の消長を知る好資料である。

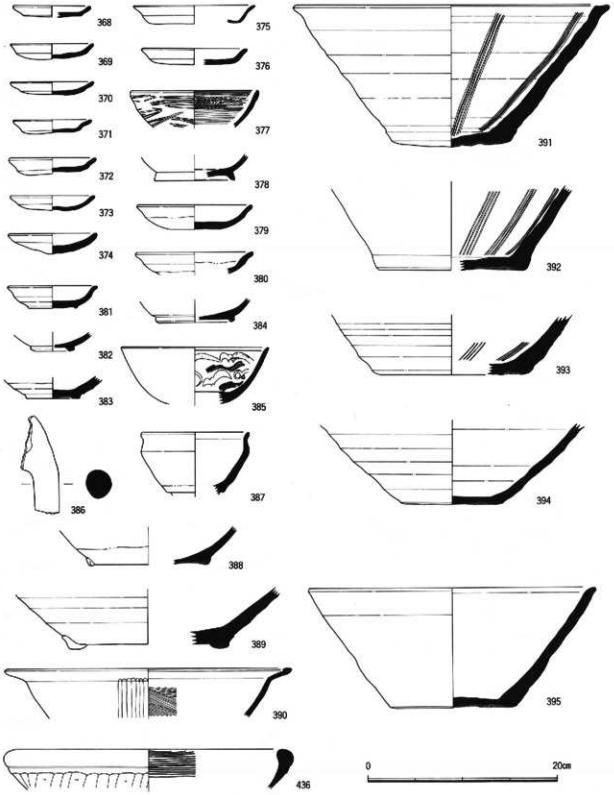
切土B（柱穴）



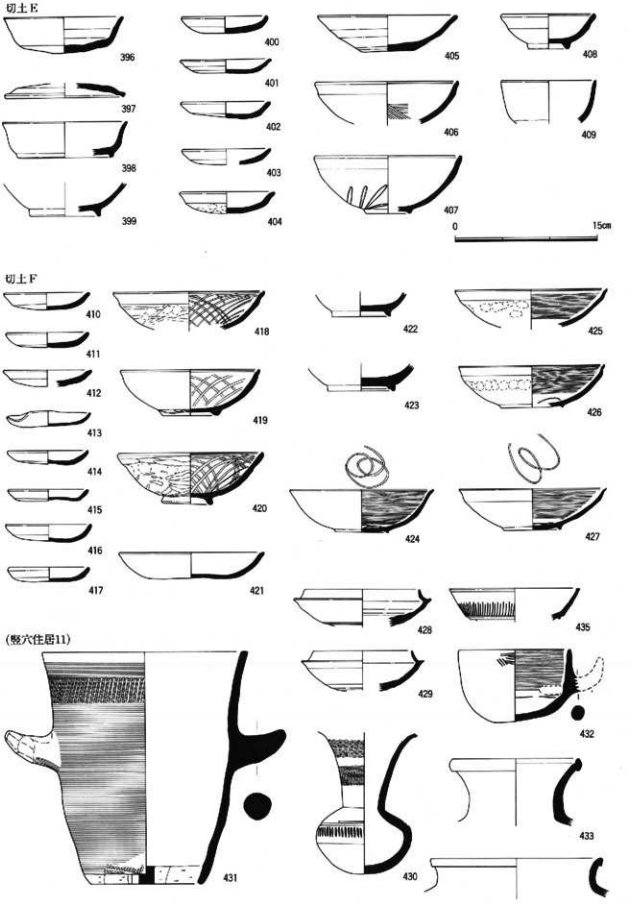
1号排水



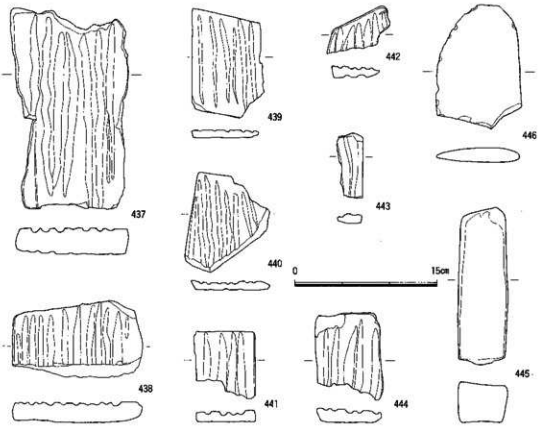
第53図　切土B・1号排水　出土遺物



第54図　切土D　出土遺物



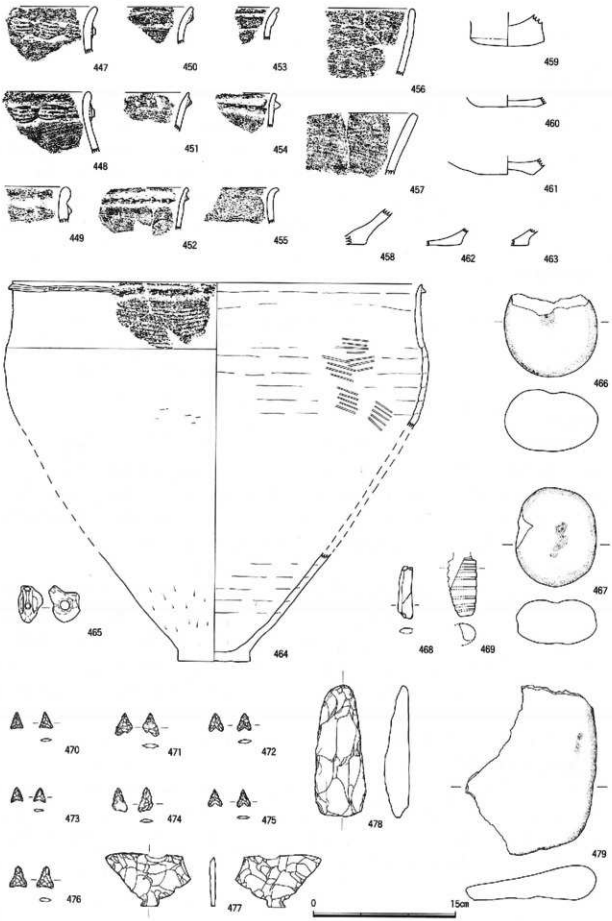
第55図　切土E・F　出土遺物



第56図　切土D　出土遺物（石製品）

中世後期

切土D地区の土壙、溝、落ち込み内より出土したものがほとんどで、(395) のみ、3号排水より出土している。切土D地区の遺跡群は整地層上から切り込んでおり、整地層下には、12～13世紀の遺構・遺物が存在する。中世後期とした遺物には、土師器小皿(368・371・375)、瀬戸系陶器（381・379・380)、青磁椀（385)、天目茶椀(387)、瓦質鍋（390)、焙烙（436)、信楽擂鉢（391～393)、信楽鉢（394・395）などがある。おおむね、14世紀後半から15世紀前半の所産と思われる。また、切土D地区を含む岡本集落周辺の水田には、水晶田の呼称がある程、多数の水晶片が散布する。このため、従来より近辺の大塚城遺跡同様の水晶工房が存在すると予想されていた。今回の調査では、製品は発見できなかったが、土壙内より玉状製品を研磨した玉砥石が出土した。砥石は、砂岩系の荒砥石（437・438）と、粘板岩系の仕上砥石（439～444）がある。



第57図　切土F下層　出土遺物

5．ま　と　め（第58～60図）

麻生遺跡の変遷

今回の調査では、結果的に広範囲にわたってトレンチを設定したので、日野川中流域の開発を考えるうえで貴重な資料を得た。とくに、日野川流域のみならず、県下においても検出例のほとんどなかった縄文時代晩期の集落の発見は注目される。さらに、弥生時代後期、古墳時代中期・後期、奈良時代～平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代前期、室町時代にかけての各時代の遺物・遺構を検出した。遺構密度は、各時代における開発状況、人口の寡多はもちろんのこと、調査区の設定状況によって大きく異なるため、一概には判断できないが、今回の調査状況からすると、古墳時代中期（５世紀）と平安時代後期（12世紀）に大きな画期が認められる。この章では、上記の各時代の開発状況をまとめてみたい。

縄文時代晩期

日野川中流域において確認できる最初の集落である。集落規模は50m×30m以上の広がりをもつ。集落内には複数の平地式もしくは竪穴住居があったと考えられる。集落範囲には、サヌカイトチップが多数出土しており、石鏃の加工・製作が行なわれていたことは確実である。また、ベンガラを撒いた土壙や甕棺墓なども検出した。この集落の生業の一部が狩猟であることは、石鏃の存在からうかがえるが、集落前面に水田に適した低湿地があることは注目される。いずれにしても、居住区として平野部が選定されたことは注目に値する。

弥生時代

方形周溝墓３基を検出した。いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。このうち、方形周溝墓３は、16m×14mを計る大型方形周溝墓である。墓の多寡、規模の大小をもって、全く未調査の集落規模を推定することは危険であるが、麻生遺跡内に一定規模の集落が存在したことは確実である。近辺には、中期の方形周溝墓群が発見された市子遺跡があり、市子の弥生時代中期の集落を核として、いわば母村と分村の関係で、麻生周辺の開発が行なわれたと考えられる。しかし、なお可耕地は点的なもので、平野部の大半は林野であったと考えられる。

古墳時代

麻生遺跡が集落として発展するのは古墳時代中期からである。この時期には、２号排水路地区の竪穴住居群にみられるように、同一地点で３回もの建替えがみられる。集落規模は今回の調査では不明であるが、住居の集中化と、継続性が高く、従来の開発とは比較にならないくらいの大規模で計画的な開発が、土木技術や農業技術の革新に支えられて行なわれたと予想される。本遺跡に近接した堂田遺跡でも、昭和61年度の調査によって、古墳時代中期まで存在した日野川や古川の支流と考えられる流路が、古墳時代中期を境に埋没しており、同時期の開発が、治水の成功によるものであることを物語っている。後期にいたっては、１号排水路から切土Ｆ地区にかけて遺物・遺構が分布しており、中期以降、人口の増加にともなう集落規模の増大がうかがえる。

奈良時代～平安時代前期

奈良時代前期の遺構として、切土Ｅ地区の溝34・35・36がある。この３条の溝は道路の側溝と考えられる。道路の軸線はＮ－50°－Ｗで、蒲生郡条里には規制されていない。しかし、平安時代前期の切土Ａ地区掘立柱建物7・8・9はＮ－16°～21°－Ｗを示しており、蒲生郡条里に近くなっている。このことからも、蒲生郡条里が施行された時期が、平安時代前期以降であると考えられる。

中世前期（麻生荘成立期）

この時期の主要な遺構は、1号排水路地区の掘立柱建物1・2・3・4・5・6、土壙1・2、切土B・C地区の掘立柱建物10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20、土壙3・4・5・6・7・8、溝31・32、井戸1、切土E地区の掘立柱建物21・22・23、切土F地区の掘立柱建物24・25・28、土壙38、溝48がある。これらの遺構は、すべて12世紀代の約100年間の所産とみなすことができる。とりわけ、1号排水路地区と切土B・C地区の遺構密度は高く、1号排水路地区では掘立柱建物1・2・3・4・5の5時期、切土B・C地区では掘立柱建物10・11・12・14・15・16・17の建物が6時期にわたって建替えられている。これらの建物群は、南北100m、東西30mの範囲に分布しており、現蒲生都条里の8条12里15坪の西半に相当する。一方、切土E地区は、蒲生都条里の8条11里8坪の北西角に位置して建物2棟がある。うち1棟は建替えしている。切土F地区でも、蒲生都条里の8条11里26坪の北東角に位置して建物2棟がある。うち1棟は建替えしている。このように、切土B・C・1号排水路地区の建物群は、屋敷地面積の広さ、建物の継続性、建物の密集度が、切土E・F地区の建物群と比較して群を抜いている。建物規模についても、切土B・C・1号排水路地区の建物1が9間×3間以上、建物10が5間×4間、建物13が5間×3間、建物11と12が4間×4間なのに較べて、切土E地区では建物21と22が4間×4間、建物23が4間×3間、切土F地区では建物24が3間以上×4間、建物25が3間×2間、建物28が3間×4間となっており、切土B・C・1号排水路地区の建物群は大型建物が継続して建てられている。したがって、切土E・F地区の建物を一般農民の屋敷とするならば、切土B・C・1号排水路地区の建物群は、在地での有力農民の屋敷が想定できよう。この点で注目されるのは、島根県松江市の蒲生氏文書である。これには、麻生荘公文職の譲状が5通残されている。

①平宗保――→嫡男平宗継　　保安二（1122）年5月19日
②平宗継――→嫡子平宗家　　伝平二（1153）年3月2日
③平宗家――→嫡男平家貞　　文治二（1186）年9月23日
④平家貞――→僧　覚尊　　建暦二（1212）年4月9日
⑤平光安――→嫡子僧覚祐　　文応元（1260）年2月20日

このうち、①の史料では平宗保にとって麻生荘が「先祖開発」の地であると述べている。「先祖開発」という文面は、公文職の正統性を述べるための装飾語ともとれるため、平宗保がいかなる理由で麻生荘の公文職となったかは不明であるが、12世紀第1四半世紀において、在地の有力者であったことは間違いない。つづく②の史料では、譲状の中に「屋一宇」とあり、公文職とともに屋敷1棟を宗継から宗家が相続している。③・④とも公文職を平宗保以下の長子家督相続の形をとっている。しかし、④の僧覚尊から⑤の平光安との関係は不明である。これらの史料が、ただちに今回の考古資料と対比できるものではないが、切土B・C・1号排水路地区の卓越した掘立柱建物群との関連は注意しておく必要があろう。とりわけ、建物の出現期が12世紀の第1四半世紀であることと、上記史料の初出が同じ12世紀第1四半世紀であることは、史料と考古資料の示す内容が極めて限られたものであることを差し引いても、麻生荘の開発画期を考えるうえで注目される。

一方、切土E地区やF地区にみられるように、条里地割の一坪内に数棟の建物が配置されている状況は、12世紀段階では集村化しておらず、散村的景観が一般的であったことを示している。さらに、これらの建物がいずれも1度の建替えのみで廃絶しており、長期にわたって居住していない。これには様々な理由が考えられる。まず第1に、農地そのものが不安定で、いわゆる「かたあらし」と呼ばれる断続的な耕作しかできない土地であった。第2に、土地所有権もしくは耕作権自体が不安定なもので、各坪内に配置された屋敷の住人にとって、一時的な

生活の場にすぎず、重税や自然災害などの外的要因によって、第1の要因とともにその場を去らねばならない状況に追い込まれた。第3に、麻生荘内の住民の村落内結合が高まり、集村化していった。第4に、荘園領主、もしくは在地領主による大規模な再開発が行なわれた結果、屋敷地・島地・水田の改編があった。いずれにしても、12世紀の一時期に、条里地割の一坪内に数棟が分布して水田耕作を行なっている状況は、滋賀県内の例を分析した田中勝弘氏によっても「短期集落」として、湖北地方の慶歳寺遺跡や唐川遺跡などが類例としてあげられている。いわゆる中世的荘園の成立期にこうした現象が見られることは、荘園開発のあり方が在地領主による主導のみでは成立せず、耕作権や土地所有権の獲得を条件に、広義の一般農民層が結集して灌漑用水の掘削や溜池の構築を行なってはじめて可能であり、その結果として一坪毎に数棟が分布する状況が生まれたと考えられる。しかし、先述した理由などにより、13世紀以降、徐々に散村的景観から集村化へと移行するのである。

つぎに、各調査区の遺構について、気付いた点を述べる。まず、条里地割と建物配置の関係であるが、切土B・C・1号排水路地区の掘立柱建物群の占地する範囲は、蒲生郡条里の8条12里15坪の西1/3のみで、同坪の東2/3の調査(切上A地区)や、隣接する9坪の試掘では建物を構成するピットは確認していない。また、16坪は河岸段丘下で、15坪とは比高差が1m以上ある。したがって、屋敷地として8条12里15坪の西1/3が占地されていたことは確実であろう。この場所は、麻生荘のほぼ中心に位置するうえ、日野川河岸段丘上の緩辺の比較的安定した土地である。また、坪境であり、かつ上麻生・下麻生の集落を通り抜ける主要道路を延長すると8条12里15坪の西の坪境となる。さらに、その延長上には小字「沖ノ海道」があり、現市子神集落へと通じる道路があったと想定される。このことは、この想定道路に面して、旭野神社、山部神社、赤人寺が位置し、小字名でも「桂街道」「前海道」「沖ノ海道」「蔵ノ町」があることからも肯首されよう。この想定道路の上限は不明であるが、麻生荘内を通過する主要道路に面して、切土B・C、1号排水路地区の掘立柱建物群が占地していることは、建物群に居住していた人の階層を考えるうえで注意する必要がある。しかし、条里地割の存在を前提にしての推定に問題がないわけではない。蒲生郡条里がN−33°−Wであるのに対して、切土B・C・1号排水路地区の掘立柱建物群は、N−12°−WからN−28°−Wまでの間に建物の主軸方位を示している。とりわけ、大型・中型建物である建物1・10・11・12・14はN−21°−WからN−24°−W間の方位を示しており、建物13が条里地割に近いN−27°−Wを示している。このように、角度にして10°前後ではあるが、条里方位と建物方位にずれが認められる。このことは、屋敷地の設定が条里地割によって規制されつつも、屋敷地内での建物方位や位置は、門畑や塞、垣などによって建替え毎に移動すると考えざるを得ない。一方、切土E地区では、4間×4間の建物21と建物22が、南北に軒を並べて建てられている。建物方位はN−31°−Wを示しており、蒲生郡条里とほぼ一致する。切土F地区では、建物25がN−30°−Wで、蒲生郡条里とほぼ一致するが、建物24は切土B・C・1号排水路地区の大型・中型建物とほぼ同一のN−23°−W、建物28がN−16°−Wとなっている。

つづいて、注目される点は、主要な建物に近接して墓と考えられる土壙が存在することである。その典型的なものは、切土Bの土壙5である。土壙5は木棺墓で、副葬品として白磁椀の完品1点、土師器小皿3点、大皿1点、白磁片1点が出土した。建物10か建物12に付随するものであろう。土壙8も小型ながら土師器小皿3点が副葬されており土壙墓の可能性が高い。1号排水路地区でも土壙2が建物群に付随している。土壙2の埋土内からは黒色土器の完品6点を含む多量の遺物が出土した。切土E地区では認められなかったが、切土F地区の建物24・25に近接して、土壙38がある。土壙内からは土師器小皿3点が出土した。この他、土壙3・4・6なども、土壙墓の可能性がある。これらがすべて墓であるとするならば、屋敷地内に建替え回数に近い数の墓を設けることが一般的であったといえる。しかし、屋敷地内に居住していたであろう人数に較べて、墓の数が少ない点からして、

第58図　麻生遺跡周辺条里図

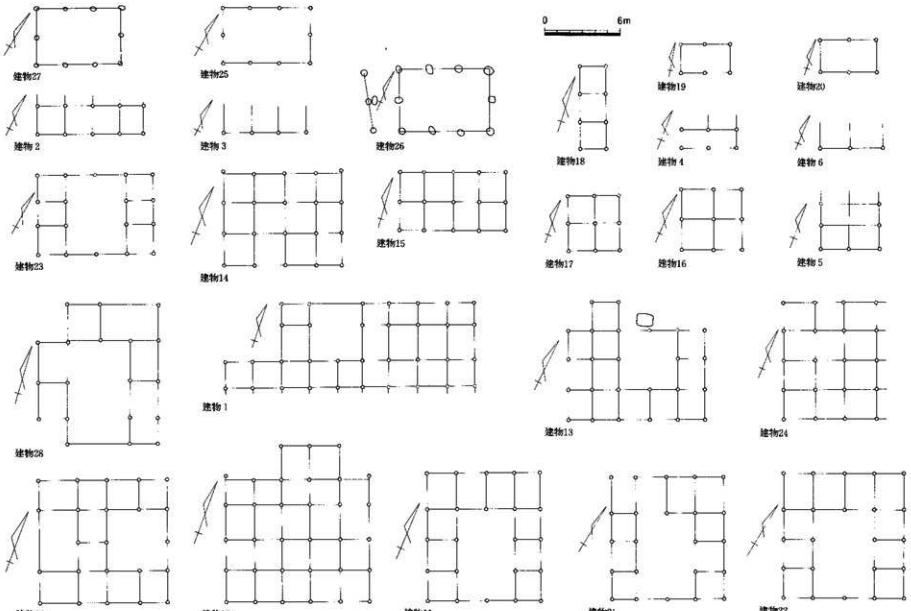
○番号は山部神社文書

これら屋敷墓に埋葬された人物は、その屋敷にとって特別な地位の人物であろうことは容易に想像できる。

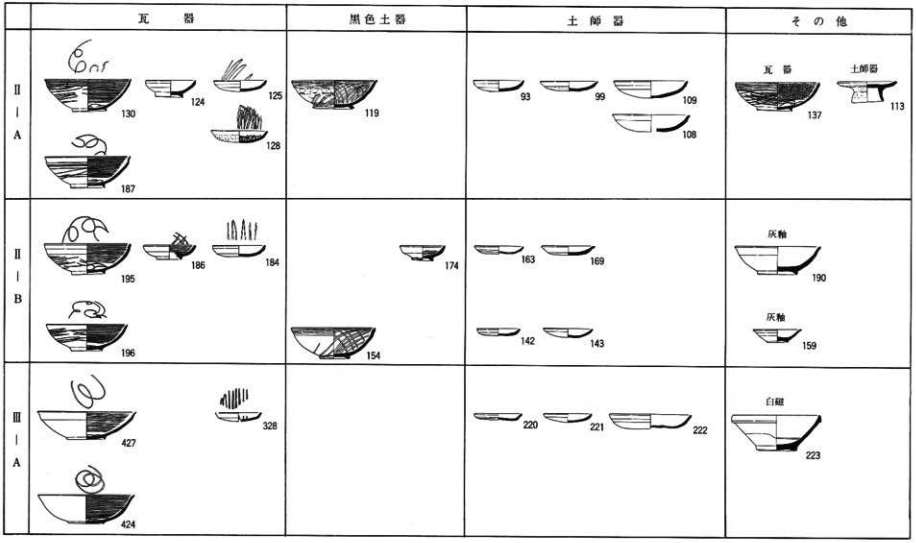
建物規模については、20坪以上（柱間寸法に関係なく、1間×1間＝1坪とした）の大型建物、12坪から16坪の中型建物、8坪以下の小型建物に分類できる。大型建物は、建物1（23坪以上）、建物10（22坪）がある。中型建物は、建物11（16坪）、建物12（16坪）、建物13（16坪）、建物14（12坪）、建物21（16坪）、建物22（16坪）、建物23（12坪）、建物24（12坪以上）、建物28（14坪）がある。小型建物は、建物3（3坪以上）、建物4（2坪以上）、建物5（4坪以上）、建物6（2坪以上）、建物15（8坪）、建物16（4坪）、建物17（4坪）、建物18（3坪）、建物19（2坪）、建物20（2坪）がある。このうち、小型建物は、大型建物や中型建物の周囲に隣接して建てられており、いずれもが居住用建物とするならば、主屋となる大型建物や中型建物の住人に従属する階層の住居となる可能性が高い。したがって、建物規模からのみ判断するならば、今回報告した22棟中、中型建物が9棟を占めており、12世紀代の麻生荘の荘民を代表する階層は中型建物に居住していたと考えられる。

先に述べたように、切土B・C・1号排水路地区の掘立柱建物群は、同一箇所で6時期の建替えがあるため、最初の建物と、最後の建物では100年近くの時間差があると予想される。しかし、柱穴出土の遺物は量的に限られているうえに、柱痕跡の遺物と掘方の遺物を分離して取り上げることができなかったため、必ずしも建物の時代を示しているとは考えられない。しかも、柱穴の切合いも明確でないため、建物の変遷を明確にすることは困難である。こうした中で、あえて各遺構の前後関係を示すならば、切土B・C・1号排水路地区のなかで、最も新しい様相の遺物を出土した溝31が基点となる。溝31は、建物11を区画する溝と考えられる。したがって、遺構群のなかで、溝31と建物11が新しい時期（12世紀末）の所産とする。このことは、溝31以南の区画の素掘り溝が東西方向で、その他の区画が南北方向であることから、溝31以南の建物が密集した区画が耕作地化した時までは、この区画が一つの単位であり、かつ、素掘り溝の方位が、建物11と同じN－24°－Wであることからもうかがえよう。つまり、建物11は耕地化する直前まで建てられていたと考えられるのである。建物11と重複する建物10・12・14・15・17については建物11よりも先行する。このうち、建物10・14・17は土壙3を切って建てられているため、土壙3の出土遺物が示す12世紀第1四半世紀以後であろう。また、建物12に関しても、建物10・14と同じ方位を示すため、建物10・12・14・17は12世紀の中葉に連続して建て替えられており、なかでも建物12が、土壙3を避けて建てられていることから、一番古い建物であると考えられる。建物群の中で最も古い遺物を出土した建物20はN－18°－Wを示しており、新しい時期になる程、N－33°－Wの蒲生郡条里に近づく傾向にある。

出土遺物の年代観については、すでに12世紀代の約100年を比定していると述べた。遺構の年代を決定するうえで、最も普遍的な遺物である土器の編年観と実年代比定は欠かせない。この時代の土器編年については、日本中世土器研究会のメンバーを中心に、地域毎の多様な土器様相を解明する作業が精力的に行なわれており、本遺跡の年代観も、そうした成果に負うところが大きい。これまでの調査や研究の成果では、日野川流域の遺跡で瓦器を出土することが注目されている。12世紀の近江では、湖南地方や湖東地方を中心に、いわゆる近江型黒色土器が盛行しており、畿内の他地域のように瓦器を多量に生産・消費していない。そうしたなかで、蒲生町や日野町を中心とした日野川流域においてのみ、11世紀末から13世紀にかけて、近江型黒色土器と同比率もしくはそれを上回る程に瓦器を出土する遺跡が集中する傾向にある。とくに、蒲生町においては、11世紀末の大和型に類似した瓦器を生産していたとされる蒲生堂廻寺跡をはじめ、麻生遺跡、堂田遺跡、市子遺跡、宮川アリヲヲジ遺跡など、当該期の主要な集落遺跡では、正確な数量を報告した例こそないが、瓦器の出土比率が高いことは間違いない。今回報告する麻生遺跡の土器についても、土師器：黒色土器：瓦器の比率が、5：3：2に近いことは先に述べた。在地性の強い近江型黒色土器や土師器に較べ、瓦器は、畿内の実年代資料との比較が容易であるので、本遺



第59図　麻生遺跡　掘立柱建物集成図(中世前期)



第60図　麻生遺跡　出土土器編年図(中世前期)　S＝⅓

跡の編年指標は瓦器を用いた。日野川流域で出土する瓦器はすべて大和型と呼ばれるものである。これらの瓦器については、在地生産によるものの割合と、大和型との差異の検証が行なわれて、はじめて畿内の実年代資料との対比が可能である。今回は、そうした検証なしに大和型瓦器の編年を直接適用した。それによると、本遺跡の瓦器は、川越編年のⅡ－Aから Ⅱ－Bをへて Ⅲ－Aに相当すると考えられる。Ⅱ－Aから Ⅲ－Aにかけての変化は、高台が断面台形の踏張ったものから、断面三角形の短いものへと移行する。また、体部外面のヨコ方向のミガキも、体部全面から徐々に省略化して、Ⅲ－Aになるとミガキを全く施さないものが多くなる。見込み部の螺旋状ミガキも、新しい段階になるにつれ簡略化して同心円状に近くなる。器高も徐々に低くなる、などがうかがえる。この3段階の瓦器に、良好な一括遺物である 1号排水路地区土壙 2と切土B地区土壙 5の資料を対比して、前者を Ⅱ－A、後者を Ⅲ－Aに位置付け、その間を土壙 3・4の資料で埋めたのが、第60図である。川越氏によると、実年代の根拠として、Ⅱ－Bは当麻寺曼荼羅堂基壇出土遺物（永暦 2（1161）年）、Ⅲ－Aは興福寺菩提院大御堂の第Ⅲ期基壇建物出土遺物（治承 4（1180）年以降）があげられており、Ⅱ－Bは12世紀中葉、Ⅲ－Aは12世紀末にそれぞれ比定されている。したがって、Ⅱ－Bに先行するⅡ－Aは12世紀初頭となる。この年代観は、現在までの発掘資料とは矛盾せず、妥当なものとされている。

麻生遺跡出土の瓦器が、在地産であるか否かは今後も検討を要するが、遺物整理の段階で気付いたこととして、瓦器の中にも硬質焼成と軟質焼成のものがみられることである。前者は、後者に比して器壁が薄く、いわゆるいぶし銀の光沢をもつ。後者は器壁が厚目で、光沢がなく、灰白色のものが多い。この差異が、大和産と近江産の違いであるかどうかは、今後の資料の増加によって結論をだしたい。また、土師器の技法において、大皿の口縁部の2段ナデが、土壙 5の資料においてもみられるように、12世紀後半まで残存することも本遺跡出土土器の特徴となる。

中世後期

切土D地区において、13世紀以降とくに14世紀後半から15世紀にかけての土壙・ピット群を検出した。この遺構群は現同本集落と重複して存在すると考えられ、現集落の形成期を考えるうえで見逃せない資料である。さらに、この遺構群からは多くの砥石とともに水晶片を出土しており、水晶製品（珠子玉か？）の工房であった可能性が高い。ともかく、麻生荘では、農業以外にも手工業生産の一つとして水晶加工が行なわれていたことは注目される。しかし、その実態は、切土D地区においてわずかに窺えたにすぎず、遺構の大半は、現集落と全く重複していると考えられるため不明である。したがって、この時期の麻生荘を知るためには、「2、位置と環境」で触れた山部神社文書が重要である。今回は充分な検討を行なう余裕がないため、土地関係の文書のみを別表とした。参考にされたい。

山部神社文書　土地関係文書一覧

番号	表題	年代	種類	場所	差出人	受取人	面積	価格	その他
17	えもん次郎寄進状	(1358頃)	寄進状		えもん次郎	小松宮(山部神社)			11月の神祭料として米3斗
19	麻生庄代官河井五郎左衛門寄進状案文	康正元年11月3日(1455)	寄進状		河井五郎左衛門	赤人寺			油米2石5斗
21	合林田地寄進状	永暦元年8月(1160)	寄進状		合林	赤人寺	1段		
22	字新追御子等連署田地売券	文永7年8月14日(1270)	売券	蒲生上郡清水谷字馬坂付尻切半	字新追御子・嫡女	犬女		米3升4合	日吉御領御供田本所
23	円阿弥畠地寄進状	嘉暦4年9月13日(1329)	寄進状	加東郷麻生庄字下七板の御当より西、九内殿屋敷より前	円阿弥	赤人寺	32歩		加地子100文
24	法阿弥陀仏畠田地寄進状	元徳2年正月(1330)	寄進状	麻生庄内赤人堂前菜畠 〃　9条9里1坪	法阿弥陀仏 〃	赤人寺 〃	36歩 1段		加地子2斗(御堂観音) 加地子2斗(時講)
25	沙弥道念田地寄進状	元弘2年5月7日(1332)	寄進状	麻生庄内8条12里17坪 〃　19坪	沙弥道念 (平部入道)	赤人寺	1段		加地子1斗 〃　5升　佃小五郎
26	沙弥仏道田地寄進状	建武元年12月(1334)	寄進状	蒲生郡上西山田字小黒目口	沙弥仏道	赤人堂	1段		加地子1石
27	為女田地譲り状	暦応2年12月3日(1339)	譲り状	字くきぬき	為　女	亀松女	1段60歩		
28	為女田地譲り状	暦応2年12月3日(1339)	譲り状	字森下	為　女	辰熊女	1段小(20歩)		
29	沙弥蓮法屋敷寄進状	観応元年8月16日(1350)	寄進状	蒲生上郡麻生庄内8条11里27坪(字東垣内南角)	沙弥蓮法	赤人寺	36歩		加地子1斗　大般若僧膳料米
30	袈阿弥陀仏等連署畠地寄進状	観応元年11月3日(1350)	寄進状	8条12里10坪 からや恒内	袈阿弥陀仏 妙阿弥陀仏	赤人堂 〃	6歩 36歩		加地子1斗 加地子6升(馬太郎作敷)
31	ひめくま女屋敷寄進状	文和元年10月18日(1352)	寄進状	麻生庄8条11里34坪(字下ヒ板形部太郎之屋敷東縄本)	ひめくま女	赤人堂	36歩		加地子5升
32	仏性等連署田地売券	延文2年12月15日(1357)	売券	麻生庄内8条12里31坪(字上かいしり上井について)	仏性・嫡子左近次郎	赤人堂	反10歩	米1石5斗	
33	安主入道等連署畠地売券	延文3年12月25日(1358)	売券	麻生庄内8条12里3坪(赤人後畠)	安主入道・嫡子左近太郎	えもん次郎	60歩	米1石7斗	
34	智善御燈田寄進状	貞治2年4月(1363)	寄進状	蒲生上郡河東郷麻生庄内8条13里34坪	比丘尼智善	観音(赤人寺) 小松宮(山部神社)	1段		赤人寺の御燈用

番号	表題	年代	種類	場所	差出人	受取人	面積	価格	その他
35	戒法等連署田地寄進状	永和元年4月4日 (1375)	寄進状	字森前 字くぬき 字へいしり	戒法・禅慶	赤人堂	1段小(120歩) 1段100歩 □大(		
36	大和田右馬太郎等連署畠地売券	康暦2年11月24日 (1380)	売券	麻生庄内字やつちの□	大和田右馬太郎・左近太郎	善行坊	30歩	米4斗5升 (麻生升)	
37	景阿弥屋敷寄進状	至徳3年3月15日 (1386)	寄進状		景阿弥	赤人寺	一所		
38	しやういん女田地売券	応永元年12月5日 (1394)	売券	麻生庄内かの方字ひかいかつらのこまつのしんてん	しやういん女	はつわか女	大(240歩か?)	米2石5斗	
39	初若女田地売券	応永8年3月4日 (1401)	売券	蒲生上郡河東郷麻生庄内字ムカイカワラ七板小松御宮神田	初若女	小松御宮(山部神社)	300歩	米2石	
40	文郎五郎畠売券	応永15年12月20日 (1408)	売券		文郎五郎		18歩カ	米5斗	
41	西願等連署屋敷寄進状	応永26年3月22日 (1419)	寄進状	字下七板馬射屋敷内	西願・比丘尼妙円	赤人堂	36歩		
42	正昌畠地寄進状	応永31年10月7日 (1424)	寄進状	たうこまの太郎の河のうえ	比丘尼正昌	赤人堂	18歩		赤人堂の油米
43	沙弥祥真畠地寄進状	応永32年6月26日 (1425)	寄進状	字いはたらの後	沙弥祥真禅尼	時譽	30歩		
44	道賢屋敷売券	応永35年2月3日 (1428)	売券	蒲生上郡河東郷麻生庄内字なか田	道賢	比丘尼正玉御坊	36歩	米1石	赤人堂へ3升寄進
45	しおやむまの太郎寄進状	応永35年3月27日 (1428)	寄進状	字西中河原いの上	しおやむまの太郎	赤人堂	1段		毎年6斗
46	北坊検家明正畠地売券	永享5年12月15日 (1433)	売券	麻生庄内下七板赤堂の後	北坊検家明正	比丘尼正玉	18歩	米5斗	「まひこの太郎のうりけん」
47	きこの三郎田地売券	永享7年2月4日 (1435)	売券	蒲生上郡河東郷麻生庄内字くろのまち	きこの三郎	正玉比丘尼	半(180歩)	米8斗	
48	右馬三郎右馬畠地売券	文安2年12月15日 (1445)	売券	麻生堂前	右馬三郎右馬	山口	36歩	米8斗5升	「得分1斗7升ハ、山口チテニカイ鯨ヘハ、又三升ハトコロアフラマイル」
49	藤内畠地売券	文安2年12月23日 (1445)	売券	麻生内下七板せこのやしき畠	藤内	せこの山口	50歩	米1石5斗	「得分3斗御山口て」 「油米1升7合」

番号	表題	年代	種類	場所	差出人	受取人	面積	価格	その他
50	若女畠地売券	文安4年12月11日 (1447)	売券	薩生上郡麻生庄内下七、板 東之法道土ヤシキ	若女	山口中	30歩 (但ヤフラ加定)	米8斗	「到四方 東理秀畠限、南モ同畠限、西講限、北播限」
51	右馬次郎等連署田地売券	文安5年2月7日 (1448)	売券	麻生庄の上内しれた	右馬次郎・右馬太郎馬		1段	米3石	得分6斗
52	右馬五郎後家田地売券	文安5年12月18日 (1448)	売券	あさな（麻生）宮きのき	右馬五郎御け		半25歩	米1石	得分2斗 赤人堂
53	賢秀畠地売券	宝徳元年10月11日 (1449)	売券	薩生上郡麻生庄内字上七板宮前字下七板マトハ	賢秀	下七板所	(54歩) (36歩)	米1石9斗	元は中山泉蔵坊相伝私領
54	性中畠地売券	宝徳2年12月11日 (1450)	売券		性中	赤人堂	36歩		得分1斗6升 しちの米8斗
55	衛門田地売券	寛正6年4月27日 (1465)	売券	薩生郡麻生之下七板 字名ナワシロ	古川衛門		36歩	米1石	得分2斗
56	古門衛門畠地売券	寛正6年4月27日 (1465)	売券	麻生庄下七板之下中田	古門衛門・虎	下七板之地 (赤人堂)	72歩	米2石	
57	下五郎左近田地売券	文明5年10月25日 (1473)	売券	字かいと	五郎左近	下所		米1石	
58	左近次郎田地売券	文明5年12月7日 (1473)	売券	字麻生庄内井ノウラ	左近次郎江門	慶祐之坊	半(180歩カ)	米3石	為道善権門口寄進
59	藤衛門田地売券	文明6年12月17日 (1474)	売券	薩生上郡河東郷麻生下七板伊庭立之前	藤衛門	十七講	36歩	米1石	上米6升所へ入定 得分2斗十七
60	道勢田地売券	文明17年12月17日 (1485)	売券	字麻生庄内クキノ木	道勢	赤人堂	30歩	米3石	「四至東三郎江門半サイノ田ヲ限、南ハ川屋田ヲ限、西ハ正覚院ノ田ヲ限、北ハ竭ヲ限」 「人方国方公事米公方七斗二升六合、是ハ堂右馬へ可納」
61	古川兵衛寄進状及小松大明神夜籠酒寄進状	明応9年2月16日 (1500)	寄進状	薩生上之郡麻生庄内字中田	古川兵衛	門屋二郎衛門	60歩	米3斗	公事米6升6合 「四至限東者道福蔵代、南者道、西者道、北者辻宮内田」 「下七板小松大明神、夜籠酒寄身申、只之十二月十七日酒也 かもん衛門重久」

註

① 蒲生町教育委員会『山部神社中世文書ー蒲生町下麻生ー』(1984年)

② 滋賀自然環境研究会『滋賀県の自然　総合学術調査研究報告』(1979年) 財団法人滋賀県自然保護財団

③ 丸山竜平「炭中溜遺跡の発見」『滋賀文化財だよりNo.5』(1981年) 財団法人滋賀県文化財保護協会

④ 丸山竜平「古代のあけぼの」『八日市市史第一巻　古代』(1983年) 八日市市

⑤ 日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』(1984年)

⑥ 蒲生町教育委員会『町内遺跡分布調査報告書』(1985年)

⑦ 岡本武憲「外広・兵綾塚遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－3』(1986年) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

⑧ 岡本武憲『堂田遺跡現地説明会資料』(1986年) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

⑨ 北川浩「蒲生町市子　市子遺跡」『滋賀文化財だよりNo.108』(1986年)　財団法人滋賀県文化財保護協会

⑩ ⑥に同じ

⑪ 昭和61年度町教委調査による

⑫ 北川浩・山本一博『木村古墳群発掘調査概要報告書』(1983年)　蒲生町教育委員会

⑬ ⑧に同じ

⑭ ⑨に同じ

⑮ ⑦に同じ

⑯ 水野正好「滋賀県蒲生郡蒲生町・飯道塚古墳群発掘調査概要」『滋賀文化財研究所月報1』(1968)　滋賀文化財研究所

⑰ 水野正好『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』(1966年)　滋賀県教育委員会

⑱ 北川浩『本郷遺跡発掘調査報告書』(1987年)　蒲生町教育委員会

⑲ 近藤滋・松沢修「蒲生郡蒲生町・日野町　宮川・岡本古窯跡・大谷古窯跡調査報告」『昭和五十年度　滋賀県文化財調査年報』(1977年)　滋賀県教育委員会

⑳ ⑱に同じ

㉑ 蒲生町教育委員会・滋賀大学考古学ゼミナール『宮井廃寺』(1985年)

㉒ 日本古文化研究所『雪野寺址発掘調査報告』(1937年)

㉓ ⑥に同じ

㉔ 北川浩「七ツ塚遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－5－2』(1982年)　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

㉕ 北川浩「大塚城遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－5－2』(1982年)　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

㉖ 北川浩『団体営は場整備事業に伴う川合古墳群発掘調査報告書』(1986年)　蒲生町教育委員会／⑱に同じ

㉗ 仲川靖「蒲生郡蒲生町宮川アリヲヲジ遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－3』(1986年)　滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

㉘ 丸山竜平・山口利彦「甲賀郡水口町春山の神古窯跡調査報告」『昭和四十八年度　滋賀県文化財調査年報』(1975年)　滋賀県教育委員会／松沢修「水口町蛾道1号古窯跡出土の遺物について」『滋賀文化財だよりNo.39』(1980年)　財団法人滋賀県文化財保護協会／松沢修「山野町金折山古窯跡付近出土の緑釉陶器類の紹介」

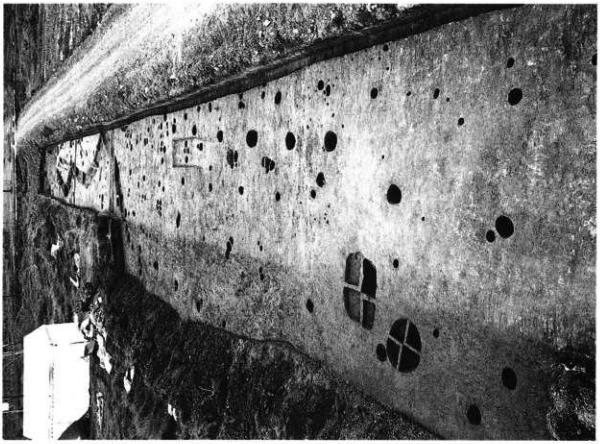
『滋賀埋文ニュース』第55号（1984年）　滋賀県埋蔵文化財センター／日永伊久男「日野町中山出土の緑釉陶器関係遺物について」『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書』第二集（1985年）　日野町教育委員会／日野町教育委員会『作谷窯跡現地説明会資料』(1986年)

㉙ 中川泉三『近江蒲生郡志』巻壹（1923年）　滋賀県蒲生郡役所

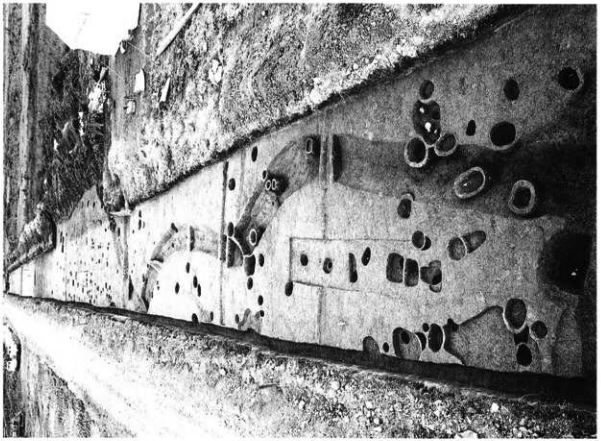
㉚ 菅沼晃次郎他『滋賀県選択無形民俗資料調査報告　旭野神社・高木神社・山部神社ケンケトまつり』(1975年)
麻生庄ケンケト祭保存会／長谷川嘉和他『近江のケンケト祭り・長刀振り』(1986年)　滋賀県教育委員会

図　　版

蒲生町　航空写真



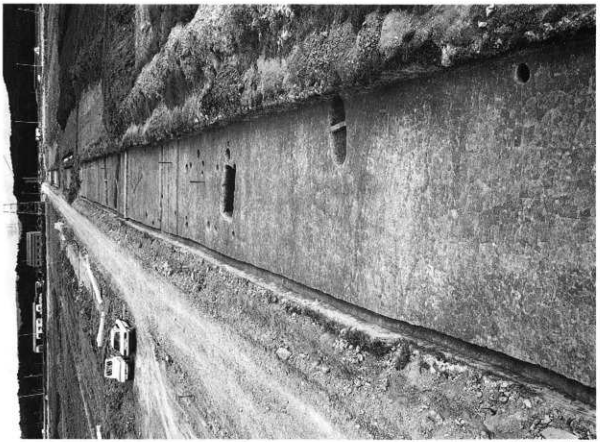
1号排水　掘立柱建物群（東から）



1号排水　掘立柱建物群（西から）

1号排水　土壙2

1号排水　土壙2（部分）



1号排水（西から）

1号排水　竪穴住居群（東から）

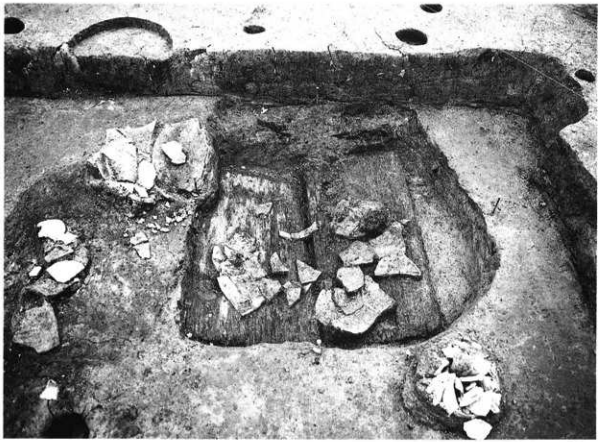
1号排水　竪穴住居2（南から）

1号排水　竪穴住居1（東から）

2号排水　全景（北から）

2号排水　竪穴住居群（北から）

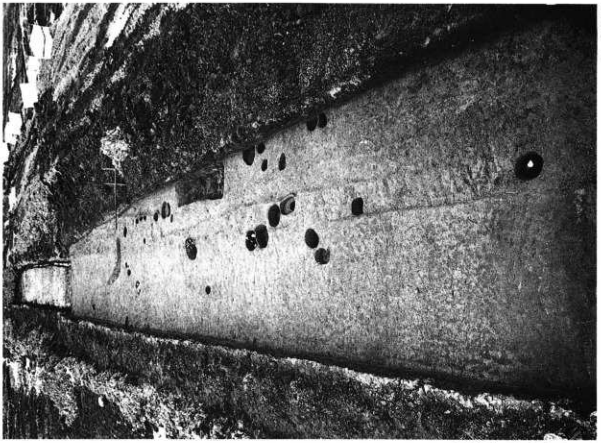
2号排水　竪穴住居3（東から）



2号排水　竪穴住居3貯蔵穴

2号排水　竪穴住居4（南から）

2号排水　溝19（南から）

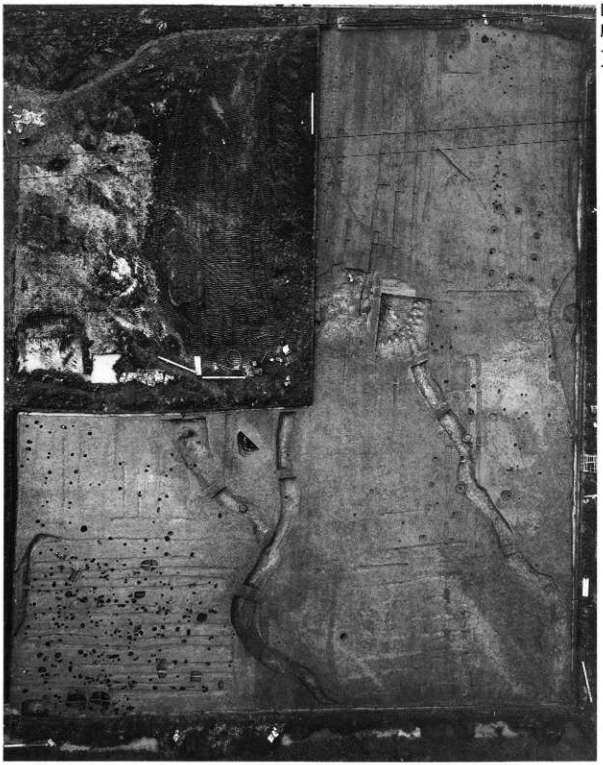


3号排水　柱穴群（南から）

3号排水　柱穴群（部分）

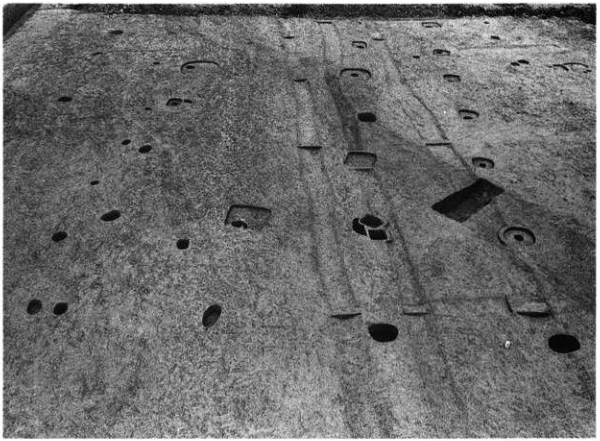
4号排水　竪穴住居10（北から）

4号排水　溝23・24・25（南から）



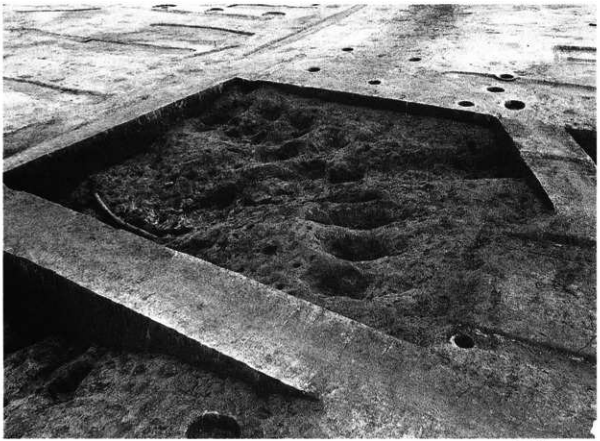
切土A・B　全景

切土A　掘立柱建物7（南から）

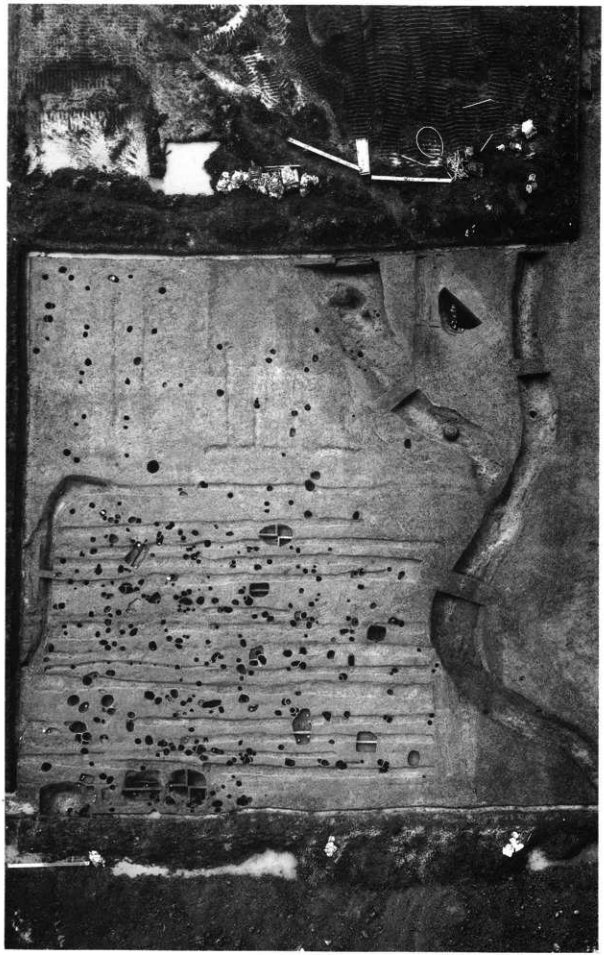


切土A　掘立柱建物8（北から）

切土B　溝29堆土（北から）



切土A　しがらみ状遺構（西から）

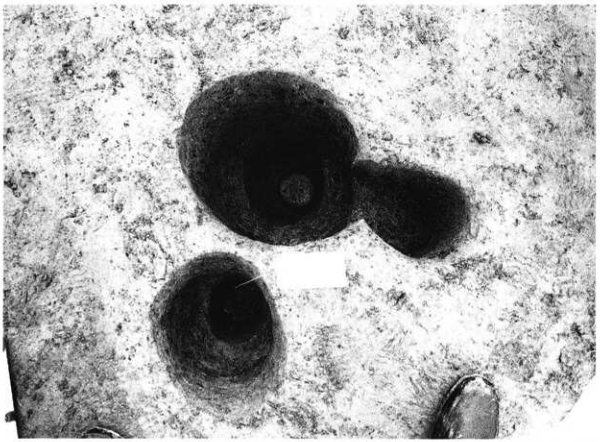


切土B　掘立柱建物群全景

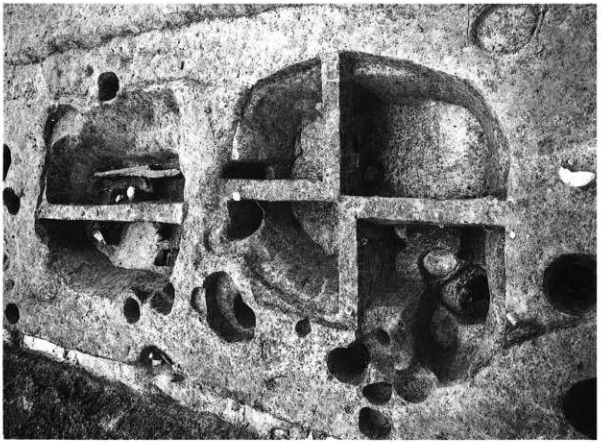
切土B　掘立柱建物群（南から）

切土C　掘立柱建物群（東から）

切土B　柱穴15遺物出土状況

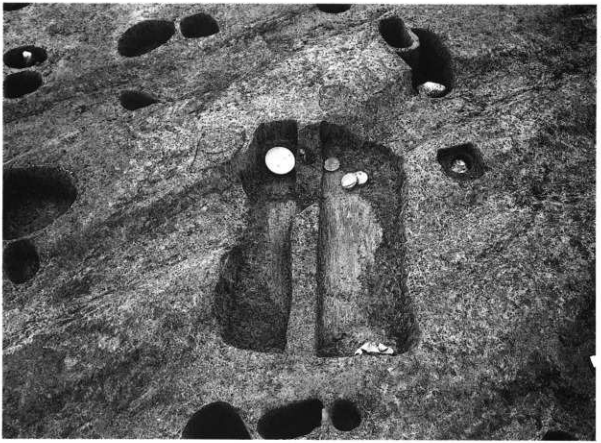


切土B　柱穴167遺物出土状況



切土B　土壙3・4（東から）

切土B　土壙7（東から）



切土B　土壙5（木棺墓・南から）

切土B　井戸1

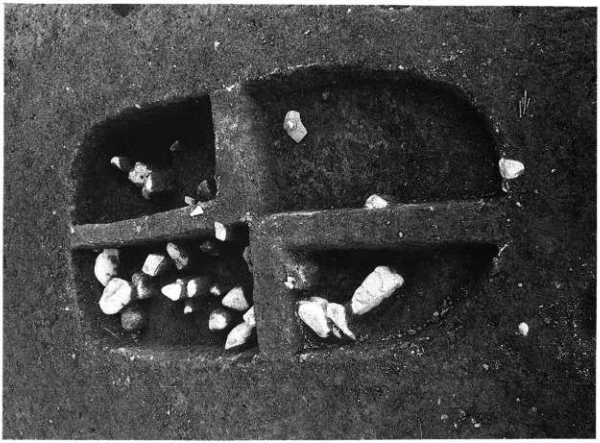
切土D　全景

切土D　南半部（西から）

切土D　北半部（南から）

切土D　溜枡状遺構（東から）

切土D　溜枡状遺構（南壁）

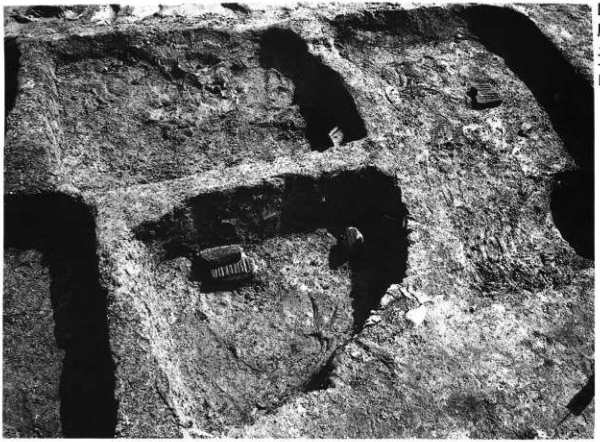


切土D　土壙25

切土D　土壙10

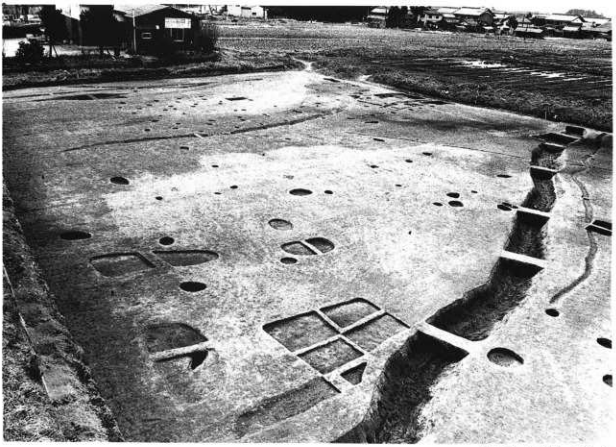
切土D　土壙14

切土D　土壙13

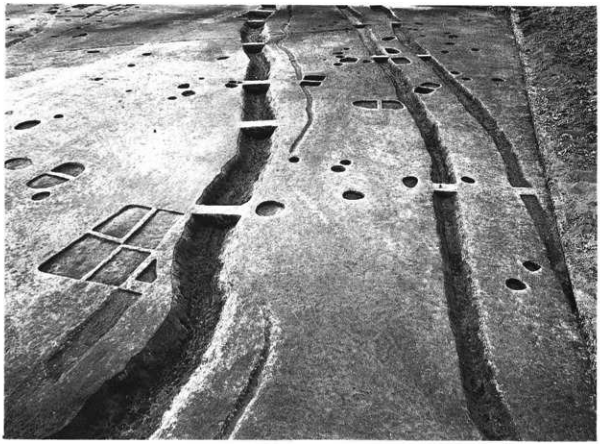


切土D　土壙23・24

切土D　土壙25



切土E　西半部（西から）



切土E　東半部（南から）

切土E　掘立柱建物群（南から）

切土E　自然流路断面

切土F　全景

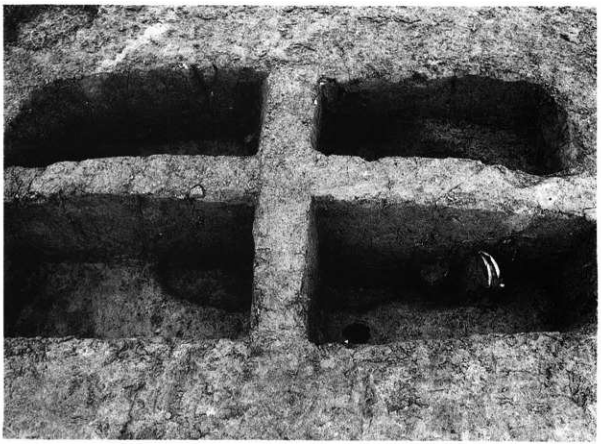
切土F　方形周溝墓群（北から）

切土F　方形周溝墓群（北から）

切土F　竪穴住居11（西から）

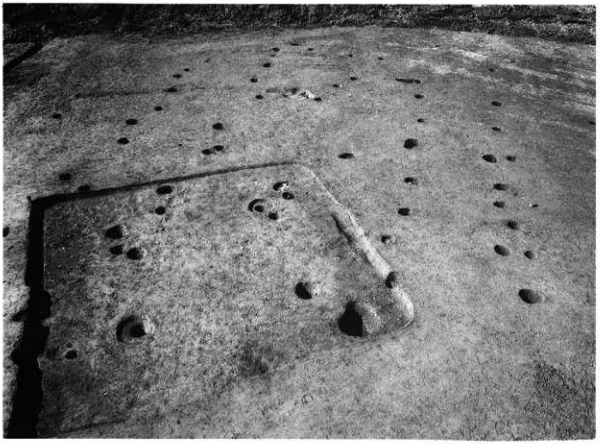
切土F　竪穴住居12（南から）

切土F　掘立柱建物24・25（南から）



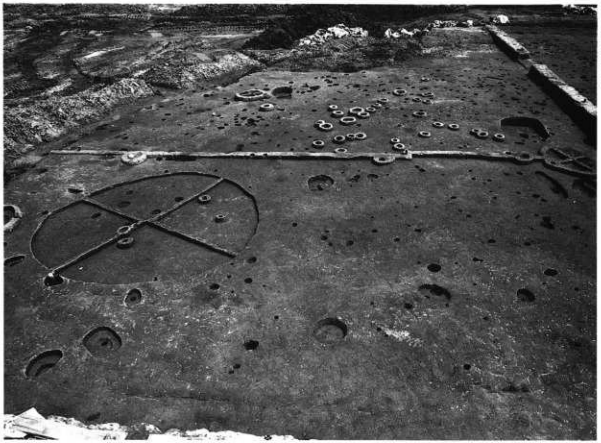
切土F　土壙38（土壙墓・西から）

切土F　掘立柱建物26（西から）



切土F　掘立柱建物28（南から）

切土F下層　全景（縄文時代晩期）

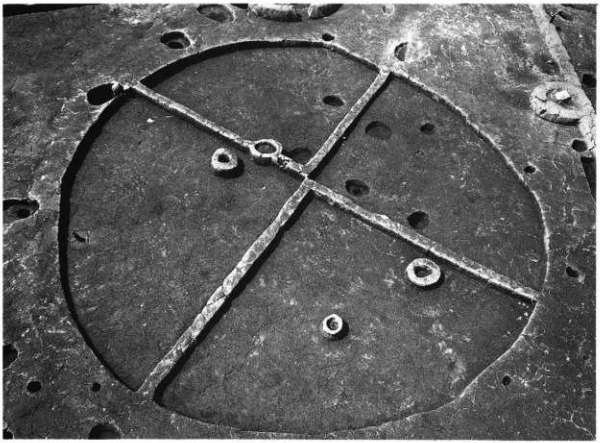


切土F下層　北半部（西から）

切土F下層　北半部（部分）

切土F下層　南半部（北から）

切土F下層　南半部（西から）



切土F下層　竪穴住居13（南から）

切土F下層　竪穴住居13遺物出土状況

93

104

95

94

97

102

99

101

105

129

92

481

271

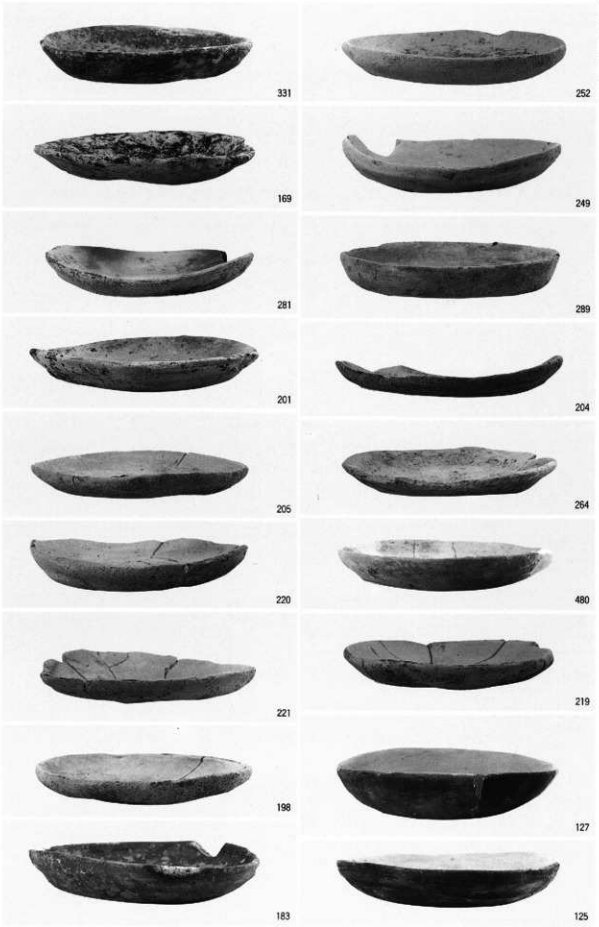
374

260

278

268

222


331
252
169
249
281
289
201
204
205
264
220
480
221
219
198
127
183
125

128

113

124

112

130

136

90

123

120

121

238

122

119

118

292

293

174

206

153

317

154

182

195

157

188

318

209

332

223

1

8

15

9

17

81

16

24

22

4

7

23

14

2

27

30

66

65

63

64

56

62

51

60

54

53

85

61

484

34

40

36

42

58

41

46

44

39

45

52

33

391

395

353

381

351

73

352

75

357

86

482

424

485

396

486

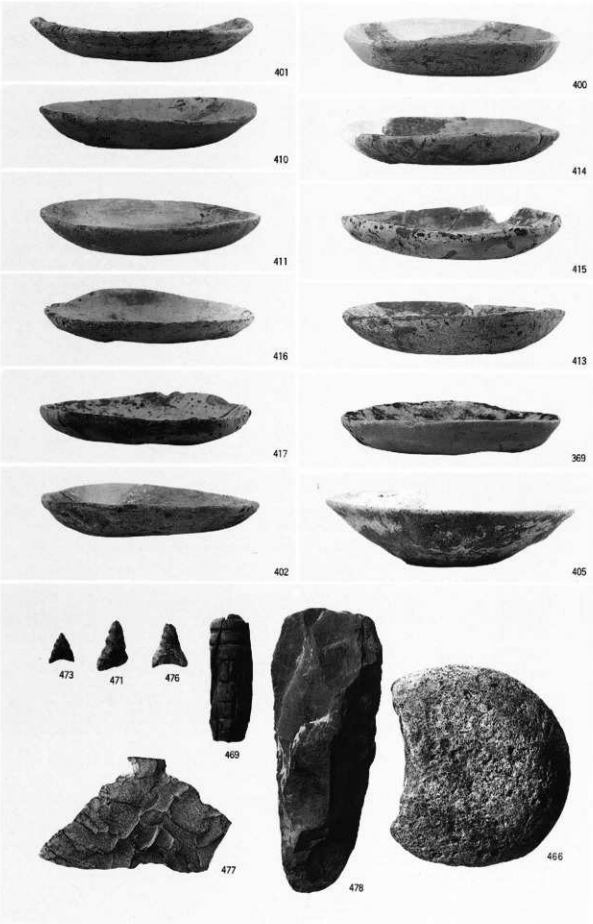
367

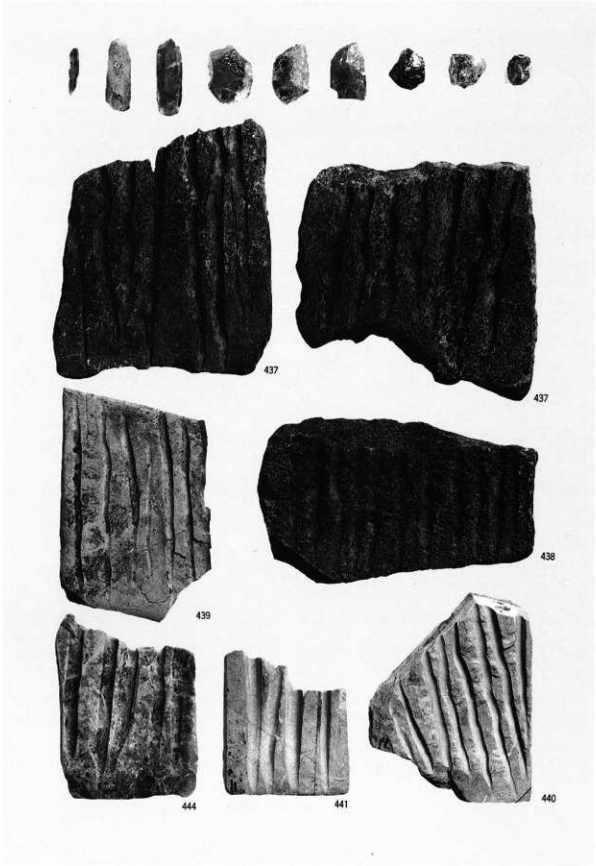
432

430

431

483


401
400
410
414
411
415
416
413
417
369
402
405
473
471
476
469
477
478
466


437
437
438
439
444
441
440

昭和62年３月

ほ場整備関係遺跡調査発掘報告書XIV－５

編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話 0775-24-1121　内線 2536

（財）滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－２
電話　0775－48－９７８１

印刷・製本　有限会社　真　陽　社